静岡大学

地域課題解決支援プロジェクト成果報告書

第6号

目　次

成果報告書第6号の刊行にあたって

地域課題解決支援プロジェクトの概要 …… 3

地域課題一覧

公開シンポジウム「地域課題をめぐるつながりの可能性」 …… 9

伊豆半島における地域づくりの課題と可能性
知的障害者の「生きる力」をアートで伝え「多様で寛容な社会」をクリエイトする
しずおかキッズカフェ
静大フューチャーセンター
農業をもっと身近に～学校放課後児童クラブにおける活動報告～
パネルディスカッション

地域課題解決支援プロジェクト・各地の進捗状況 …… 49

活動報告会「東伊豆学生サミット」 …… 51

第42回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会　研究フォーラム
「地域人材の育成と大学・生涯学習センターの役割」 …… 75

基調講演「地域魅力創造サイクルという発想」
パネルディスカッション

地域間ー大学間連携を通した課題解決

静岡大学地域創造教育センター

2021

成果報告書第６号の刊行にあたって

静岡大学学長
石井　潔

地域連携・社会貢献活動は、本学にとって、これまでもまたこれからもきわめて重要な果たすべき役割の一つとなっています。平成29年には「地域志向大学」宣言を行いましたが、こうした方針は、本学のこれまでの歩み・精神を継承し発展させるものであり、地域に根差した大学という本学の方向性をあらためて確認するものです。

平成23年度に学生・教職員が地域社会と協働で取り組む地域活性化活動を支援する「地域連携応援プロジェクト」を開始し、今年度までのべ179件の応募に対し、これまで122件を採択して支援を行ってきました。

平成25年度からは、これまで大学との接点がない地域からも広く課題を公募する「地域課題解決支援プロジェクト」を立ち上げ、第1期・第2期の公募で県内各地から計44件の応募をいただき、地域に赴きヒアリングを行って、地域課題データベースを作成・公開しています。興味関心を持った教職員・学生とのマッチングをはかりながら、年度をまたいで諸課題に取り組んでいますが、その後の成果も積み上がり、このほど成果報告書第6号を刊行する運びとなりました。

この成果報告書が扱っている地域課題解決支援のあった1年間は、コロナ禍に翻弄された1年でもありました。新型コロナの感染状況は本学の教育・研究活動のあり方を大きく左右しましたが、学外との交流が主となる地域連携･社会貢献活動に、特に強く影響を及ぼしたと言えます。

授業の一環である地域創造学環フィールドワークは、昨年度末から現在にいたるまで現地に行く回数を大きく減らし、オンラインでの交流が主となりました。地域連携応援プロジェクトも当初の計画通り実施されたものはごく少数となっています。そんな中でも、地域課題解決支援プロジェクトの選定地域になっている伊豆半島地域では、様々な活動が行われました。

活動の中心となりつつあるのは、昨年4月に立ち上がった未来社会デザイン機構であり、東部サテライト「三余塾」です。東部サテライトが立地する伊豆市、「松崎町の未来と観光を考える」プロジェクトが新たに立ち上がった松崎町など、様々な課題が山積する伊豆半島地域で活動を展開しながら、共通の課題を有する地域・大学とも連携し、これからの地域のあり方を考えていきます。

これまで刊行した成果報告書でも述べたように、大学の構成員が恒常的に社会連携・地域貢献活動に携わることで、教育・研究のあり方が深化・拡充する、それがまた次なる社会連携につながるといった、教育・研究・社会連携の好循環をつくることが本学の目指している方向性です。今回の報告書で取り上げた種々の取組も地域に根付こうとしているところですが、ご一読の上、ご助言、ご示唆を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

地域課題解決支援プロジェクトの概要

「地域課題解決支援プロジェクト」は、地域社会が抱える課題を大学が再発見し、大学のもつ様々な資源を活かしながら地域と大学が連携し、対応策をともに考え、協働することによって課題解決を支援する事業です。大学と地域との新たな連携を立ち上げるべく、これまで大学と接点がなかった地域や団体も含め、広く学外から地域課題を公募し、県内全域から27件（準備不足のため辞退された1件を除く）の応募があり、重点的に取り組む課題群をモデル事業として取り組みました。

モデル事業以外の課題についても、提案地域に赴いてヒアリングを行い、地域課題データベースとして学内外に広報し、興味関心をもつ教職員・学生とのマッチングをはかってきました。

第1期の地域課題に取り組む中で、継続的に地域とかかわった学生たちの成長がみられました。そこで、これまでの地域課題に引き続き取り組みながら、平成28年度には第2期公募として、継続的に学生を受け入れていただける地域課題の募集を行い、全15件の課題が寄せられました。

寄せられた42件の提案課題については、ウェブサイトにて一般公開中であり、学内では各研究室・学生とのマッチングを進めています。学内外を問わず、各課題にご協力いただける研究室・教職員・学生・その他関係機関の皆様は、当センターまでご連絡ください。担当者がコーディネートをいたします。

・ウェブサイトURL：http://www.lc.shizuoka.ac.jp/areastudies_index.html

・連絡先：TEL 054-238-4817、E-mail：kaiho@suml.cii.shizuoka.ac.jp

地域課題一覧

≪第１期≫

No.	応募団体/関連団体	現在困っていること（地域課題）について	大学に期待する支援について
1	夢の里みつかわあぐりぃ（袋井市）	三川地区の課題は、『三川が誇る3つの財産（農業・環境・人）をより合わせ、欲しい、行きたい、住みたい地区を創る』こと。人との絆を大切に、心通い温もりのあるまちづくりに取り組みたい。	①出会いの場の提供をし、結婚する人を増やす方策 ②袋井市地域の活性化方策 ③地産地消の推進のための方策
2	御前崎市役所	御前崎市では過去の人口増加を背景に、原子力関連交付金等により公共施設の整備を進めたが、少子高齢化や人口減少により公共施設のあり方が変化した。公共施設マネジメントへの取組が必要である。	①今後の当市の財政状況分析 ②公共施設マネジメントの可能性及び取組手法 ③公共施設の費用便益分析
3	ユークロニア株式会社（静岡市）	県内の小中学校では睡眠不足からくる問題が顕在化している。「睡眠授業」の依頼が増えているが、研修にはマンパワーが不足。地域の課題として睡眠を整えることができる仕組み作りが必要である。	①睡眠教育の標準化や効果検証 ②教育者の育成 ③静岡独自の睡眠問題の調査により、地域にあった生活スタイルを探る。
4	NPO複合力（静岡市）	両河内地域の高齢化は進み、休講農地が増えている。森林公園「やすらぎの森」は、老朽化にもかかわらず年間30万人が訪れる。脱・限界集落の手がかりを得て、地域を活性化する手立てを考えたい。	①農産物の品質を高め、商品化する栽培知識技術。竹林等を伐採し、循環型資源とする知識技術。 ②グリーンツーリズムを活性化するための知識技術 ③大学生など若いマンパワーが恒常的に来園する方策
5	静岡市北部生涯学習センター美和分館	潜在的な利用者ニーズの把握が十分ではない。広く地域住民の生涯学習に対するニーズ把握のため調査を企画した。それにより、一層充実した学びの機会を地域に提供し、地域コミュニティ活動の推進につなげたい。	地域住民に対するアンケート調査への助言及び分析

6	静岡市立登呂博物館	リニューアルオープン後、年々来館者数が減少している。イメージ・キャラクターを使った誘客活動を行ってきたが、マンネリ状態になっている。また、多様化する来館者に対応するため、多言語仕様の資料が必要となる。	①イメージキャラクターを活用した教育普及事業の開催への支援。 ②登呂遺跡および登呂博物館の概要を紹介した多言語対応パンフレットの作成とHPの構築
7	NPO法人 富士川っ子の会 （富士市）	子育て支援中心の活動を、今後は生涯学習の観点から事業を広めていく必要がある。当NPO、行政、企業が協働できるようなテーマで解決を図る活動を展開する。活動拠点の確保、会員の若返り施策と後継者の育成が課題。	①当団体、行政、企業との協働により、団体の若返りと活動の幅を広げ、定款に示す事業展開の具体化。 ②活動拠点の確保。
8	油山川のマコモを根絶する会 （袋井市）	油山川では700mにわたってマコモが繁殖し、流下能力を著しく低下させ、景観上からも問題になっている。河川管理者が年に1回刈り取りを行っているが、マコモは繁殖力が旺盛で、2カ月もすると元の状態に戻ってしまう。	活動の中で、マコモは根が残っていると再生するが、完全に取り出せば再生しないこと、天地返しにより根が腐り取り出せることが分かった。マコモの生態研究、根絶手法の検証で研究支援を期待する。
9	袋井市三川自治会連合会	高齢者が地域社会に飛び出せない、“生き甲斐や社会貢献”の機会が確保できない。	①高齢者の意識調査 ②高齢者のライフスタイルの解析 ③高齢者の社会進出の仕掛けづくり ④全国での成功（失敗）事例の紹介 ⑤街づくりワークショップ等への共同参加
10	南伊豆新生機構 （南伊豆町）	①未利用の土地の有効活用がされていない。 ②地場産業が稼働していないため人口が流出している。 ③人材が育っていないため、外部の人材との交流がうまくできていない。 ④行政の協力体制がない。	①知的アドバイスの支援 ②人材の支援 ③資金の支援
11	焼津市役所総務部政策企画課	焼津市では、高度成長期の急激な人口増を背景に公共施設の整備を進めてきたが、老朽化が進んでいる。効果的に公共施設をマネジメントしていく取組が求められている。	地域の人口推移の検証や施設の利用状況を詳細に分析し、老朽化を迎えている集会施設の複合化案について提案頂き、市民への説明、話合いを経て、建設計画を実現可能レベルに調整
12	浮橋地域のスローフードを考える会 （伊豆の国市）	中山間地の活性化	①大学生の視点から、中山間地を幅広い世代にアピールするための意見がほしい。 ②ワークショップを取り入れながら、地元の自然を最大限に利用し、農業・観光へと循環させるプランを検討してほしい。
13	株式会社アイ・クリエイティブ／ジョブトレーニング事業 （静岡市）	①ニート（若年無業者）増加問題。 ②静岡県耕作放棄地増加問題。	①大学に望むこと…ニート・ひきこもりや発達障害などの教育心理の知恵を貸してほしい。 ②ジョブトレーニングが提供するもの…ゼミ等の一環として参加してもらうことで、実態現場＋学びの場を提供する。
14	松崎町	町内にはなまこ壁を配した歴史的建造物が残されている。所有者の高齢化、維持のコスト高等で取り壊すことが多い。町の財産ではあるが個人の所有物である歴史的建造物を、いかに後世に残していくべきか悩んでいる。	最小の費用で最大の効果のある維持や修繕方法を一緒に考え、古民家を利用したまちづくり手法と収益事業のアドバイスや、学生による町おこしや収益事業の模索など。
15	松崎町	町民の森「牛原山」を利活用したいが、中途半端に行政主導で整備してきたため町民の利用が少ない。眺望はよく晴れていれば展望台からは富士山も望める素晴らしい山だが、利用されない。	人が集まる仕掛けや、町民が自ら維持や修繕に携われる方法を一緒に考え、里山の素晴らしさを内外に発信し、愛され利用される森にしたい。アドバイスや学生の知力、体力、気力を町おこしに活かしたい。
16	松崎町	松崎町では、ソフト、ハード両面からの防災施策が急務である。津波対策として水門の建設や防潮堤の嵩上げなど必要な事業だが、景観などの問題で全体の理解が得られない。	防災機能だけの無機質な防潮堤や水門を、どうしたら景観に配慮したデザインや機能を持たせることができるか、一緒に考えてほしい。
17	松崎町	過疎化・少子高齢化により、当町もご多分に漏れず耕作放棄地が急増してきている。このままでは町内の農地が荒地だらけになり、今年度加盟を認められた「日本で最も美しい村」連合に恥ずかしい姿をさらしかねない。	耕作放棄地の解消だけでなく、永続的に利活用し続けることができる仕掛けづくりを期待する。当町での有効な作物の選別や耕作方法の指導、学生による農業体験事業化などでの協力がほしい。
18	松崎町商工会	松崎町の中心市街地である商店街が、過疎化・少子高齢化によりどんどん寂れている。このままではゴーストタウン化してしまう。現在でも転居し、空き地になるところが後を絶たない。空き店舗も多く、シャッター商店街になりつつある。	商店街の魅力発掘と、買い物弱者である高齢者への商店街への買い物支援法。商店街のアート誘致、コミュニティ公園化について助言がほしい。全体的なデザインについても関わってほしい。

19	浜松都市環境フォーラム （浜松市）	浜松市はマイカーに依存した都市となっている。深刻な渋滞問題が予測され、抜本的な交通対策が急務である。工業都市として発展してきた浜松が、今後も持続的に発展していくには観光・文化都市としてのまちづくりが必要になる。	持続可能な都市づくりは、行政・民間が扱いにくい空白の分野で、大学の持つ知的・人的資源を活用して研究する価値が高く、実現を前提に「特区」の認定を受けられるような研究を期待したい。
20	伊豆半島ジオパーク推進協議会	伊豆半島ジオパークの進捗を判断する評価指標や調査方法の不足。貴重な資源の保全、教育、防災、地域振興等、様々な分野での取組があるが、活動の検証とフィードバックが難しい。	伊豆半島ジオパークの活動の進捗状況を把握し、フィードバックするのにどのような調査や指標が適当なのか、大学の知的、人的資源を活かしたモデル調査の実施、各種資料の収集と分析等。
21	三保の松原フューチャーセンター （静岡市）	①三保の松原の保全。 ②三保の魅力を知り、次世代へ伝えていく仕組みづくり。 ③三保住民の安全な生活環境の確保。 三保で活動している団体は数多く存在するが、横の連携が取れておらず、協働できるきっかけがほしい。	①耕作放棄地を活用し、三保自生の松から植樹用の松を育て、商品化するための支援。 ②子供や住民が気軽に参加できるイベントを開催し、地域の関わりを強化するための支援。
22	焼津市市民活動交流センター運営協議会	焼津市内には市民団体が数多くあるが、団体相互の交流が少なく、協働もできていない。焼津市の抱える様々な問題に行政、企業、市民が協働して解決策を模索するようになれば、もっと良いまちになると思われる。	市民活動の実態を知り、その活動を直接・間接に支援できる人材育成を依頼したい。センターへの支援として、情報発信能力の強化、交流会の企画立案、市民が参加しやすい方法論の検討などがある。
23	静岡市葵生涯学習センター	①「生涯学習」の学習格差の解消 ②「生涯学習」に興味・関心がない地域住民に「生涯学習」に取り組んでいただけるよう支援していく	①地域の現状調査の一連の事業の中で、調査方法や課題解消への取組方法、評価方法へのアドバイスがほしい。 ②大学生等の若年層の認知を高める手法を開発、事業実施をする。
24	伊豆を愛する会 （南伊豆町）	ジオサイト候補地の里山を所有しているが、安全面の不安を理由に、南伊豆町観光協会と行政は消極的である。これまで500名以上の方が問題なく見学しており、地域の不安を取り除くために力を貸してほしい。	①岩石構造専門家の派遣をお願いしたい。 ②石切り場には、昔の人が文字を掘った跡が何か所かあり、解明されていないことも多く、歴史文化の専門家の派遣をお願いしたい。
25	静岡県／松崎町	①棚田保全・活用－石部地区の棚田を保全するとともに活用を検討。 ②特産品を活用して加工品づくりと販路拡大までを検討。 ③伝統芸能保存。 ④大学と地域のネットワーク化。	①既存のつながりでは生み出されていない部分の開拓に期待。 ②新しい視点で工夫を加えた加工品を開発してほしい。 ③継続的課題解決活動に取り組み、地元との連携を築いてほしい。
26	静岡県／東伊豆町	①エコタウンとしての売り出しに向けたガイドシステムの研究。 ②地域づくりインターンとしての学生の参加。 ③オリーブの里づくりへの大学の参画。	①エコ資源の活用方法の提案。 ②従来より長期的な関わりが可能な大学生の派遣と、長期的な関わりを求める。 ③オリーブの栽培の可能性について、植樹の段階からの研究を希望。
27	静岡県／南伊豆町	①竹の子振興方策の検討－産地化に取り組んでいるが、竹林の利活用についての研究が必要。 ②過疎地域における公共交通サービスの在り方の検討が課題。	①従来と異なる新たな竹の子の活用策の提案に期待。 ②集落が分散し、主要道路周辺のみを運行するのではカバーしきれない公共交通網維持の問題の検討に期待。

≪第２期≫

No.	応募団体/関連団体	現在困っていること（地域課題）について	大学に期待する支援について
1	東伊豆町観光協会 （東伊豆町）	東伊豆のジオスポット・細野高原の「すすき祭り」は、町民による活動が実を結び集客が伸び始めた現在、さらなる活動の展開が課題となる。町内へ観光客を誘導するための食品開発・土産物の展開などを通して、細野高原・東伊豆町の価値を高めていきたい。	学生たちには細野高原イベント委員会へ参画という形での支援を期待する。参画することによって、実行委員会や地域住民と交流を図るとともに、地域の実態を学生たちの目線で捉え、問題提起・解決方法の提案・提案の実行を実行委員会や当団体とともに作り上げていきたい。
2	静岡市葵生涯学習センター 指定管理者（公財）静岡市文化振興財団	静岡市生涯学習センターは地域住民が豊かな人生を送るための場として活用されているが、学生・勤労者層は利用率が低い。すべての地域住民の生涯学習活動を充実し、地域と密着した活動とするため、事業の企画立案・運営に地域住民自身、特に若年層が参画することが重要である。	①市民協働・若者参画による生涯学習の活性化のため継続的な意識調査において、企画・実施・分析作業を支援してほしい。 ②若年層に対して、施設や生涯学習の認知を高めるための手法を開発・事業実施をしているが、そのプロセスに参画してほしい。 ③実習生制度への学生参加を推進してほしい。

3	富士のさとの森づくり実行委員会（御殿場市）	国立中央青少年交流の家には様々な樹木が存在するが、一定の考え方をもって植栽するべきであるとの意見が寄せられている。すでにグランドデザインが一応存在しているが、これをひとつのたたき台にしてコンセプトを固めていくことが必要である。	①学生の意見を反映した森づくりのグランドデザインの再構築作業 ②グランドデザイン再構築に必要な森林の伐採等の作業 ③既存の草花の生育等に配慮した環境の専門家の指導、助言（整備時期、整備内容の決定）
4	松崎町	旧依田邸は築300年以上の歴史をもつ建造物で、伊豆半島の発展の原点であり、歴史的・文化的な価値が高いが、修繕・保存という課題に直面している。また町の地域資源として活用し、まちおこしの拠点とする方策を立案・実行することも課題である。	最少の費用で最大の効果のある維持や修繕方法を一緒に考え、歴史ある建造物を利用したまちづくり手法を提案してほしい。教職員・学生を送り出してフィールドワークとして支援していただきたい。
5	松崎町	当町では近隣に大学がなく、せっかく素晴らしい公開講座などがあっても、移動時間を考えると参加をあきらめるしかない。また、大学生との交流に時間とコストがかかるため、いつ何時でも交流が持てる状態にない。	今夏（2016年7月）オープンした、シェアオフィス「ふれあいとーふや。」において、静大の公開講座を受講できるように配信を検討していただきたい。大学生との交流にも使っていただきたい。
6	松崎町	松崎町が抱える課題として、人口集中地域から遠いこと、交通手段が整っていないことがあげられる。そうしたハンディキャップを克服して交流を進める方法としてのICTの活用が考えられる。光ファイバー網の整備をしたが、利活用の具体的な方法が見つからずにいる。	防災や観光、福祉をICT技術で地方の不利、不便さを解消できる技術や提案の提供。
7	松崎町	全国で活発に行われているふるさと納税だが、当町では返礼品競争ではないふるさと納税本来の趣旨を踏まえた活性化を検討しているが、思ったように納税額が伸びない。	外部から見た松崎町の魅力を探り、そのうえでどのような返礼品やどうしたら納税満足度があがるかを一緒に研究してほしい。
8	松崎町	町内に大学の施設や研究室などがないため、産官学の連携した取り組みができない。また、仕事が少ないため若い人が出ていく。	新しい働き方や隙間産業などを学生と一緒に考案していただきたい。 例：耕作放棄地や放棄果樹園を集約し、都市部の週末農業体験のニーズへ繋げるなど。
9	茶夢来（さむらい）（菊川市）	環境整備や農業を核とした新たなライフスタイルを実現する地域づくりが必要となっており、食と農の拠点創造、食育の場づくりを目指している。地域住民の意識調査やニーズ調査をベースに、地域住民が一体となった取り組みを行っていきたい。	農業を核とした食育、地域食材を活用した商品開発、レシピ開発、ノルディックウォーキングを活用した地域健康づくりと観光開発など地域が一体となったまちづくりを目指したい。菊川ブランドのストーリー性の創造に大学の支援をいただきたい。
10	NPO法人 富士川っ子の会 （富士市）	地域全体に「かわっこカフェ」の存在を周知し、自由に集える居場所であることを認知させる手立てを見出すことが課題である。参加者には「かわっこカフェ」の存在意義が理解されつつあるが、地域住民に「一度は行ってみようと思わせる仕組みの工夫」が必要である。	遊び塾と「かわっこカフェ」の活動を通して、次の点を明確にしたアドバイス。 ①地域に求められている居場所とはどんなものか ②それはどのように形作られるべきか ③地域での連携で欠かせないものは何か
11	NPO法人 富士川っ子の会 （富士市）	富士市の高齢化率は全国平均程度だが、要介護者数が多く深刻な問題となっている。解決法として、高齢者が後期高齢者の介護を担当するようにして、循環型の介護要員を確保するという構想のもとで活動を進めている。	課題に対応する団体設立の可能性と実現のために必要なことのアドバイスをいただきたい。 ①介護者と要介護者の区分方法 ②適正報酬額の算出 ③団体の設立及びあるべき介護支援形態
12	自立快活プログラム実施　自立援助ルーム 訪問レストランf （浜松市北区）	障碍に対しての理解と認知が低すぎ、まだ障碍者であることをカミングアウトできない社会性が問題である。自立して一人暮らしする障碍者も増えてきたが、結果的に介助者の手を借りるため、介助者本位のサービスを受けている。本来的な意味での自立援助が必要である。	①事業自体が本格始動していないので、まず、グレーゾーンにどれくらいの障碍者が存在しているのか示してほしい。 ②障碍者のための恋愛対策に共に踏み込んでほしい。 ③理解促進を深めるための方策を検討してほしい。
13	認定NPO法人 クリエイティブサポートレッツ （浜松市西区）	障害福祉サービス事業所「アルス・ノヴァ」では、毎日30名以上の障害を抱えた方々が通ってきている。「多様で寛容な社会」の実現のため、できるだけ多くの人にこの場を体感してもらいたいが、一般の方々に足を運んでもらうことが難しい。	①学生たち自身が障害福祉施設を体験・体感してほしい。 ②その体験をもとに、どうしたら自分の知り合いが障害福祉施設に関心をもつのか考え、実際に身近な人を誘ってきてもらいたい。 ③広く一般の人に関心をもってもらうための方法を共に考え実行していきたい。

14	空き家再生プロジェクト （静岡市駿河区）	空き家の利活用を促進し、地域社会の活性化に貢献することを課題として、次のような活動をしている。 ①空き家に関する研究活動（発生と利活用方法、意識調査） ②空き家の利活用にむけた啓発活動（イベント・セミナー） ③空き家再生活動（マッチングサポート・リノベーション）	積極的にまちづくりへ関わることを目指して、空き家を再生したサテライト研究室を設けて、地域を活性化するためのリサーチ・研究を進めているが、この活動に継続的に関わってもらいたい。
15	南伊豆町	伊豆半島最南端に位置し、人口減少と地方経済の縮減が続き、その克服が基本的課題である。一方、豊かな自然環境をはじめとした地域資源も有し、大都市圏との連携を取りながら健康創造のまちづくりを進めているが、大学と連携することによってそうした取り組みを加速できる。	宿泊型のフィールドワークや長期休暇を利用したインターンシップ等を企画し、南伊豆ならではの地域資源を活かしたまちづくりに関わってほしい。

地域課題をきっかけに、それぞれの地域に入り、住民の方と交流し、課題解決を一緒に考えることを通して、学生たちは大きく成長しています。

これまでに取り組んできた各課題の進捗状況は、こちらからご確認ください。

http://www.lc.shizuoka.ac.jp/areastudies_history_list.php

公開シンポジウム

地域課題をめぐるつながりの可能性

日　時：2019年12月26日（木）13:15～17:00
会　場：静岡大学静岡キャンパス　共通教育A棟301講義室
プログラム：
（1）地域連携・課題解決支援の事例報告
報告1「伊豆半島における地域づくりの課題と可能性」
報告者：深澤準弥（松崎町教育委員会）
山口一実（南伊豆町地方創生室）
荒武優希（NPO法人ローカルデザインネットワーク理事長）
報告2「知的障害者の「生きる力」をアートで伝え「多様で寛容な社会」をクリエイトする」
報告者：久保田 翠（NPO法人クリエイティブサポート・レッツ理事長）
報告3「しずおかキッズカフェ」
報告者：小林タバサ（しずおかキッズカフェ代表）
報告4「静大フューチャーセンター」
報告者：増田彩香（静大フューチャーセンター5代目学生ディレクター）
小田しずく（静大フューチャーセンター5代目学生ディレクター）
報告5「農業をもっと身近に～学校放課後児童クラブにおける活動報告～」
報告者：榊原宏美（静岡県立静岡農業高等学校教諭）
田澤柊菜、村越星南（いきものがかり）
（2）パネルディスカッション
パネリスト：報告者、課題提案者
コーディネーター：阿部耕也（静岡大学地域創造教育センター）

阿部（コーディネーター）――この「地域課題解決支援プロジェクト」は、静岡大学がさまざまな地域住民の方々や学生などから、地域のさまざまな課題を一緒に解決したいという申し出をいただいて動いているプロジェクトです。2013（平成25）年（1期）と2016（平成28）年（2期）の2回、地域課題を提案していただき、現在42の課題をいただきました。

そのうち、対応できているところは本当に少ないのですが、今回のプログラムをご覧いただいても、報告1にあるように、松崎町や南伊豆町から課題提案をいただいて、学生たちが入っていく取り組みがあります。伊豆半島南部の賀茂地域からは、42の課題のうち18を提案していただいています。最初にその報告をしていただきます。

また、浜松に「クリエイティブサポート・レッツ」というNPOがあり、その理事長を務める久保田翠さんにもお越しいただいています。今回、西部の方は全然サポートできていないのですが、こういう課題や取り組みがあるのだということをご報告いただきます。

先ほど、このプロジェクトは2013年から始まったと言いましたが、初期の段階から解決支援に関わっているのが静大フューチャーセンターです。今回、宇賀田先生はご都合がつかなかったのですが、現役学生の運営ディレクター2人に報告していただきます。

それから実は、高校の段階でもさまざまな地域貢献・地域連携の取り組みがあります。今回は、静岡県立静岡農業高校の榊原先生、それから「いきものがかり」の皆さんに報告していただき

ます。

それでは最初に、地域連携・地域課題解決支援の事例報告に入ります。先ほど、フューチャーセンターが最初に大学の担い手として関わったと言いましたが、その舞台が松崎町で、松崎町だけで11ぐらいの課題が出ています。実は、これから報告いただく深澤さんがほとんど提案されているのですが、本当にわれわれを温かく迎えていただいて、今はフィールドワークが展開していますが、さまざまな取り組みの基を作っていただいた方です。それでは深澤さん、よろしくお願いします。

報告 1

伊豆半島における地域づくりの課題と可能性

松崎町における課題と可能性

深澤準弥（松崎町教育委員会）

1．松崎町の紹介

私は、伊豆半島の西南部・松崎町から参りました。町の中心部近くには牛原山があり、そこからは富士山が見えます。隣町の西伊豆町には宿泊施設がたくさんある堂ヶ島という地域があり、そこに新港湾ができて10年たつのですが、あまり活用されていないということで、今さまざまな形で活用を考えています。先日は、県知事が松崎町へのフェリー着岸について検討するという発言もしたようです。来年（2020年）は県の力を借りて、係留はできませんが、伊豆半島の沖に豪華客船「飛鳥Ⅱ」を誘客しています。このように、いろいろなことを通して町を活性化させようと思い、関わっています。

松崎町の位置は、伊豆半島の駿河湾側の一番南側になります。南伊豆町が半島の最南端で、その東側に下田市、河津町、その北に東伊豆町があるという位置関係になります（図1）。

図1　松崎町の位置（松崎町観光案内より）

松崎町の歴史的な建物としては、岩科学校があります。先日国宝に認定された長野の開智学校と姉妹間提携をしている昔の尋常小学校です。それから、石部の棚田があります。日本の原風景を残そうと十数年前に復田した田んぼです。機械が入らないので、全国的にも珍しい、すべて手作業で稲作をしているという日本一非効率な田んぼです。

先日、出生数が発表されましたが、何も対策をしなければ日本全体でどんどん人口が減っていくということが示されました。松崎町の人口は現在約6600人ですが、このまま行けば20年後には5000人を切ると推計されています。地域から人がいなくなっていくことの重大さに日本中が直面していると思います。

2．大学との連携

静岡大学との連携のきっかけは、2013年に始まった「地域課題解決支援プロジェクト」でした。われわれの町は課題が豊富だということをアピールしようと思って、松崎町だけで18個出しました。そもそも大学などとの連携を考えると、伊豆南部には通える大学がないので、大学との連携を見いだすためにこのプロジェクトに参加しました。大学や学生の力をお借りする代わりに、大学や学生にとって課題解決学習のフィールドを提供することで、双方がウィンウィンの

関係になればと思い、これまでいろいろ活動してきました。

課題としては、人口流出による過疎化、少子化による人口減少と高齢化、地域産業の担い手（後継者）不足などがあります。このあたりは日本全国が直面しつつあります。業種によってはAIに取って代わられる前になくなってしまいそうなところも出てきています。それから、人・金・知恵が足りていません。地元の若い人たちにアピールできるような魅力ある職業が「ない」というよりも、「選ばれない」といった方が正しいかもしれません。働く場所はあるのですが、なかなか魅力を感じられないわけです。また、地域資源の価値が理解されていない部分があります。それから、観光と防災の両立も挙げられます。このように日本が背負っていかなければならない課題がすべてあるので、これらの課題を解決する方策が何か一つでも出てくれば、日本の最先端になるのではないかと思います。

現在、プロジェクトでは、地域創造学環のフィールドワークの現場として使っていただいています。衰退していく経済をどうしたらいいかということで、商店街の振興や誘客に取り組んだり、観光と防災の両立を考えたりしています。東北を見ていただければ分かるとおり、復興、復興と言いながら、日本全体が縮小する中で衰退を余儀なくされているのが現状です。それを何とか打破するために、いろいろ工夫しています。

いろいろな大学との連携をきっかけに、さまざまな人たちが松崎町のフィールドで活躍したり学習したりしていて、先日も「松崎の若者が集まる未来デザイン会議」で「トレジャーハント」という松崎の宝を探すイベントを企画しました（図2）。参加した早稲田大学の卯月ゼミナールは景観をきっかけに誘致しました。静大はずっとフィールドワークで入ってもらっていますし、常葉大学は元々、棚田保全の関係で十数年関わっていましたが、このようなまちづくり関係は今までなく、また、若い人たちがみんなで集まって何かをする機会がありませんでした。実はこれは、松崎出身で千葉の麗澤大学に通う女子学生の発案で実施され、今後も継続していきます。

図2　「松崎の若者が集まる未来デザイン会議」イベント告知看板

その中で、地方から日本を再生させなければ駄目だと国も言っているし、それを若い人たちの力で行うことで何か新しいアイデアがどんどん出てくるようになります。こうしたつながりの可能性がどんどん広がっていると思っています。

トレジャーハントの中では、例えば「伊豆・松崎・であい村　蔵ら」というおばあちゃんたちが開いた食堂があって、自立支援の関係で先日、総務大臣表彰を受けたのですが、そういったところにも入ってもらったりして、どういったことが地域課題の解決につながるかというのを肌で感じてもらっています。他にも、「さつまあげ　はやま」という有名なさつま揚げ屋や、歯科医だった建物を改造して開いた「jade　cafe」にもフィールドワークに行きました。

活動拠点は、「コワーキングスペース　ふれあいとーふや。」です。元々、豆腐店の工場兼住宅兼販売店のようなところで、空き店舗になったので取り壊されるはずだったのですが、「日本で最も美しい村」連合の関係で富士ゼロックスがサポートしてくれるという縁があり、コワーキングスペースに改造したのです。見た目は古い建物ですが、中にはテレビ会議システムや最新のコピー機、パソコン（Mac）が数

図3　ふれあい　とーふや。に集まる学生

台あり、サテライトオフィス的にも利用できるようになっています。ここで大学生や高校生が一緒に活動しています。

このプロジェクトには、静大地域創造学環、早稲田の卯月ゼミナール、常葉大学の社会環境学部、麗澤大学の外国語学部、松崎高校の生徒、その他地域の人々が関わっています。小学生から高齢者まで地域との関わりの中でつながりができ、いろいろな課題解決に向けた考え方を学ぶ場所になっています。

3. つながりの可能性

地域とつながるメリットとしては、やはり地域課題解決学習によって、リアルな学習や実践研究ができます。それから、フィールドワークを通じて人とのコミュニケーションを取ることができます。そうしないと学習が身にならないので、いろいろな人と話すことが重要になってきます。最近は社会構造が変わって、核家族化や少子化、多子世帯の減少が進んでいるので、生まれてから高校を卒業するまでの間に人と会わない時間、もしくは話さない時間が長くなり、語彙が激減しているといわれています。そういう意味では、いろいろな形で幼少期からたくさんの人と触れ合うことが必要なので、その積み重ねとしてコミュニケーションを図れるような地域であることは大切だと思います。

学生の皆さんにとっては第2のふるさとのような存在になり、いつでも遊びに来てもらえると思っています。そして、われわれ地域にとって最も欲しい関係人口になっていただければと思います。やはりつながりがなければ、関係人口、交流人口はなかなか増えません。人口が減っていく中で、お客さまを引き込み、それぞれの人生の中で田舎のために時間を使ってもらえるようにするには、今はオリンピックを控えてインバウンド対策をいろいろ練っていますが、やはり地方に来てもらうためには関係性が重要かなと思っています。

そして、人のつながりが地域活性のチャンスをつくります。川根本町では、ゾーホージャパンという会社がサテライトオフィスを設けています。この最初のきっかけは、ゾーホージャパンが静岡に来て、「いい所だね」と思ったところから始まりました。川根の人間がサテライトオフィスの営業に行って、そこからつながってサテライトオフィスができたのです。最近ではゾーホーのインド本社も来るようになって、川根高校は生徒数の減少で再編されそうな高校だったのですが、国内からの留学を受け入れたり、ゾーホー本社へ留学させるといったつながりもできました。そうして新たな選択肢に川根高校が加わるようになったのです。

「おだやかな革命」というドキュメント映画があります。地方再生というよりは、エコ的な生き方についての映画です。地元に移住してきた人から「この映画はいいのでぜひ上映会をやらないか」という話をいただいて、松崎町内で上映会を開催しました。すると、この作品の監督も律儀に会場まで来てくれて、作品への思いやメイキングの話をしてくださいました。これも結局は人のつながりです。

それから、先ほども紹介した「日本で最も美しい村」連合ですが、元々はヨーロッパが発祥で、小さな地方が生き残るために、もしくは新世代に残すためには活性化しなければならないということをうたった連合で、お互いに勉強し合って、力を付けていくことがモットーでした。それこそが町同士のつながりにもなります。

地域の課題解決には、地域の力だけでは限界があります。特に伊豆南部ではどの市町も、世界中が経験したことがないようなスピードで人口減少と高齢化が進んでいます。日本は多分、世界最先端の高齢化国です。裏を返せば、世界のトップランナーになるチャンスがあります。その中で、何か一つでも地方から発信できるのではないかと思っています。下田も松崎も南伊

豆もそうなのですが、技術革新が進む中で自動運転のテストもしています。そういった中で、地方の課題を活用しながら活性化を進めるチャンスが来ているのではないかと思います。これを逃すと、消滅という言葉が再燃してしまいます。これからも大学とますます連携して、こういったチャンスをものにしていきたいと思っています。

地域づくりの課題と可能性（南伊豆町の場合）

山口一実（南伊豆町地方創生室）

1．南伊豆町の総合計画と人口予測

南伊豆町では第6次総合計画というものを作っていて、それにも関連してお話を進めたいと思っています。

第6次総合計画の将来像は、「次世代につなぐ　光と水と緑に輝く南伊豆町」です。これは、第1次の総合計画を作ったときからのフレーズで、今回もこれを使っていきたいと考えています。併せて、町には町民憲章というものがあり、五つの目標を掲げています。それぞれ町の名所・名物を記載したもので、これらをまちづくりの基本理念としています。

総合計画を作るに当たり、町の課題を幾つか挙げています。まず、①人口減少、少子高齢化です。これは地方自治体ではどこも課題としていると思います。ただ、人口減少については国全体で進んでおり、それを食い止めるのはなかなか難しいので、人口減少の傾向を和らげること、人口減少に対応していくことが必要だと考えています。

それから、②産業、③災害対策、④景観です。景観についてはご承知のとおり、伊豆半島では風力発電の話が出ており、今後さらに話が大きくなっていくのではないかと思います。

それから、⑤生活の快適性の確保に向けた取り組みがあります。憲法では最低限度の生活を保障していますが、実は最低限度の生活に対する皆さんの印象が大きく変わってきているのではないかと思います。捉え方によって最低限度は人それぞれで、経済発展とともにどんどん上がってきていると認識しています。中でも伊豆地域では、交通や医療が非常に脆弱になっている中で、最低ではなく、ある程度快適性を求める必要があるのではないかなと捉えています。

それから、⑥協働のまちづくりと地域コミュニティの強化です。コミュニティの希薄さが地方でも問題になってきています。それから、行政としては⑦財政状況がどんどん厳しくなっています。これら七つの課題を捉え、解決に向けて戦略を立てていく中で総合計画を作り込んでいきたいと思っています。

人口減少に関しては、松崎町よりも南伊豆町の方が減少率が高くなっている気がします。今は南伊豆町の方が2000人ほど多いのですが、2040年には5503人となり、松崎町との差は1000人ほどになるので、人口減少が相当進んでいくのだろうと思っています。町の人口構造を見ても、20〜24歳が極端に少なくなっています。どこの自治体でも多分、こういう形の構造になっていると思います。

賀茂地域の市町の人口構造を比べてみます。大学生だと多分、住所を残したまま大学に通っている人が多いと思いますが、卒業して社会人になって住所を移す人が多いと考えると、20〜24歳の人口減少は激しくなるでしょう。

さらに深刻なのは、高校進学の問題です。南伊豆町には高校の分校が一つあるのですが、選択肢としては隣の下田市の下田高校に行くか、南伊豆分校に行くか、松崎高校に行くか、東伊豆町にある稲取高校に行くかということになります。これらは何とか自宅から通うことができ

ます。そういう中で、高校生のときから静岡や三島、沼津の高校に通う子どもが結構多くなってきています。そのときに家族単位で引っ越してしまうケースが割と多いのです。こうした事情が人口をさらに押し下げる可能性があります。

賀茂地域における人口減少の割合を見ると、1980年と比べて2045年は下田市が65％減ります。東伊豆町は69％、南伊豆町は58％、松崎町は61％、西伊豆町に至っては80％も減るという危機的状況で、そろそろ合併のことも考えた方がいいという状況になります。

2. 南伊豆町の産業の状況

それから、南伊豆町の就業者は、2040年には半分になると想定されています。仕事がなくなるというよりも、仕事はあるけれども働く人がいなくなるという状況がさらに加速していくのです。今も事業所によっては常に人を募集していますが、さらに人手不足が大きな問題になっていくでしょう。特に公共交通を含むインフラ系の産業が衰退していくことによって、さらに暮らしは厳しくなっていくと考えられるので、維持を図っていくことが大きな問題だと考えています。

例えば、南伊豆町の伊浜地区には、地区で経営していた観光施設「波勝崎苑」があったのですが、入込客不足から閉園になりました。これを救ってくれたのが、静岡市に本社のある「iZoo（イズー）」でした。河津町内で爬虫類の動物園を経営している会社です。ここが波勝崎苑の後継に名乗りを上げ、何とか存続していく可能性が出てきました。外からの支援があって、地域内でまた新たな産業として支えられていくことになりそうです。

もう一つ大きな問題が、弓ヶ浜温泉で温泉が供給できなくなってきたことです。南伊豆町には弓ヶ浜温泉と下賀茂温泉があり、弓ヶ浜温泉には季一遊（ときいちゆう）、休暇村南伊豆、宿〇文（やどまるぶん）という三つの旅館があります。このうち、季一遊を営むいなとり荘は東伊豆町の資本、休暇村は一般財団法人休暇村協会という東京の資本で、三つのうち二つの町外資本の旅館に温泉が供給されなくなったときに、そのまま事業を継続できるかというとやや微妙なところがあると思っており、この辺も非常に大きな問題として捉える必要があります。

それから、沿岸地域なので津波の問題があります。現在、津波の避難地として津波災害対策区域を指定していますが、南伊豆町の沿岸地域はほぼ津波対策の避難区域になります。特に弓ヶ浜は津波浸水想定区域になるので、さらに観光業は圧迫されていくのではないかなと思います。併せて、洋上風力発電も観光に非常に大きな影響を与えていくでしょう。

あるいは、外からの資本や人が来ることで地域が活性化、あるいは地域を支えることにもなるのですが、逆に言うと外から地域を衰退させる可能性もあります。地域側としてその点をしっかりと見据えて、どういう形で受け入れていくかを検討しなければならないと考えています。

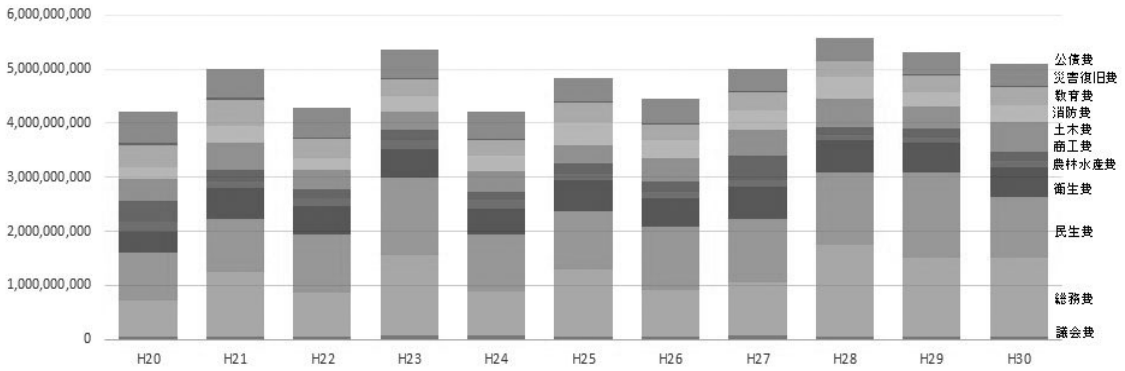

図1　南伊豆町の一般会計歳出決算額の推移（2008-2018）　作成：南伊豆町企画課

南伊豆町の一般会計は、最近では50億円程度の規模ですけれども、その中でも一番高いのが総務費や民生費などの経常経費です（図1）。経常経費が高まると新しい事業はできないので、今後への投資がしにくくなってくる状況が数年ずっと続いています。歳入の方では地方交付税が最も多くなっています。

3. 人口減少時代の地域づくり

では、人口減少時代の地域づくりをどうしていくかというと、2019年12月に改訂された国の新たな総合戦略の中では、若者の地域外流出、東京圏への転入はさらに加速し、これまでは移住・定住の取り組みを推進することで東京圏から地方へ若者を転入させる運動が非常に高まっていましたが、これはもう無理だというふうにいったん区切りが付いたと感じています。

そこで出てきたのが関係人口です。移住・定住で地方へ若者を戻す動きから、地方と都市部のどちらに主体的に住むかは別として、都会に住みながら地方で活躍する、あるいは地方に拠点を置いて都会へ時々行くという新たなライフスタイルを提唱し始めたといえると思います（図2）。それがこの総合戦略にもしっかりと出てきています。ただ、今までの移住・定住を覆すわけにもいかないので、関係人口の創出拡大にシフトを置いてきているのではないかと思っていて、この地方移住の裾野の拡大は今回の総合戦略のみそになるという気がしています。

図2　「関係人口」概念図
出典：総務省『関係人口』ポータルサイト（https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/）

地方ではなかなか関係人口の定義がしっかりされておらず、地方に恩恵をもたらしてくれる人と捉える部分が大きいので、そのあたりの捉え方をしっかり固めていかないといけないと思っています。

国の方針では、大学と地域の連携がメリットを生むためには、人材育成が一番のポイントになってくると捉えているようです。

4. 学生との交流から

当町では昨年、早稲田大学と芝浦工業大学、それから静大が活動しました。静大の例を取ると、まず私たち町側で、伊浜地区の人口減少について地区の方々と話し合いました。その中で「空き家予測図」というものを作りました。すると、半分ぐらいが人が住まない家になるだろうということが目に見えて分かるようになりました。そんな中で伊浜地区では若者を中心にいろいろな活動を始めたのですが、そこに来て静大が伊浜地区に入って、学生の力で地域の人たちを引っ張っていく動きが出始めました。

図3　静岡大学地域人材育成研修会「ご当地カルタを作ろう」（2019年8月18日～19日）

「伊浜かるた」を地域の方々と作ったり、海辺のごみ拾いをしたりしました（図3）。こうして伊浜地区の方たちと交流する中で、伊浜地区のおじさんたちがLINEで、「あんまりキレイなので夕陽を撮りました」という会話をするようになったのです。こうした目に見えた変化が地域側に出てきたのです。

地域と大学にとってのメリットは何だろうと考えたときに、実践の場が得られることやフィードバックというのは限定的、特異的であり、地域側としては、学生ということで未完成ではあるけれども、それが故の安心感や、教えることへの満足感を享受することができます。つまり、学生側、地域側ともに未知の体験をすることができ、必ずしも物質的な成果物のみが成果ではないのです。

それから、結果として受け入れ側の負担が低く、受け入れ側として求める成果も多様なので、満足感が高まっていくのではないかと考えられます。ですから、継続することで、国が考えている地域や大学のメリットに結び付くのではないかと思うのです。今、南伊豆町では単発の動きを幾つか実施していますが、これらをしっかり連動させ、継続性を持たせていきたいと考えています。

さらに、南伊豆町の課題に対しては、やはり外から人が入ってくること、関係人口を作っていくことでしっかりとした対策・対応ができるようになるのではないかと思います。ただ、地域側としては、関係人口の定義を具体的にしっかりと行う必要性が出てくると思います。関係人口といわれる人たちを地域側の都合のいいように取り扱うのではなく、どういう人たちに来てもらいたいのか、どういう人たちが来たときに何をしてもらいたいのか、地域としては何ができるのかということをしっかり地域で話し合う必要があるでしょう。

最後に宣伝です。関係人口を作るきっかけとして、南伊豆町では新しい旅行企画を提案しています。「南伊豆くらし図鑑」ということで、複数人が旅行に来るのではなく、一人の人が一人の町民に会いに行くという旅行商品を作っています。メニューはホームページを見ていただくといろいろ出ていますし、「南伊豆くらし図鑑」というフリーペーパーでも紹介しています。ぜひ体験しに来ていただいて、南伊豆町での活動につなげていただければありがたいと思います（https://minamiizu.fun/）。

地域づくりの課題と可能性　学生と地域のまちづくり－東伊豆編－

荒武優希（NPO法人ローカルデザインネットワーク理事長）

1．東伊豆町の紹介

私は現在、NPO法人ローカルデザインネットワークの理事長として、東伊豆町で活動しています。横浜出身の現在28歳で、地域おこし協力隊を卒業後、地域のNPOを立ち上げました。東伊豆町は観光産業が主産業で、宿泊・飲食サービス業の就業者が多いです。私からは、学生時代から伊豆半島によそ者として関わってきて、いいなと思うところを少し皆さんにお伝えできたらと思っています。

伊豆半島はユネスコから「世界ジオパーク」の認証を受けているのですが、伊豆半島の土地は、ジオパーク的に言うと文化や歴史、地域の産業などととてもリンクしている印象を受けています。

私は東伊豆町稲取をメインに活動しているのですが、稲取には「稲取キンメ」というブランドのキンメダイがあります。稲取のキンメは鮮度が命と地元の漁師さんは教えてくれるのです

が、このキンメダイは実は深海魚です。その深海魚がなぜ鮮度良く取れるのかというのもジオパークがとても関係していて、伊豆半島だけが日本で唯一、フィリピン海プレートに載っているのです。伊豆半島だけが違う大地で構成されているという、少し特異な土地になっています。

ジオパーク協議会の人などは「南から来た火山の贈り物」などとおっしゃるのですが、伊豆半島はフィリピン海プレートの先端のような所にあって、プレートとプレートの裂け目がとても近く、そこが深海になっているため、稲取はそういった地の利を生かした食のブランドを作っているのです。本当に伊豆半島は、そういった地形とリンクした特徴的なことがたくさんあり、それらを総合してジオパークとして認められています。

ジオパークの関係者から教えてもらったのですが、プレートの移動で伊豆半島は今も動いていて、東伊豆は盛り上がり、西伊豆は沈んでいるそうです。だから、東海岸には崖地が多く、西海岸は近海にぽこぽこと小島が浮いている風景がよく見られます。こういったことも特徴として面白いと思っています。

2. 学生の主体性から始まるまちづくり

私は芝浦工業大学で建築を勉強していたのですが、大学院進学のタイミングで学生団体の空き家改修プロジェクトを立ち上げ、その段階で東伊豆町に関わったのをきっかけに今も活動しています。活動は6年目になり、いろいろと身分が変わりながら地域に関わっています。プロジェクトを立ち上げたときは、地域の空き家問題に直面して、学生ながら何か地域に貢献できることがないかということで関わりました。

1軒目は失敗してしまって、誰からも使われないという悔しい思いをして、大学院2年生のときに改修した2軒目が「ダイロクキッチン」でした。元々は東伊豆町消防団第6分団の詰所で、コミュニティキッチンのような活用プランを実現しました。

ダイロクキッチンの運営はNPO法人が行い、町行政の持ち物になるので賃貸契約を結んで借り受けました。私自身は学生を卒業するタイミングだったので、どうしてもこの改修した物件に関わっていきたいという思いを持ち、地域おこし協力隊（任期3年）という行政の制度で、一定の給料をもらいながらその地域の課題を解決する仕事と関わりました。地域おこし協力隊とは、ゆくゆくは3年で卒業した後に自立して、起業するなり、いろいろな組織に入るなりして、このまま土地に残ってもらう制度になります。

それを使って私は3年間、他にもいろいろとやったのですが、ダイロクキッチンの活用をメインに活動し、まずは地域の人たちにダイロクキッチンを使ってもらうための取り組みをしました。その結果、定期的にイベントを主催してくれる人がたくさんできたので、割と今は場所の運営を委ねる形になっています。

3年たって、今はダイロクキッチンを運営するためにつくったNPO法人ローカルデザインネットワークをメインに動かしています。このNPOは、学生時代の同級生メンバーを中心に作った団体で、東京の方に10人ぐらい、伊豆の方に4人ぐらいの計14名のメンバーで活動しています。都市部と地方の両方に活動できる人間がいるという強みを生かして、今は「都市とローカルをつなぎ、暮らしたいまちと暮らす」というテーマの下、まずは自分たちでいろいろ実践しています。

ダイロクキッチンは、今年5月から後輩たちがずっと改修活動を続けてくれていて、新たにリノベーションが完了したシェアオフィス「EAST DOCK」の運営も始めています（図1）。それぞれ地域の方が、いろいろ課題がある中で何かしらのアクションを起こすための活動をしていて、地元でもっと遊ぼう、楽しもうということをコンセプトに活動しています。

普段はキンメのせりが行われているような場所で野外上映会を開いたり、観光といいつつ、現代社会にはいろいろな改善のニーズがあるということで、伊豆で休暇を楽しみながら仕事をする「ワーケーション」という考え方をシェアオフィスで実現するために、企業研修の受け入れなどもしています（図2）。それから、自分たちで土地を盛り上げるのはもちろんなのですが、東京にも自らの地域の魅力を持っていってPRする機会をつくっています（図3）。

図1　NPO法人ローカルデザインネットワークが運営する物件

東伊豆町の人口ピラミッドを見ても若手が少なかったり、既存のいろいろなことに携わったりして今ある仕事で手いっぱいで厳しいという人たちが多かったりします。私が移住して感じたことの一つなのですが、何をするにも担い手（プレーヤー）不足なのです。ここをいかに増やしていけるかが自分の仕事の宿命なのではないかと考えています。

図2　企業研修を受け入れ、地域の新しい滞在ニーズを発掘する

本当にいろいろなプレーヤー予備軍的な人たちがいると思っているのですが、中でも「若さ」「斬新なアイデア」「行動力」の三つを持った大学生は、その地域にとって大きな存在意義があると思います。自分も学生時代に地域に関わらせてもらっていたし、逆に今は学生たちを受け入れる仕事もしているので、こういう人たちを呼び込むことが自分の中のテーマとしてあります。

図3　東京でシティプロモーション「農産物直売イベント」

3. 学生プロジェクトの事例から

ここからは、現在受け入れている学生2団体を紹介し、この学生たちが地域にどういった影響を与えているのかお話ししていきたいと思います。

まず、われわれのNPOで創設した空き家改修プロジェクトの団体です。3物件の改修を東伊豆町の稲取で行ったほか、徳島県や新潟県、群馬県などいろいろな所で改修活動をしているのですが、東伊豆の場合、改修をいったん止めて、町全体のリノベーションプランのようなものを作れないかということで、今年度は東伊豆未来会議というものを組織しました。地域の未来について考える場をつくるために、地元のいろいろな有志を集める中で、いろいろと空き物件の活用アイデアを考える機会をつくってきました。

この前の日曜日（12月22日）に最終プレゼンテーションを行いました。関係者や地域の人たち80人以上が集まってくれて、空き家と空き店舗の活用プランをそれぞれ考えてもらいました（図4）。内容は割愛しますが、東伊豆の旅館に勤める仲居さんたちのシェアハウスを作るプランであったり、駅前のとてもいい場所に空き店舗があるのですが、そこを起点に地域を巡ることができる施設を作るため、レンタサイクルカフェを提案しました。

図4　東伊豆未来会議　空き家と空き店舗の活用プランを地域関係者にプレゼンテーション（芝浦工業大学　空き家改修プロジェクト）

地元の経営者などにも発表会を聞きに来てもらいました。現場感をここで伝えるのは難しいのですが、地元の人はこの会議で、「学生たちがここまで頑張ってくれたのだから、ここから先は地域の大人たちの出番だね」ということで盛り上がっていました。今も私はいろいろと地域の中をうろちょろしているのですが、いろいろな人たちから「荒武君、頑張ろうね」と言っていただいており、空き家改修プロジェクトの学生たちが関わる中で、そういった地域の動きが盛り上がっています。

図5　「INATORI QUEST」　稲取の新しい遊び方を提案（静岡大学地域創造学環）

もう一つは、静岡大学地域創造学環の東伊豆フィールドワークのメンバーを受け入れています。東伊豆未来会議の前日に「INATORI QUEST」ということで、学生たちに地域の新しい遊び方の提案をしてもらいました（図5）。駅から旅館までマイクロバスが出ているため、お客さんが地元を楽しむ機会がなかなかないという背景があったので、町中を巡ってもらうようなウォークラリーを企画してもらいました。実際に地元のおじいさんに「ここのポイントはどこですか」などと聞いてもらったりして、観光客と地元の人が交流するような機会を強制的に作るイベントになっています。結構多くの方が参加してくれていて、地元の参加者の方もいたのですが、「とても楽しかった」という声もあり、すごく充実した機会を学生たちにつくってもらっています。

地元参加者からは、「地元に住んでいても新しい発見があった。まねをする地域が出てきそう」というコメントをいただいたり、学生たちが地域に関わってくれることで地元の人たちが刺激を受けています。何かできるかもしれないとまではいかないかもしれませんが、地元でもこういう面白い活動が始まるのだというふうに元気づけられたり、「うちの町はちょっと厳しい」と言う人が少しでも減るといいなと思うのですが、そういった思いを学生の皆さんと一緒に実現できていると思います。

これまで活動する中で、第1段階はやはり学生たちの活動だけでは駄目だと思っていて、地域がちゃんとしっかり支援してあげないとプロジェクトはうまくいかないと思います。第2段階に行くと、学生たちと地域の人が一緒に動きだすことが必要だと思っていて、最終的に第3段階では、学生たちが推し進める力よりも地域の人たちが推し進める力の方が強くなって、ようやく学生たちが関わってのまちづくりが始まると考えています。私たちは今、この第3段階を目指して学生たちを受け入れているところです。地域と学生、それぞれの強みを生かし合って、弱みを補い

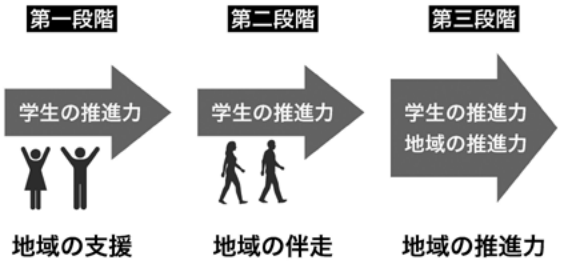

図6　学生と地域の関わり

合うような関係性をつくっていくことがとても大事だと考えています（図6）。

駆け足でしたが、発表は以上になります。ありがとうございました。最後に宣伝です。「優しい会社の見つけ方」というSDGs関係の発表会が2020年1月9日木曜日にあり、私も参加させていただけることになりました。皆さんも現代社会におけるこれからの暮らし方や生き方、働き方を考えられるチャンスになると思いますので、もしお時間がありましたらお立ち寄りいただきたいと思います。

報告２

知的障害者の「生きる力」をアートで伝え「多様で寛容な社会」をクリエイトする

久保田 翠（NPO法人クリエイティブサポート・レッツ理事長）

1．クリエイティブサポート・レッツの活動

私は今、認定NPO法人のアートNPOで、障害福祉施設の運営をしています。前職は建築設計だったので、静岡大学農学部の設計製図という授業を12年ほどやらせていただいたこともあります。今は、人文社会科学部・日詰先生の「NPOボランティア概論」という授業を3講座担当しています。

私たちの活動は静大と連携しているわけではなく、ほぼ単独での活動です。20年活動していますので、いろいろな事業をしているのですが、大きく分けると障害福祉施設と文化事業の二つの柱を持っています。障害福祉施設では、自立訓練の事業は休止しましたが、生活介護1、2と就労継続支援B型、放課後デイサービスの4事業を行っています（図1）。

図1　障害福祉施設アルス･ノヴァの事業内容

活動のきっかけは、くぼたたけしという私の息子でした。彼の誕生によってこの活動を行うことになりました。彼は23年前に誕生したのですが、今でも重度の知的障害で、要するにかなりスペシャルな障害を持った息子がいます。自分でしゃべることもありませんし、食事もできませんし、排便なども自分ではできなくて、毎日、寝るとき以外ほとんど、入れ物に石を入れて叩き続ける行為を続けています。

私たちのNPOの理念は、多様な人たちが共に生きる社会を作ることであり、ソーシャルインクルージョン（social inclusion、社会的包摂）といわれていることを実現することです。私は障害のある子どもが生まれ、障害福祉施設を運営していますが、やはり最も大切なのは、障害者の人たちが固まって幸せな世界をつくったとしても、一歩外に出れば誰も知らないということでは幸せになれないということです。それから、私も障害のある人たちと共にいることで気づいたのですが、彼らにはできないことはあるけれども、皆さんにとってもしかしたら貴重な体験になるというか、貴重な人たちでもあるのですね。

ですので、そういうものをどんどん社会に顕在化させていくために存在するNPOです。それから今､「たけし文化センター」という少し変わった名前の文化センターの事業を行っています。「文化」と入っているのはかなり意味があって、要するに障害者施設ではなく、文化をそこから生んでいくようなセンターをつくっています。これは重度の知的障害のあるくぼたたけしという一個人が示す、「やりたいことをやりきる熱意」を新たな文化創造の軸と捉える考え方です。

2. たけしにしかできない表現

どういうことかというと、彼は入れ物に石を入れてたたき続ける行為を決して手放さないのです。だけど、石を入れてたたき続ける行為は、小学校、中学校、高校での12年間の学校生活の中では問題行動と言われました。問題というのは取り除かなければいけないものです。学校の先生もとても熱心に教育してくださいましたが、12年間たって彼が石を入れ物に入れてたたき続ける行為を手放したかというと、決して手放しませんでした。

それを問題行動として位置付けているのは誰なのか、そして問題行動だと感じているのは誰なのかということを考えていくと、少なくとも彼ではなく、周りにいる人たちです。なので、このたけし文化センターは、そういった問題行動であっても彼が一番大切にしているもの、彼の自分の生きることとイコールの表現のようなものを軸に据えて場を作る、そこからいろいろな事業を組み立てるような発想で始めました。この「問題行動」は、彼にしかできない表現なのかもしれません。

「ありのままを認める」とよくいわれますが、障害のある人たちと一緒にいると感じることがあります。その問題行動を個性と捉えるしかなかったり、そもそも誰が問題行動と決めつけているのかという疑問もあります。それから、日常の中の大変さというものがありますが、それは彼らの自由でもあります。だから、かなり裏腹なものが人の生き方の中にもあるし、障害のある人にはそれがすごく顕在化しているのですが、皆さんの中にもあるかもしれません。これが正しいのか正しくないのか、それは誰が決めることなのかといった、たくさんの問いが障害のある人たちとともにいると生まれてきます。ですから、そのままの姿を社会に顕在化していくことがレッツの理念でもあります。

アートという言葉は非常に定義しにくいです。作品を作ることや、美術館に飾られているような物がアートだとほとんどの人は思っているかもしれませんが、アートという言葉の中には、既存の価値観を変える、壊す、揺さぶるという意味があります。重度の知的障害がある人たちの存在には、その力があると私は思っています。ですので、彼らが作った作品がどうこうではなく、彼らの生き様というか、生きている姿を素直に社会に出して、皆さんに見ていただく活動をしていけばいいのだというふうに考えました。それが私たちの定義するアート活動です。

3. たけし文化センターの活動

われわれは、「タイムトラベル100時間ツアー」という事業をしています。重度の知的障害の人たちと接する、時間を共にする、障害のある人の存在を見る、触る、感じる、体験するといったことをどうやって実現させていくか考えたときに、私どもの福祉施設でも展覧会を開いたり、コンサートをしたりといろいろなことをしてきましたが、生の彼らに触れていただく、見ていただくのが一番いいだろうということで始めたのが、このツアーでした(図2)。5年間毎月1回、第4土曜・日曜または金曜・土曜に実施し、お金を取って来ていただいています。

図2　「タイムトラベル100時間ツアー」リーフレット

何をするかというと、障害福祉施設で1泊2日、どっぷり体験していただくというメニューです。ホームページには「光を、観る」というプロモーションビデオもありますので、そちらを見ていただけるといいと思います（http://cslets.net/hotnews/news-859）。

今日はどちらかというとまちづくり的な内容だということを先ほど知ったのですが、私たちは今、たけし文化センターを連尺町という浜松市の中心市街地に拠点を設けて運営しています。浜松駅から800mの所に3階建ての建物を造り、1階は誰でも来られるオルタナティブスペース（多目的空間）を設けた障害福祉施設、2階には音楽スタジオ、3階には認知症の方や障害のある方のシェアハウスと一般の方も泊まれるゲストハウスを作りました（図3）。そんなに大きくない建物ですが、ここを拠点に活動しています。

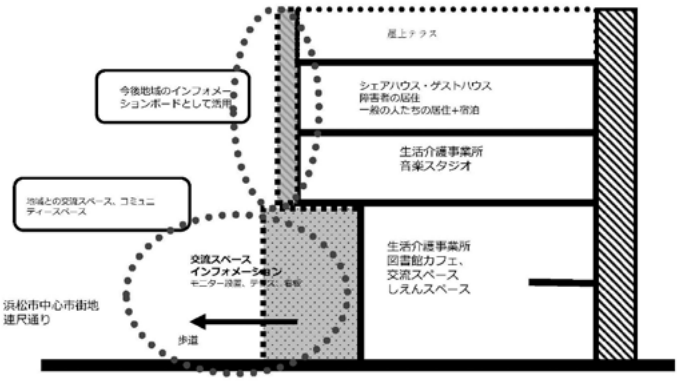

図3　たけし文化センター施設概要

たけしもこの施設に通っていますが、かなり重度の障害を持った方々が来られています。障害福祉施設というと一般的には作業がありますが、うちには作業がまったくありません。一日好きなこと、自分のやりたいことをして過ごす場所をつくっています。彼らの唯一の仕事というか、ちょっとイベントっぽいのですが、入り口辺りで「街角ライブINたけぶん」をしたり、浜松には路上演劇祭というイベントがあり、そのときにたけぶんを会場としてお貸ししたり、どんどん街に出ていっていろいろなことをしています。別に頼まれているわけではないのですが、突然路上ライブを行ったりしています。

一番たくさんやっていることは、とにかく外に遊びに行く、散歩に行くことです。浜松市も静岡市もほとんど一緒だと思いますが、クルマ社会ですよね。重度の障害のある人たちはほとんどが特別支援学校に行っているか福祉施設にいると思いますが、彼らは公共交通機関に乗れないので大体車で移動します。そうすると多分、重度の知的障害の方に一度も会わない人もいるかもしれないのです。だから、彼らの存在が社会の中から消されているというか、消えてしまっているといっても過言ではありません。そこで、あえて私たちは街中に拠点を作って、どんどん街に遊びに行き、街をある意味荒らしに行き、自分たちは存在しているということを知ってもらいにいく活動をしています。

それから、「雑多な音楽の祭典「スタ☆タン!!」」という音楽祭を開いています。音楽なのか音楽でないのかよく分からないような演奏をする出演者を全国から公募して、一堂に介して行うイベントを今年（2019年）の11月3日に行いました（図4）。

図4　雑多な音楽の祭典「スタ☆タン!!3」（2019年11月3日開催）

配信ライブもしています。「のヴぁテレビ」というテレビ局があるので、そのテレビ局で哲学カフェ的なものやいろいろな話を情報としてどんどん外に出すような活動をしています。

ここからはまちづくり的な話をします。経

済産業省の平成30年度地域・まちなか商業活性化支援事業に、「浜松市連尺町周辺におけるソーシャルインクルージョンの拠点形成に向けた調査分析事業」が採択され、助成金をいただいて調査事業を行いました。浜松市や静岡市など割と大きな中心市街地では、過疎化が進んで人がいなくなり、活力がなくなっていることに悩んでいますが、私はこれはチャンスだと思っています。つまり、街中は商業の人たちだけのステージではなく、さまざまな人が通いやすい場所なのです。特に、車を持っていない人たちや皆さんのような学生、それから障害者の人、高齢者や子どもたちが非常に通いやすいので、彼らが街中で買い物をしてお金を落とすかどうかは分かりませんが、にぎわいという部分ではそういった人たちがどんどん街にでてくることも可能性としてあるのではないか。私たちのような障害福祉施設が街中に拠点を構えることで、こういった人たちが街のにぎわいに貢献していく時代に既に入ったのではないかといったことを申請書に書いて、経産省から助成金をいただき調査をしました。

その中で、街は駐車場がないから来ないとか、買う物がないから来ないのではなく、何か出会いがあるとか、自分にとって有意義なものがあるから街に来るのだということが分かりました。また、街中への期待としては、居場所、新たな出会い、何らかのきっかけや目的といったことが大きいことも分かりました。それから、これは浜松市の特徴だと思いますが、私たちのような民間の人たちが作ったいろいろなオルタナティブスペースがあります。例えば、レッツのように障害福祉施設でありながらオープンスペースを持っていたり、オーナーが自分の趣味や人脈のためにスペースを作ってカスタマイズしたり、趣味や嗜好によるイベントなどが行われているような、行政では出てこないさまざまなスペースの作り方をしている人たちが浜松市にはたくさんいらっしゃいました。そこを30カ所ほどピックアップして調査報告としてまとめたのですが、こういう人たちをどんどん巻き込んでにぎわいをつくり上げていくことが、中心市街地の活性化につながるのではないかといった提案をしました。

4.「たけしと生活研究会」

たけし文化センターの3階には、重度の知的障害者のシェアハウスと、一般の人たちのゲストハウスが付いています。実は、これは苦肉の策です。というのも、たけしは現在23歳で、私と夫と娘との4人家族ですが、今年（2019年）の3月に夫が亡くなりました。このような場所でいろいろしゃべっていますが、重度の知的障害者の介護はものすごく過酷です。また、昼間通える場所はあるのですが、夜は家族がすべて見なければならないという状況です。ショートステイなど預かっていただける所はぽつぽつありますが、十分にはないというのが現実です。そうした中で、重度の障害者が親と一緒にずっと住んでいることが幸せではないし、障害者を支えている親も介護でどんどん疲れていくので、彼らの「家」というものを考えていかなければならないといった前提があってのシェアハウスなのです。これは現在、国の制度などを使っておりません。「たけしと生活研究会」というものを立ち上げ、重度訪問介護というヘルパーの事業を付けて、住まいが成立するかどうかを実験しているところです。

さらに進めていきたいと思っているのは、障害がある人たちだけが固まってシェアハウスにいたところで何の変化もないし、面白くも何ともありません。また、出会いもありません。うちには30〜40人の重度の知的障害の方が通っていますが、ほとんどが20〜30代の若者です。若者は皆さんと同じようにお父さんやお母さんと一緒に住みたいとは思っていないと思います。それが重度の知的障害者であってもです。しかし、皆さんのように下宿したり、大学に通ったりすることはできず、誰かが介護をしなければなりません。それを今はほぼ親または家族が担わなければならない状況になっています。親の立場から言えば言いたいことはいろいろありま

すが、本人から見てもこの生き方が自由かどうかというのは意見があると思います。ですので、私は重度の障害者であっても普通の若者として街を生き生きと闊歩し、さまざまな人たちと出会える場所、生き方、住まい方ができないかと思って、このシェアハウスで実験しています。

障害がある方、高齢者の方、引きこもりの方、ホームレスの方々、ケアが必要な人は世の中にたくさんいます。ケアという部分では一緒なのです。ただ、ケアを100％するだけでその人の人生が幸せにはなりません。つまり、持てる力を少しずつ皆さんが出し合いながら、お互いにケアをしながら、弱いところは助け合い、強い所は出し合い、生きていくという住まい方ができないかということも、「たけしと生活研究会」の中で研究が始まりました。

その中でとても大切になってくるのが、ヘルパーさんという役割です。皆さんの中にもヘルパーをアルバイトでやっている方がいらっしゃるかもしれませんが、障害のある人を100％介護するのではなく、むしろ一緒に楽しむ人、一緒に住む人、でありながらケアをする人といったような、少しライトな考え方のヘルパーさんの養成をこれから行っていきたいと思っています。ぜひ学生の皆さんも一生のうちに一度ぐらい、重度の知的障害の人たちとともに生活をしてみたり、ケアをしてみたりすることは、人生においても味わいの一つになると思っています。ぜひそういうことにも興味を持っていただければと思います。

それから、皆さんの中には一人暮らしをしている方もたくさんいると思いますが、一人暮らしは果たしていいものなのでしょうか。やはり少しはいろいろなものをシェアしながら生きることも大切かもしれません。そういったことを皆さんとともに考えていきたいと思って、来年度（2020年度）またいろいろな事業を行いたいと思っていますので、興味がある方はぜひホームページ等を見ていただけると情報が出ていますのでよろしくお願いします。

報告３

しずおかキッズカフェ

小林タバサ（しずおかキッズカフェ代表）

1．子ども食堂を立ち上げたきっかけ

私は、静岡大学の人文社会科学部3年に在籍しており、しずおかキッズカフェの代表を務めています。しずおかキッズカフェは、私が2016年3月に静岡市葵区瀬名という地域で立ち上げました。月に2回、土曜日のお昼に、子どもは無料、大人は300円でお昼ご飯を提供しています。地域の親子のための居場所づくりを実現したい有志の集まりで、若い親子連れで毎回にぎわっています。気が向いたときに立ち寄れる空間として利用していただいています。

私にとって子ども食堂を立ち上げるきっかけになったのは、私自身が中学と高校のときに不登校を経験したことが大きかったです。学校に通うことが苦痛になり、毎日家に引きこもりがちになってしまいました。そこで、家でも学校でもない第3の居場所の必要性を痛感していました。最初は「地域なんて嫌だ。地元を離れたい」と思っていたのですが、やがて社会問題などに関心を強く持つようになり、子どもの貧困問題が社会問題として報道されていたのを見て、何か自分にできることはないかということで立ち上げを決意しました。

最初に行ったのは、4年前に地域の小学校2校の協力で行ったアンケートでした。その結果、土曜日の昼食に子どもだけでご飯を食べる孤食の児童が多いことが分かりました。しかも、学年が上がるにつれてその人数は増え、土曜日は給食が出ないし、親御さんも仕事に行っている状態で、スナック菓子などでごまかしてしまっている子どもたちがいるという実態が明らかになりました。特にひとり親世帯の偏食、抜き食がとても顕著に表れていました。最近は核家族化によって近所付き合いも希薄化する中で、見守りという昔の地域の在り方もない今日において、地域ぐるみでそういった子どもたちを見守って、子育てを応援する必要性を強く感じました。

2．運営について

最初は、閉店した喫茶店や絵本屋を開催日ごとに時間制でお借りしていたのですが、食べ物を提供するため、食器や食材を開催ごとに運搬しなければなりませんし、特に雨の日などはびしょ濡れになってしまうので、やはり必要な食材などを常時置いておく拠点を持つ必要性を強く感じ、現在は空き店舗を賃貸で借りて展開しています。

形式は、品数をたくさんそろえたビュッフェ形式です（図1）。盛り付けも子どもが自分でします。というのも、いろいろなご家庭のお子さんがいらっしゃるので、ご飯200gなどに固定してしまうと、家庭によってはそれだけでは足りなかったり、多かったりする場合もあるので、いろいろなニーズに応えるためにおなかいっぱいになるまで食べていただくことを理想としています。旬の野菜など素材の味を楽しんでもらって、かつ栄養バランスを考慮したメ

図1　ビュッフェ形式のメニュー

ニューを提供しています。特に人気なのはから揚げで、最初は育ち盛りの小中学校の男子たちがすぐに10個とか持っていってしまうのですが、だんだん慣れてくると、自然と他の子たちと分かち合うようになり、公平や平等についてもこのスタイルで学んでくれています。

利用する子どもたちの年齢層は、赤ちゃんが毎回大体10人ぐらいで、中高生ぐらいまで幅広いです。利用者の子どもたちの半数程度が、保護者が同伴してくださっています。参加者のエリアは大体が静岡市葵区瀬名地域ですが、清水区や駿河区からも来ていて、中には40分ぐらい徒歩で来てくれている子どもたちもいます。

食堂はボランティアの皆さんの協力で成り立っています。常葉大学や静大、あとは地域の高校生もボランティアとして参加して、地域の大人の方々も調理や洗い物の手伝いなどをしてくださいます（図2）。こうして一緒に子どもたちを見守って時間を共有することはもちろんなのですが、大学生や若い人による学習支援やコミュニケーションなども重視しています。

図2　調理をするボランティアの皆さん

食材の提供については、ご寄付が大部分を占めていて、フードバンクふじのくにさんなどから提供してもらっています。フードバンクをご存じない方のために説明すると、消費期限や賞味期限が近づいていて小売店などで出せない食材を、処分するのではなくて必要としている個人や家庭、団体などに譲るという素晴らしい取り組みをされている団体で、そこから譲っていただいたり、他にも農家や企業、個人の支援者の方々が段ボールいっぱいの野菜を送ってくださったりします。

図3　耕作放棄地での芋掘り

徳川家康も愛したといわれる「あさはた蓮根」という、とてもおいしいレンコンがあるのですが、その農家さんからも提供してもらっています。買うととても高級で、ショベルカーで収穫したときに傷付いてしまったり、形が悪かったりすると市場に出せないのですが、十分おいしく食べられるので譲っていただいています。

もう一つの食材の調達方法は、耕作放棄地での収穫です。所有者が高齢のため管理できていない畑をお借りして野菜を収穫し、子ども食堂の食材として活用しています。子どもたちが芋掘りに参加して土に触れたり、さまざまな世代の地域の人たちと触れ合う機会になっています（図3）。

私は当初、子どもの居場所づくりにフォーカスを当てていたのですが、活動を続けていく中で、親の居場所のニーズを強く感じるようになりました。日々忙しくて子どものためになかなか時間をつくれず、疲れてたまには家事を休みたいというお母さんや、初めての子育てで分からないことばかりだけど身近に誰も頼る人がいなくて、一人で子育ての悩みを抱えていているシングルマザーの方など、さまざまなお母さんたちが見受けられました。深夜、授乳に疲れてしまって産後うつなどになってしまうお母さんも中にはいました。自分はまだ学生なので、子育ての大変さは分からなかったのですが、実際にそういった親御さんたちにお会いして、子どもだけではなく親の交流拠点も必要だと思いました。

3. 地域の方々を巻き込む

そのためといっても、それが問題解決になるかは分からないのですが、地域の方々を巻き込んだイベントも随時開催しています。子どもも親も楽しめて、この地域が好きだと思えるようなイベントをしています。例えば静岡大学教育学部技術科の先生である松永泰弘先生を講師としてお招きし、「動くおもちゃ作り講座」などを開催しています（図4）。静大教育学部の良さは、子どもたちと触れ合って「今、何という先生なの？」と担任の名前を聞くと、「その先生は僕が教えた先生だよ」というふうに、先生の先生として話が盛り上がることで、毎回すごく面白いです。

図4　大学教員による「動くおもちゃ作り講座」開催

他にも4コマ漫画講座やお茶のいれ方講座、町の小児科クリニックの先生をお招きしてうがい手洗いの啓発セミナーも行っています。夏は流しそうめん大会をして、毎回100人以上の親子が参加してくださいます。夏の猛暑の中で流しそうめんをするので、今年は自治体からテントをお借りして張ったり、プールを購入して子どもたちが水遊びできるようにしました。

秋には次郎柿の柿狩りをしました。これも耕作放棄地での開催なのですが、おいしい柿がなるのに誰も管理していないし、肥料もあげていないために腐るばかりという感じの柿畑があったので、農家の方にご協力いただいて再生・活用し、安心して食べられる状態にして野外ランチなども行っています。

柿畑が子ども食堂の店舗から少し離れている場所で、車の通りや山道などは危ないので、特別にこの日だけは千代田タクシー様のご協力をいただいて、子どもたちを安全に無料で送迎するサービスをしていて、何往復もかけて送迎してくださいます（図5）。

図5　タクシー会社の協力による無料送迎

昨年度からは、子ども食堂初の取り組みである独自の防災訓練も実施しています。静岡市消防局千代田消防署の協力で消防車や起震車の展示や、無害のスチームの中を通る煙体験ハウスの体験、消防士さんによる消火器の使い方レクチャーや災害時の安全対策に関する講話をしていただきました。抜き打ちで、キッズカフェで火災・地震が発生したと想定して行いました。

なぜ子ども食堂で防災なのかというと、子ども食堂にはとてもたくさんの食器やビスケットなどの備蓄食品、調理器具、トイレなどもあるので、何かあったときに自治体の防災も大事ですが、もう一つの受け皿となるポテンシャルを持っていると感じているからです。地域で子どもや家族を守るには、やはり地域の人との関わりがなければできないので、もちろん自治体の防災訓練への参加も促してはいるのですが、こうした方法でも地域防災の強化に貢献できたらと思っています。

子ども食堂を立ち上げて約4年になるのですが、活動で達成できたことは、世代を超えた地域の方々の善意を目に見える形にできたことだと思っています。自分自身が不登校、引きこもりだった時期があって、その地域にいづらいなあ、地域の人は何だか冷たいなあ、私のことなどどうでもいいのではないかなという思いをすごく抱いていました。でも、実はこんなにも温

かい地域の高齢の方、大人の方、学生などが支えてくれるのだということを、一人でも多くの方々に伝えたいという理念でこれまで活動を続けてきました。

大学生が立ち上げて、本当に小規模に展開している有志のボランティア団体ですが、これまで地域の皆さんのご理解とお力添えによって、活動の規模や支援の輪も年々広がりました。私も活動を通して今後も、子どもたちが決して一人ではないということ、自分を見守ってくれている大人たちがたくさんいるということを、地域の子どもたちや子育てに奮闘する親御さん方にも伝えたいと思っています。

現在は月に2回しか開催していないのですが、店舗自体は毎月ずっと借りています。私は学生で、平日はほとんど毎日大学に授業に来ているので、なかなか平日昼間は活動できないのですが、いずれは高齢者の方々もこのスペースを利用できるようにできたらいいなと思っています。

最後になりますが、ボランティアに興味がある方はぜひコンタクトしてください。人手が全然足りていないのです。この前も阿部先生が差し入れを持ってきてくださったのですが、本当にてんてこ舞いだったので、ゆっくりお話もできないぐらい、本当に調理場で追われています。もし調理や子どもなどに少しでも関心があったら、「しずおかキッズカフェ」で検索していただいて、お問い合わせ欄があるのでぜひコンタクトしてください。次の開催日は2020年1月11日と25日です。

報告４

静大フューチャーセンター

増田彩香、小田しずく
（静大フューチャーセンター5代目学生ディレクター）

1．静大フューチャーセンターとは

（増田）　静大フューチャーセンターの活動事例について、静岡大学地域創造学環3年の増田と人文社会科学部経済学科の小田から紹介します。

初めに、フューチャーセンターのワークショップの中でどういう立ち位置にあるのかという話を小田からさせていただきます。

（小田）　私の方からは、静大フューチャーセンターとはどのようなものかということについて説明します。フューチャーセンターは、おおまかに言うとワークショップの一種です。ワークショップの中でも特徴があって、フューチャーセンターは多様性、対話、未来志向という三つの柱を持っています。

まず、多様性とは、性別や年齢、職業、学校などが異なる人が集まる場であるということです。対話というのは討論や議論ではなく、何か意見を言われたときに頭ごなしに否定するのではありません。それはいいね、ナイスだねという感じでお互いに受け止め合う会話の仕方が対話です。未来志向というのは、先に実現したい未来を描いてそこから逆算して今の自分にできることを考える方法です。英語にするとbackcastingです。対義語はforecastingで、現在を起点にして考える思考法ですね。つまり、フューチャーセンターとは、悩みや課題を持った人（テーマオーナー）を中心に幅広い立場や年齢層の、さまざまな価値観を持った人が集まって未来志向で対話する場になります。

静岡県では2011年に、静岡県立大学のフューチャーセンターであるKOKULABOフューチャーセンターで始まりました。KOKULABOのモデルを生かして、2011年に静大フューチャーセンターが発足しました。静岡県には現在、全部で11団体のフューチャーセンターがあります。住んでいる地域にあったらぜひ参加してみてください。

静大フューチャーセンターの運営について簡単に説明すると、コミュニティではなくプラットフォームという形を大切にしています。4人いる学生ディレクターがテーマオーナーと打ち合わせをして、日時と会場を決定します。その後にFacebookの公式ページで告知して、参加者を集めて開催する流れです。主な開催場所は、静岡大学共通教育C棟4階の宇賀田栄次先生の研究室です。基本的に学生が運営していて、地域の方の協力の上で成り立っています。

2．特徴と理念

（増田）　もう少しフューチャーセンターについて深掘りします。小田の方からワークショップの中のフューチャーセンターはどのようなものかという話をしてもらったのですが、ちゃんと定義をしている方たちがいて、フューチャーセンターの創始者であるレイフ・エドビンソンは、センターの本質を「不可能に向かっていくこと」と定義していますし、私はこちらの定義が皆

さんになじみやすいと思って持ってきたのですが、「ひとつの目的のために通常の組み合わせでは生まれないような多様な観点の関係者が集う場であり、各関係者が持つ知的資本や知識資産を掛け合わせて協業し、新しい価値を生みだす機能」とFuture Center Alliance Japanは定義しています。

それを受けて、私たち静大で行うフューチャーセンターはどんな定義かと言うと、「多様な参加者が未来を創るプロセスを共有し、『新しい未来』に出会う場」と私たち5代目ディレクターは定義しています。ただ、今（2019年12月）の時点でそう定義しているだけで、来年春はまったく違う定義をしているかもしれないので、このような報告の場ではあえて日付を入れています。

静大フューチャーセンターの内容をもう少し説明すると、通常の定例会を大体月1回ペースで開催していて、次回で77回目を迎えます。番外のフューチャーセンターは、自信ありませんが、30回ほど開催していると思います。

フューチャーセンターがそもそも持っている機能の一つは、出会う場であることではないかと考えています（図1）。社会問題についていろいろな登壇者が事例として発表してくださっていたのですが、とても複雑で、どの方も自分一人でやっているという話は決してしなかったと思うのです。いろいろな人たちが複雑化する課題に取り組む必要があります。コミュニティ単体では決して解決し切れないということが今の社会課題であると考えています。

図1　「未来のステークホルダー」と出会う場

そこで、「未来のステークホルダー」という書き方をしたのですが、今現在はつながっていないけれども、これから先、もしかしたら10年後につながる予定の人たちと会うことができる場がフューチャーセンターであると考えています。私たちディレクターにできることは、プラットフォームであり続けることなのではないかと考えています。

どこか他人事になっている社会課題に対して、例えばテーマオーナーの話を深く聞いてあげて、「これは自分にも関係あることだな」とか「確かにこれは問題だな」とか、もっと言うと「この人だから応援してあげたい」と思うことによってプロセスが共有されて、自分事化できるという過程をフューチャーセンターで踏むことができるのではないかと考えています。

もう一つの機能は、大学であることだと思います。KOKULABOとわれわれ、それから島田商業高校もフューチャーセンターを運営しているのですが、学生が運営するフューチャーセンターの持つ強みは、私たち学生が「鎹（かすがい）機能」になれることだと、一緒に活動している宇賀田先生はおっしゃっています（図2）。舞台が地域の大人同士だと、地域の方たちはしがらみがあるのです。あそこの団体のAさんとここの団体のBさんはものすごく仲が悪いけど、学生が間に入って話を聞くことによって、「実はAさんはそう考えていたのか」「Bさんはそんなに悪い人じゃない」というふうに、

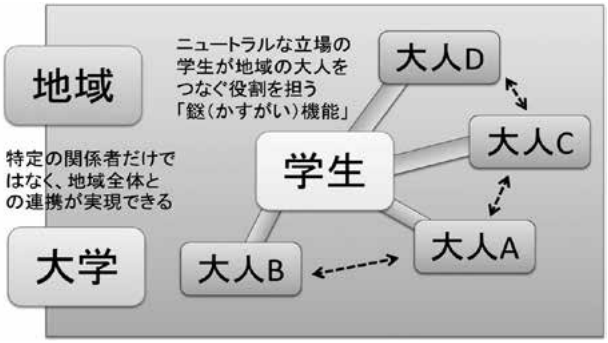

図2　学生が地域の大人同士をつなぐ（静岡大学　宇賀田栄次）

学生がつなぎをすることができるという現場に私も何度か立ち会ったことがあります。

それから、これは会の中でよく見られる現象なのですが、私も小田も他の2名も、有志で集まってディレクションとファシリテーションをしています。年齢を言い訳にするわけではありませんが、私たちは年齢も低いですし、経験値も足りない中でやっているので、大人の人たちが見兼ねて助けてくださる場面がたくさんあるのです。私たちもそこに甘えてはいるのですが、これは上下関係に縛られなくて、場に主体性が生まれるというふうにも捉えることができると私は考えています。

ここまでが一応、静大が持っているフューチャーセンターとしての機能の話でした。ここからは実際にどんなテーマで、誰が来るのかという話をしたいと思います。

3. 実際の活動

最近扱ったテーマでは、例えばカラーセラピストさんがテーマオーナーになってくれて、「お客さまの中に親子のすれ違いで悩んでいる人がいるのだけど、すれ違いはいいことなのか、悪いことなのか」というところから、「すれ違いとの付き合い方を考えたい」というテーマを設けたことがありました。また大学教員の方からは、就活ルール（採用選考に関する指針）が2021年卒から廃止されることになりましたが、就活ルールが変わっていくことに直面する中で、私たちはどんな就活がしたいのだろうということを一度、自分事として捉えて考えてみないかという提案をいただきました。

では、どんな方がテーマに応じて参加するかというと、基本は学生と社会人がほとんどです。最近で一番若い子だと小学6年生の子がお父さんと一緒に来てくれたりしたこともありました。社会人の方で学生の考えを聞きたいという方や、テーマに関心がある学生、社会人が来たり、うれしいことに知人の紹介で、「ここは面白いから行きなよ」という紹介を受けた方だったり、学生で意外と多かったのが、「何かを始めたい、何か地域にアクションを起こしたいけれども、自分ではどうしていいか分からなくて取りあえず来てみた」という方もいました。とてもうれしいことだなと思います。

静大フューチャーセンターは定例会と番外編に分かれるのですが、番外編としては、南伊豆の方でも毎年夏にフューチャーセンターを開いています。当事者の方たちの前で恐縮なのですが、確かに課題の多い地域だなと私も感じているので、例えば市内に住んでいる学生と地元の方が一緒に伊豆の町の未来について考える会を開いたり、私たちディレクターが宇賀田研究室で待っているだけではなくて、実際にその地域に会場を設けてフューチャーセンターを開くということも何度かしています。テーマによってゆかりの強い地域がどうしてもあるので、実際そこに行った方が効果が得られると私たちが判断した場合は、場所を変えて開催しています。

実はスピンオフ企画といって、フューチャーセンターは未来について考えるという課題がなくてもいいのではないかということで、幾つか遊び要素を設けたワークショップも開催しています。例えば未完成ゲームです。これは私が1年生だった3年前に第1回を行い、1年半越しぐらいで第2回を行ったという少し変わった会でした。リアセック社をぜひ検索してほしいのですが、面白いカードゲームを作っていて、自己分析ができるカードゲームなのです。今日の講義の受講生は1、2年生が多いのでまだ関係ないかもしれませんが、自己分析は就活を考えるようになったらとても大事なので、今日はこれだけでも覚えていってほしいと思います。

リアセック社の自己分析カードを自分でやりながら、他人と対話をするのです。例えば、「私は今、自己分析カードでこういう結果が出たのですが」と言うと、「確かに君はこういうところがあるよね」というお話や、大人が学生に対して「自分の経験からこういう結果が出たのでは

ないの？」とアドバイスをくれたりする場面もありました。

なぜ静大フューチャーセンターがこれをやっているかというと、新たなテーマオーナーの発掘をしたくて始めているのです。自分を知ることができて、そこから自分の関心や課題意識に気づけた人がもしかしたら新しいテーマオーナーになるのではないか、なったらいいなという皮算用から始めています。でも、これはとても好評で、特に3回生の方たちから「またやってほしい」という声をいただいているので、ぜひ開催しようと思っています。

そしてもう一つは、テーマだけを決めて普段のフューチャーセンターよりも緩く対話をしようという会「ゆるっと会」も行っています。既存の価値観から問いを作って疑問を持つことは、問いがあるとできることなのですが、意外と普段暮らしていると気づかない問いがたくさんあるのではないかというところから、今の価値観を塗り替えながら未来の自分の財産につなげる会も開いています。最近では、「文系・理系・体育会系って何？」みたいな、普段当たり前のように使っているけれど自分の言葉で説明できるのかというところから対話を始めたりもしています。ここまでがフューチャーセンターの説明です。

突然ですが、もし女性が毎日すっぴんだったら皆さんはどう思いますか。私も今、マナー程度にお化粧ぐらいしておこうと思ってしていますが、この質問をこの前、ある女性の方にされたのです。実は、これを言ってくれた人はKuTooやMeTooの活動に関心を持っていて、そこから卒論まで書いてしまった大学4年生の方でした。彼女が最後に言っていたのは、当たり前といわれていることに疑問を持つこと、しかも当たり前を他人が求めてきている事実に気づくことでした。彼女はこれが大事なのではないかというところから課題意識があったそうです。

それで、「もし女性が毎日すっぴんだったらというテーマでみんなの考えを聞きたい」と私に相談がありました。勘の良い方はもうお気づきだと思うのですが、次回予告です。年明け最初のフューチャーセンターを2020年1月20日の18時30分から、先ほど小田が紹介したように、共通教育C棟の4階、宇賀田研究室で行いますので、皆さんもしご予定が空いているようでしたら、77回というゾロ目の回でラッキーだと思うので、ぜひいらしてください。ご応募は、お手元の資料からQRコードを読み取ることができると思いますので、関心を持ってくださった方はSNSなどからコンタクトを取っていただければと思います。

報告５

農業をもっと身近に
～学校放課後児童クラブにおける活動報告～

榊原宏美（静岡県立静岡農業高等学校教諭）
田澤柊菜、村越星南（いきものがかり）

1．はじめに

（榊原）

今日はこのような場に招待いただきまして、ありがとうございます。今日は生徒を連れてきていますが、全員が静岡農業高校の環境科学科の生徒たちです。環境科学科では土木や造園、動物の飼育などを学んでいますが、今日来ている生徒たちは農業高校の中では珍しく、植物も育てるし、動物の飼育もするという科の生徒たちです。動物当番があって、多くの生徒たちが平日であれば朝7時半から、そして放課後も動物の世話をしています。年末年始も朝8時半からと午後2時半から、動物当番があります。

元々、農業クラブというのは部活動やクラブ活動とは別で、教科の授業の中に組み込まれた活動です。授業の中で生徒が気づいた課題に自主的に取り組むような活動をしています。本日の発表は、2017年に問題提起をした生徒たちから引き継いだ活動をまとめたものになります。今までいろいろ聞かせていただいた発表とは少し異なるかもしれませんが、ぜひ生徒の取り組みを聞いていただければと思います。よろしくお願いします。

2.「いきもの教材」について

（田澤）

「タネっていろいろな形があるんだね。ウズラってこんな大きい声で鳴くんだ」。農業を知らない人がたくさんいるこの事実にいつも驚かされます。さまざまな不安を抱えた農業をよい方向へと導くためには、日常生活において遠い存在となってしまった農業をもっと身近なものと再認識してもらわなければなりません。それには農業を知ってもらうことが必要です。私たち「いきものがかり」は農業の学びにより、農業をもっと身近にしていきたいと考えています。

図1　2017年度の活動計画

私たちの活動は、2017年から始まりました。先輩方は、農業を学ぶ高校生と動物介在活動を通して交流している地域の小学生とが農業をともに学ぶことができる教材、「いきもの教材」の作製について研究・実践を行いました（図1）。「いきもの教材」とは、農業高校で学ぶ「農業と環境」や

図2　教材の作製

「生物活用」の学習内容と、小学校の生活科や理科の学習項目とを照らし合わせ、かつ融合させていくことで、小学校の先生方が授業で活用できるような科学教材のことです。教材は一つ一つ手作りしています（図2）。教材に取り組むことで科学的な見方・考え方の基礎を学べるよう、静岡科学館のスタッフの方からアドバイスをいただいたり、小学校の学びに対して学術的にアプローチできるよう、常葉大学教授田代直幸先生からもアドバイスをいただいています。

教材の概念は、農業の学びと小学校の学びを融合させ、参加・体験学習を通じて理解を深めるハンズオン（hands-on）の教材となっています。各教材には教材の価値を高めるため、教材説明書を作成しています。特に、教材バランスの作成には力を入れています。教材バランスは、教材に取り組むことで学ぶことができる科学的な見方・考え方の基礎となる4つの力（見つける力・比べる力・関係付ける力・活かす力）と、農業へのつながりの5項目、観察に必要な五感（視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚）の5項目をグラフとして記載しています（図3）。数値は、本校生徒によりワークショップを実施し、アンケート調査をした結果に基づいています（回答形式：リッカート尺度、回答数：53名）。

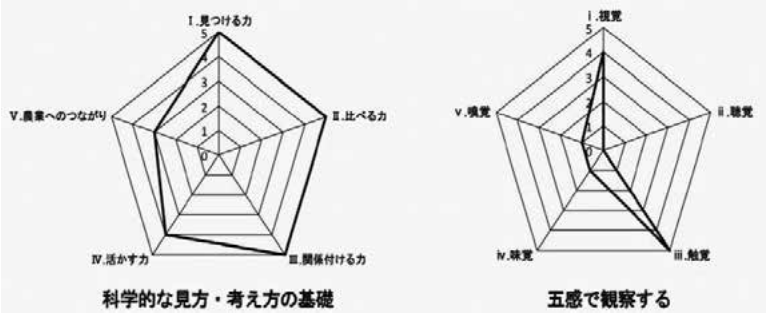

図3　グラフ化した教材バランス

例えば「やさいのおなか」は、野菜の断面図から野菜の名称を当てる教材です。小学2年生の生活科、3年生と5年生の理科に活用できます。「やさいのおはな」は、身近な野菜を題材とし、食べる箇所によって根菜類、葉菜類、果菜類に分類できることを学びます。小学2年生の生活科、3年生と5年生の理科に活用できます。「どうぶつのおくち」は、切歯、犬歯、臼歯の役割を学んだり、食性によって歯の構造が異なることを理解したりすることができます（図4）。小学1年生の生活科、4年生と6年生の理科に活用できます。

図4　生き物教材「どうぶつのおくち」

これら「いきもの教材」の作製を通して、私たち自身の農業の学びを振り返ったり、児童たちが農業について学ぶことの難しさを知ることができたので、2018年は教材を活用したワークショップの開催を目指すことにしました（図5）。そこで、2018年は2017年の結果を踏まえ、いきもの教材の活用によるワークショップを通して農業の学びを深めることを目的とし、多くの教育関連施設でワークショップを開催しました（図6）。静岡科学館で行われたワークショップでは、不慣れということもあって、内容の詳細を掲示しないなど、参加者への気配りの不十分さ、ワークショップの

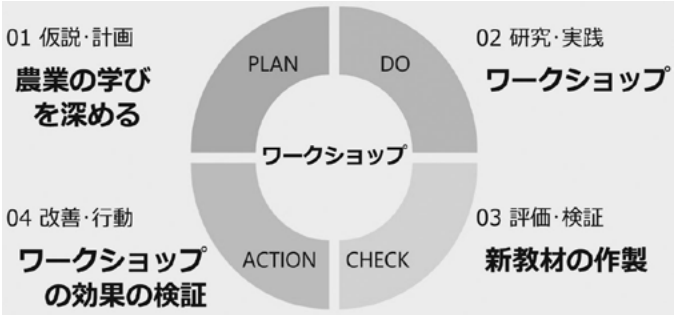

図5　2018年度の活動計画

未熟さといった課題を感じました。

ワークショップの実践経験を積むため、市内の学校放課後児童クラブも訪問しましたが、科学館の児童とは異なり、教材への興味関心の低さ、私たちのワークショップの未熟さを感じました。また、100名以上の児童が通っている実態を知らなかったため、順番待ちをさせてしまった児童に対して、急きょ読み聞かせをして時間をつなぐというハプニングも起こりました。

図6　静岡科学館でのワークショップ

後日、支援員の方へインタビュー調査を行いました。いきもの教材によるワークショップはたいへん好評で、「農業はもちろん、動植物への興味関心につながる活動だ」というお言葉をいただきました。しかし、「長期休業中にぜひ開催してほしい」「クラブが抱える課題を知ってほしい」「支援員を支援してほしい」というお話も伺い、学校放課後児童クラブが抱える課題に気づかされました。

私たちはこの課題の解決に向け、ワークショップの振り返りを行いました。

（村越）

まず、教材への取り組みに興味関心を持続させるといった条件を加えた新教材の製作に取り組むこと、新教材を活用し、より良い活動への進行役（ファシリテーター）を導入し、ハンズオンからマインズオン（minds-on）となるようなワークショップを目指しました。新教材の「いきものマスターに挑戦」は、正答数によって異なる認定証をもらうことができます。野菜の断面のおもしろさを活かして表現する「やさいのはんこ」、押し花の同定や固定によってオリジナル標本カードを作成する「おはなでしおり」などもあります。この教材で使用する押し花は、授業で採取から製作までを私たちが行っています。

静岡市社会福祉協議会の協力を得て、市内の学校放課後児童クラブに対してアンケート調査も実施しました。事前調査で最も大きな課題だと推察していた長期休業中のプログラムづくりについては、「困っている」「やや困っている」の回答が全体の80％を占めました。夏季休業中は支援員の負担が大きく、プログラムのマンネリ化、外部団体への謝礼金の捻出、依頼可能な団体の未開拓、支援員の負担増加といった声が届けられました。また、長期休業中の活動プログラムについては、クラブが活動に取り入れたいとする5つの体験のうち、観察や実験などの自然体験、クラブ外の人々との交流体験といった活動が少ないことが判明し、活動プログラムにおいても課題があることが分かりました（図7）。

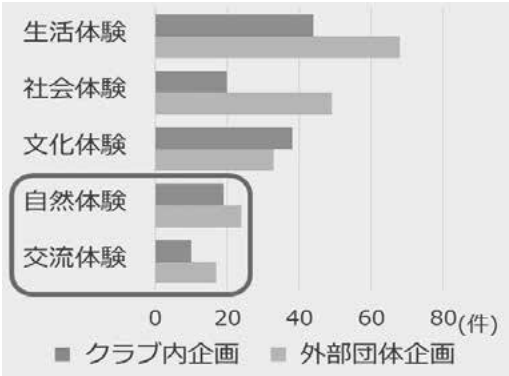

図7　学校放課後児童クラブの課題

これらの評価および検証後、学校放課後児童クラブで再度ワークショップを開催しました。今回は人数の把握はもちろん、多くの児童が飽きずにワークショップに取り組めるよう新教材を活用したり、各教材のワークショップを効率よく回れるよう工夫を凝らしたりしました。この結果を受け、私たちは児童クラブが抱えている社会課題に対し、いきものがかりの活動そのものがプログラムづくりの課題解決となるとともに、クラブ内外での活動が難しい自然体験や

交流体験の場となると確信しました。

3. ワークショップの分析から見えてきたもの

2018年はワークショップを軸に、さまざまな施設でのワークショップの開催と新教材の作製を実施し、農業の学びを深めてきました。しかし、ワークショップを通して児童たちの農業への興味関心が向上したかどうかが疑問だったため、2019年はワークショップの効率を検証したいと考えました（図8）。

2019年は今までの活動を踏まえ、いきもの教材とその活用によるワークショップという農業の学びを通して、農業を知る機会を創出したいと考えました。そこで、私たちのワークショップの前後でアンケート調査を依頼し、テキストマイニング分析により、農業の学びに対する学習傾向の解析を試みました。定番教材である「やさいのおなか」、児童に人気の高い「いきものマスターに挑戦」、手が絵の具だらけになっても誰も怒らない「やさいのはんこ」、生体のウズラとその卵を使った新教材「たまごのふしぎ」、「どうぶつのおくち」の継続教材である「どうぶつのうんち」といったいきもの教材を活用してワークショップを開催しました。

図8　2019年度の活動計画

テキストマイニング分析を行うためのアンケートでは、農業について知っていること、分かっていることなどを自由記述してもらいました。

ワークショップ前の結果では、ほとんどの児童が「農業」「わからない」という単語を記述していました（回答児童数78名）。抽出後のグラフを詳しく見ると、「農業」が87個と最も多く抽出され、次いで「わからない」「育てる」がそれぞれ37個抽出されました（図9）。このデータを用いて、それぞれの抽出後の関係を共起ネットワーク図に起こしました。ワークショップ前の共起ネットワーク図では、「農業」と「わからない」という2つの抽出語の結び付きが大きいことが分かりました（図10）。また、抽出後のグラフと共起ネットワーク図の結果から考察すると、ワークショップ前の農業に対する知識は一般常識的なものしかないと感じました。

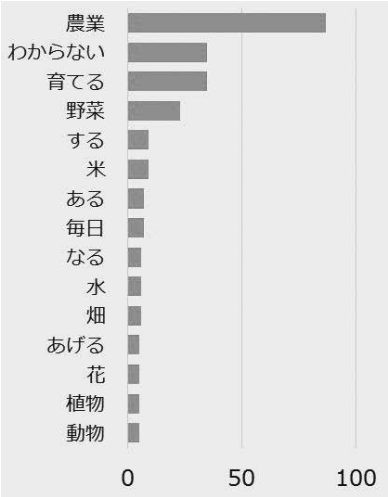

図9　アンケート結果（抽出語、ワークショップ前）

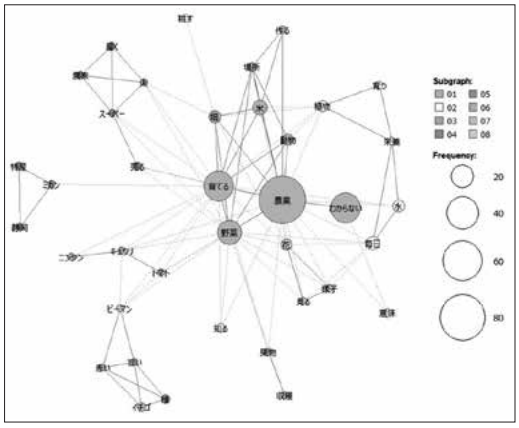
図10　共起ネットワーク図（ワークショップ前）

ワークショップ後の抽出後グラフを見ると、「ワークショップ」「わかる」という語が回答児童数以上に抽出されました（回答児童数110名、図11）。ワークショップ前の抽出語グラフと比較すると、教材および動植物に関する抽出語が増えていることが分かります。ワークショップ後の共

起ネットワーク図をワークショップ前の図と比べると、抽出語が増えたとともにそれぞれの抽出語が複雑につながっていることが分かります。「ワークショップ」という語を中心として、活用した教材の「ウズラ」「タネ」「うんち」「農業」という語が多く抽出されました（図12）。また、これらの語に「たまご」「小さい」「大きい」「動物」「育てる」といった具体的な語がたくさん連なっており、ワークショップで知り得た農業に対し興味関心がより深まっていると感じました。

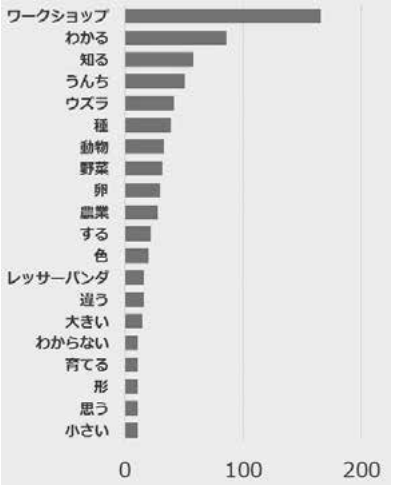

図11　アンケート結果（抽出語、ワークショップ後）

これらの結果から、いきもの教材とその活用によるワークショップという農業の学びが農業を伝えるとともに、知る機会を創出していると立証できました。今後は農業をやってみたいという思いを醸成できるような教材作りと、それらの教材によるワークショップを開催していきたいと考えています。

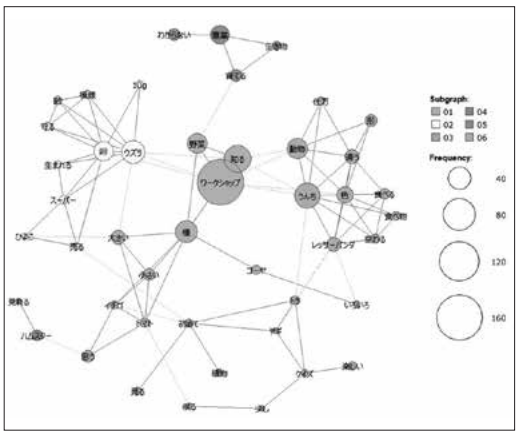
図12　共起ネットワーク図（ワークショップ後）

私たちはこの研究活動を通して、農業を学ぶ高校生、地域に存在する農業高校を活用することで、人と農業が出会い、農業をもっと身近にしていくことができると実感しています。日常生活において遠い存在となってしまった農業がもっと身近な存在となるよう、この研究成果を生かして農業を知ってもらうための一つの仕組みとして構築していきたいと考えています。そして、いきものがかりの活動が将来の農業を支える人材との出会いの可能性を開いていけるよう、私たちは皆さんのそばに農業を届けていきます。

（田澤）

少し宣伝させていただきます。2020年5月に本校農場を会場にフィールドワークを実施する予定です。対象は、農業からかけ離れた世代である大学生の方々で、地域の農業を知ってもらったり、動植物に触れ合ったりしてもらうことで、農業を広めていければと考えています。2月ぐらいに大学にチラシを配布するのですが、少しでも興味を持ってくださった方はぜひ参加していただければと思います。お願いします。

パネルディスカッション

阿部――フロアから質問をいただく前に、かなり豊富な内容を短い時間に詰め込んでもらったので、最初に報告者の方々に一言ずつ、補足がありましたら簡単にお願いして、他の報告者やグループのこれが気になったということや質問、感想などがありましたら、お願いします。

深澤――今回のテーマが「地域課題をめぐるつながりの可能性」だったので、いろいろな可能性が含まれていることを簡単に説明しました。伊豆南部はすべて同じ課題を持っていて、その中でやはり大学生の力はとても大きいということを発表させていただきました。先ほどの人口ピラミッドを見ていただいたとおり、その年代が一番穴が空いている世代です。今のところは高校もあるので、高校生までは町にいますが、そこから先の高校卒業以上の人たちがごそっと外に出ています。その中で、もちろん出身の方もそうですけれども、その世代の方々がどうやってこの地方の課題に目を向けるか、どういうふうに興味を持っていただいたらいいのかということを試行錯誤してきました。

先ほど地域課題ではない発表の方々がおっしゃっていた共通点は、目を向けることや気がつくことだったと思います。やはりどこかで他人事という部分が地方の課題にはあると思いますし、都会の学生にとってはかけ離れたことかもしれませんが、実は皆さんが卒業して社会の中でいろいろ経験する中で、課題解決能力がこれから非常に大事なものになります。なぜかというと、今までわれわれ大人たちが経験してきた世界とは違う世界が皆さんを待っているからです。技術革新もそうですし、職業の変遷もありますし、人口減少による経済の縮小の中で、どういった方向性でどういう生き方をしていくかということを真剣に考える必要があると思っています。

今まで誰も見たことのない世界を皆さん経験するわけですから、そういった意味では適応能力というか、課題解決能力というか、そういったことを身につけていただくために、課題と闘っている地方というのは何かヒントを与えられるのではないか、もしくはそういった技術を提供できるのではないかと思っています。その点では、無関心の反対語は愛情だというのは有名なマザー・テレサの言葉ですが、無関心がやはり人の成長を妨げる基でもあるので、できるだけいろいろなことに興味を持って、好奇心と向上心を持って皆さんに生活していただけると、地域課題に限らずいろいろな可能性が皆さんにもっと与えられるのではないかと思っています。

自分としてはそういったところで、自分の地域の課題解決に向けて、いろいろな人と会って、いろいろな発想に変えて、次のチャンスにつなげることが役割かなと思っています。多分、皆さんより先に死ぬので、そういった意味では次世代をつくるということ、次に何を残すかということを常々考えながら生きていかなければならないと思っています。そういった課題に取り組んでいる高校生も含む若い方々と接して、明るい日本の未来がすごく見えてくるような気がしています。正解がない世の中に皆さんは突入するので、これでもいいのだ、失敗してもいいのだ、トライ＆エラーを続けるのだということで、どんどんいろいろな経験をしていっていただくといいと思っています。

今回、地域課題の解決をどういった視点でどういうふうに活用していただけるかということで、うちの町は課題が豊富だということをアピールしながら、なおかつ課題解決を通して共に成長していけるような仲間作りをしていきたいと思っています。先ほどの南伊豆の山口さんも言っていましたが、関係人口にもぴんからきりまであって、そういったものをどうつなげていくかということを一緒にやっていかなければならないと考えています。こういった機会にいろいろな方の活動を聞けることは自分にとっても大変勉強になりますから、明日からの活動への

刺激をいただいて、大変ありがたい企画でした。ありがとうございました。

山口――私が感じているのは、今回も出てきている可能性という言葉ですけれども、可能性があると思えばあるし、ないと思えばないので、常に失敗を恐れずに取り組んでいくことが可能性につながるのではないかと思っています。やめてしまったところで、結果は終わりになってしまうので、あえて言えば、いつかは何らかの結果がついてくる、それが可能性だと思っていて、そこへ向かって途中でやめないように、なるべく動いていきたいと思っています。

ただ、行政に属する人間としては、判断として途中でやめなければならないことも出てきます。何をもって地域の課題や地域が向かうべき方向性としているかという考え方も、行政の中でいろいろ異なってくることもあります。そこで、行政の立場で考えると、可能性を追求し続けることができない可能性もある中で、皆さんのような学生の方々が将来、自分たちが年を取ったときにどういう地域でありたいか、どういうことができるのかということを考えていくことで、より可能性が大きくなるのではないかと思っています。

もう一つは、関係人口をどう捉えるかという課題もあると思います。一般的に「私はこの地域の関係人口です」とは言わないと思うのです。「地域から見て、こういう方たちはうちの地域の関係人口になり得る人たちだ」と言うことが多いと思います。われわれ地域側として、どういう人たちを求めているのかということを、ある程度伝えていくことも必要になってくると思います。

ご存じの方もいると思いますが、南伊豆町は東京都杉並区と深い連携を築いています。杉並区は58万人ぐらいの人口がありますが、そことの関係人口づくりに一生懸命取り組んでいるところです。元々は移住や定住に力を入れていましたが、なかなか移住・定住には結び付かない現実もありますので、どうやってその人たちが地域に貢献していただけるような人材になるかということを常に考えていく必要があります。

杉並区との連携においても、例えば滞在する場合にどちらに税金を納めるかとか、選挙権をどうするかというのは、最終的には居住地をどこにするかによって判断されることなので、権利と義務がどちらの地域に生じるのかということも関係人口の中で検討していく必要があります。それから、これからの時代、われわれもそうですが、幾つかの仕事や拠点を持つ可能性がすごく高くなると思います。自分たちがどこに軸足を置いて、どういう働き方や生活をするのかというのを自分で選べる時代が既に来ていると思っています。私も含めて新たな仕事や別の取り組み、地域づくりなどが、行政の職務とは別に仕事になっていく可能性もあると考えています。そういった観点で、皆さんは今からいろいろな可能性に向かって取り組んでいくことが必要になってくると思いますし、それが皆さんの可能性をさらに広げることになるのではないかと思いました。

荒武――まず、少し補足させてもらいます。地域づくりの人として今日は呼んでいただいて、元々は学生の頃から地域に関わらせてもらっていた人間として皆さんにお伝えできたらいいと思ったのは、多分関わる、関わらないという点では、学校のカリキュラムの中で地域に関わるような人もいれば、自主的にそういう活動に参加する人もいるし、はたまた特に関わらないという人もいると思います。可能性という言葉を使えば、自分の人生の可能性を切り開けるのは自分だけというところがあるのではないかと思っています。

自分の思う道を自分で突き進むような主体性を持って自分の興味のあるところに飛び込んで、課題などは後から考えてもいいのではないかと個人的には思っている面があります。皆さんはこれからの可能性がある方々だと思いますので、主体的にいろいろなところに取り組んでもらえると、とても明るい未来が開けるのではないかと思いました。

報告者の久保田さんにお聞きしたいと思っていることがあって、学生時代に僕もちょっとした社会福祉施設の空き家改修のようなことに携わったことがあります。どれぐらいの度数なのか分からなかったのですが、障害を持っている方たちが過ごすスペースに関わって、改修が終わった後もそこに通うような関係ができました。今までの文脈では障害を持った方と触れ合う機会はまったくなかったのですが、1年ぐらいその施設に関わって、みんな違う価値観を持っている中で、今までの日常では関わることがなかった人と触れることがありました。

まだその経験を具体的にこうだとは言えないのですが、久保田さんのお話の中で来年度以降、学生さんたちに施設に滞在してもらう取り組みをしていけたらというお話をされていました。僕が学生時代に関わったときに、とてもいい経験をさせてもらったと思っていて、まだ言葉にできない何かを久保田さんがお持ちでしたら、学生さんにどういう経験をしてもらいたいかというところを少し教えてほしいです。お願いできますでしょうか。

久保田――今の学生さんはそんなに豊かではないと思っています。親が豊かなのは別ですが、家庭も結構大変だったり、バイトをずっとしなければならなかったりします。それでいて、さらに「外にボランティアに行け」と言われてもなかなかできない人もいるし、そもそも私は、大学はじっと引きこもって勉強する場所であってもいいと思っているのです。就職もそうですが、今の学生さんがかわいそうだと思うのは、3年生ぐらいになるともう就職活動をしなければならなくて、4年生になったら「本当に就職しなくてはならない」という強迫観念にとらわれ過ぎだと思うのです。多分、行政の方は違いますが、私なども大体4年生で卒業してすぐに就職しようなどと思っていませんでした。

だから、その人その人の自立の時間はさまざまあると思うのです。あまり社会のいろいろなルールに惑わされないで、自分で自分の時間軸を持ちながら、今何をしなければいけないかということを考えながら生活した方がいいと思います。あまり大人に利用されてはいけません。

そういった意味で、別に「ボランティアに来てくれ」と言っているのではないのです。「とにかく障害のある人に会ってみてください」と言っているだけです。皆さんの人生の中で、会ってみて損はないと思います。「うっ、きもい」とか「もうこの人たちに近づきたくない」というのもあっていいのです。だけど、会ってみないと分からないこと、触ってみないと分からないことは、世の中にたくさんあります。そういう意味で、障害福祉施設はいくらでもあります。

それから、ヘルパーという仕事があります。時給が1500円ぐらいと結構いいのです。夜間になると夜間手当のようなものもあって、プラス5000円とか3000円と結構いいのです。今、ヘルパーが不足し過ぎて、障害者を支えられないところが続出しているので、学生の間だけで結構ですので、そういうヘルパーのような仕事もやってみたらどうかと思います。嫌だったら辞めればいいのですから、それぐらいの気楽な気持ちで、まったく会ったことのない人たちに会ってみることです。

言葉にならないというのは、すごくいいことです。言葉にならなくていいのです。わざわざ言葉にする必要もないし、答えを出す必要もありません。障害のある人たちに会って、「私はこうでした」などと言わなくていいのです。でも、何かどこか刺さったというか、ささくれたかさぶたに心がもぞもぞするような感覚を味わってほしいと思います。それがずっと考えられるきっかけになります。楽しかった、良かったということは、その人の人生にとって何の印象にも残りません。むしろ違和感の方が人間は印象に残ります。ですから、障害のある人に会うこともそうだし、文学や芸術や演劇や音楽に出合うということでも全然いいと思います。とにかくそういうことをがっつり4年間できるのだから、あまり周りの大人にいろいろ言われて動かない方がいいと思います。

小林――今日は人口減少や地方自治体存続の危機など悲観的なデータがありましたが、どの報告を聞いても逆に地域づくりのチャンスにしているという内容がかなり多く、久保田さんの発表にあったオルタナティブスペースのように、地域の中に空き家や古民家などの隙間はたくさんあって、その場所こそいろいろな可能性を秘めています。荒武さんもそういうところに着目し、ご専門を生かして地域をデザインされている取り組みに毎回感銘を受けています。若い方で組織する力も大事だと思いますし、農業高校の皆さんの場合も、年齢が近い高校生だからこそ児童クラブに入って分かったニーズや発想があったと思うので、とてもすてきな取り組みだと思います。今日は私の方が勉強させていただきました。

増田――フューチャーセンターの内容で補足は特にないので、皆さんの発表を聞いての感想になるのですが、自分の身近なところに落ちてきた課題、ふとした瞬間かもしれないし、そういう境遇に出会ってしまった課題に対して取り組んでいく方もいれば、もちろん勤めた地域であったり、住んでいる場所、生まれた場所に対して愛着があって、そこから活動が広がった方もいます。

逆に漠然と大きな課題、例えば今日の農業高校の発表にもあったように、若者の農業離れというちょっとだけ漠然とした課題から、最後の方には地元で自分たちがお世話になっている小学校に行って、訪問したら支援員さんたちが困っていたという身近な課題に気づけたようなエピソードもありました。ですから、課題という捉え方でなくてもいいと思うのです。それこそレッツの久保田さんの話の中にも、問題としているのは誰かという話があったと思うのですが、その言葉がすごく刺さっていて、誰がそれを課題や問題にしてしまったのだろうという視点は持ち続けなければいけないと思っています。その視点で皆さんの発表を振り返ったときに、いろいろな出会い方があって、心に刺さったものから皆さんそれぞれ活動しているのがとてもすてきで、今日一日勉強になりました。ありがとうございました。

小田――私からもフューチャーセンターについては特に補足はなくて、2020年1月20日のセッションに参加できたらと思うぐらいです。素朴な疑問で、農業高校さんは10人弱ぐらい来ていて、授業でしているということなのですが、これは選抜メンバーで、普段はどれぐらいの人数でやっているのですか。少し気になりました。

榊原――先に質問にお答えします。来ているのは一応選抜メンバーになります。3年生は11月でいきものがかりを卒業するのですが、各学年大体6人ぐらいずつ声を掛けたり、「友達が入っているから入りたい」と言って自主的に参加している生徒たちも多く、18人ぐらいで活動しています。そこに科学館のときや放課後児童クラブのときだけお手伝いで参加したいという準会員の生徒たちがまだまだいて、写真に写っていたのはトータル21人ぐらいだったのですが、大体それぐらいの人数で放課後児童クラブや科学館では活動しています。クラスのようになって、まとめるのは大変です。

今日参加して、本当に多くの方がいろいろな地域の課題に取り組んでいるのだということを実感しました。教員という立場でいると、地域の方から違った視点からお話を聞く機会がなかなかなかったので、大変勉強になる機会だったと思っています。本当にそれぞれの課題も、それこそ久保田さんもおっしゃっていましたけれども、自分の心のどこかにささくれがあって、そこに引っかからないと取り組まなかった活動だと思っています。本当に多くのことが自分のこととして捉えられないと課題には向き合わないし、ささくれに引っかかったときに初めて課題になると自分は思っているので、自分がそのことにささくれない人は、それを課題として取り組むことはしないと思います。

それぞれ頑張っている人たちもいれば、そのことに無関心というか、一生懸命取り組まない

人もいると思うのですが、今は高校生も定員を満たすほど集めるのがとても難しくなっていて、大学もきっと同じような現象にこれからなっていくと思います。それこそ若手というのはこれから取り合いになっていきます。変な話、教員などはまったくブラックだといわれていて、教員採用試験を受けてくれる学生たちが全然いない状態なので、教員も担い手不足が起こっています。今聞いてくださっている大学生の皆さんは、これから大人からの取り合いが始まります。

でも、先ほどの久保田さんのお話ではないですが、引く手あまただからといって、自分のやりたいことや心のささくれに引っかかったことがあるのに、4年生だから就職しなければと焦って就職しても、それは歯車に回されていくだけになってしまって、ふと気づいたときに自分がすごく疲れてしまったりということが起こると思うので、学生でいられる間にいろいろ見たり聞いたり知ってもらったりすることを、ぜひ学生の皆さんにはやってほしいと思います。

先ほど生徒も話していましたが、もし明日、スーパーで野菜が買えなくなったら、みんな農業が危ないと感じると思うのですが、あと20年ぐらい先になると、きっとそのような状況が起こるのです。しかし、今はまだスーパーで野菜をふつうに買えるので、誰も問題にしていません。でも、あと20年もすれば絶対に、今一生懸命農業をしている60〜70代の方たちは農業ができないので、野菜をスーパーで簡単に買えるかどうか分かりません。そのときに初めて農業について真剣に考える人がいても致し方ないと思うのですが、そういう事実を知ることができないと、これからの社会は生きていくことが難しいと思うので、学生時代は見たり聞いたり知ったりすることに時間を有効に使ってほしいと思います。

今日登壇されている若い方々は、とても意識の高い方だと思うのです。自分が学生のとき、こんなに意識が高かったかというと少し疑問なので、こんなに意識が高くなくてもいいと思うのです。ただ、知ろうとしない限りは、知らないまま終わっていって、自分の人生を豊かにすることにはつながってはいかないと思うので、ぜひいろいろな場に顔を出して、自分の心に引っかかったものがあれば一生懸命取り組むことをぜひしていただければと思っています。今日は生徒たちも「小林さんの子ども食堂に興味を持った」と言っていたので、ボランティアに行きたいのかと思ったら、「ご飯を食べに行きたい」と言っていました。でも、今日来なかったら知らなかったことなので、とてもいい機会をつくっていただいてありがとうございました。

阿部――ありがとうございました。ボランティアではなくてご飯を食べに行ってもいいのですよね。

小林――高校生以下なら無料です。

阿部――それはいいですね。フロアの方からの質問の機会が個別にはなかったのですが、この方にこんな質問をしたいという方がいましたら手を挙げて、名前も言っていただければと思います。どなたかいらっしゃいますか。最初は手を挙げにくいですね。三井先生、仕事柄幾つか興味があったりすると思うのですが、いかがでしょうか。

三井――静岡県教育委員会社会教育課から参りました三井と申します。今日はありがとうございました。私は社会教育課で、地域学校協働本部というものを担当しています。県内すべての市町で教育委員会が主管課となって、地域と学校とが対等のパートナーとなっていろいろなまちづくりを中心とした活動を、学校の時間だけでなく土曜、日曜も使い、また地域の人材を使って活動を進めていくことを推し進めている立場です。本日のテーマは恐らく地域づくり、まちづくりに主眼が置かれていると思うのですが、賀茂地区において、子どもを巻き込んで地域づくりの視点を持った活動をすることの可能性について教えていただきたいと思います。そしてそこに大学生、高校生が出張したり、足を伸ばしていただく形で参画することが、行政の立場として、それからNPOの立場として可能なのかという、その辺の可能性についてお教えいただ

ければと思います。

荒武――小中学生を対象にした取り組みが何か可能性としてあるかということですか。

三井――小中学生に最終的に町に戻ってきてもらうために、その町を好きになってほしいというのがあるので、そこも巻き込んだ形のものが可能かどうかということです。

荒武――町で活動しているNPOの立場から言うと、いろいろカリキュラムが決まった中ではあると思うのですが、地域学習というものがあると思っています。先生たちが考えることになっている部分がもうちょっとオープンになって、そういうものに興味がある親御さんなども関われたり、事情を知らないで話していますが、個人的にそこに関わりたいという思いはすごくあります。

その中で貢献できるところもたくさんあるのではないかと思っています。私は今、レンタルキッチンの運営をしているのですが、地元・稲取高校の被服食物部という料理を研究している部活の皆さんが月に1回、子ども食堂とまではいきませんが、夕食屋さんを平日夜に展開してくれています。40食限定で、1食500円のワンプレートのような感じですが、本当に予約制にしないと地元の人たちが行列を作ってすぐに売り切れてしまうという企画があります。高校生たちもいろいろ工夫していて、コミュニケーションを取るのが恥ずかしいという子たちがテーブルの上に感想ノートのようなものを置いておくと、地元の人たちがコメントを書いてくれたりします。そういう生徒さんたちの地域活動の場のようなところも展開していき、そこに大人たちもサポートができると、部活動としてもできることがあるのではないかと思いました。

深澤――行政の立場でまず言うと、教育は家庭教育から始まって学校教育、そして周りを含有しているのは社会教育ということになっていると思います。子どもたちに地元のことを知ってもらう上で、まず最初に関わるのは家庭であり、自分の親になると思うのです。その親がどういうふうに考えるかによって子どもに伝わるわけですから、家庭教育を教育しなければならないような状態に、アメリカを含め日本もなりつつあると思います。そういう時代の流れの中ではあるのですが、取りあえず先ほども登壇者が共通して言っていたのは、経験すること、見ること、感じることだと思います。まずそういった環境や空間や時間をつくって、子どもたちにどう経験させるかということを考えています。

先日も松崎町で農閑期の田んぼを花畑にする事業があり、10月から種まきを始めなければ間に合わないので、その種まきを子どもたちに手伝わせていました。ただ種をまくだけではなくて、土をかけたり、踏み固めないという条件があるので、そういうことも学びながら種をまかせます。

その他に、松崎町には台風15号、19号と上陸したのですが、被害が奇跡的に少なく、一方では長野県、千葉県、宮城県などでは人が亡くなったりして本当に大変な思いをしました。そういう中で子どもたちは災害の経験がないので、この真冬に体育館で子どもをそのまま泊めるという体験をしました。インフルエンザのはやり初めで、いろいろな意見を言われましたが、希望者だけということで募集しました。そのときに、自分も防災士なのですが、防災士の人を使って、被災したときに小学生にできることを学ぶとともに、体育館で自分のスペースがどれぐらい取れるのかというのを知るために、テープを貼ってそこで何日も暮らすという体験をさせました。真冬だったのですが、お湯は何も使わずに、水だけで非常食を食べさせました。1泊2日でしたが、初めての経験で興味があったというのもあるでしょう。非常食も今はだいぶおいしくなっているので、水で作った冷たいご飯を真冬に体育館の寒い中で食べても「おいしい」と言ってくれていました。しかし、何日も続くという話をすると、子どもたちも真剣に「災害になるとこんな目に遭うのだ」ということを実感し、被災者の感覚が少し伝わったかなと思います。

それは仕事柄やっているのですが、それ以外にプライベートでは趣味が浜掃除なものですから、台風が来ると海水浴場に上がってくる大量のごみをどうやって処理するかということに、数人のチームで毎回取り組んでいます。真冬は日が短いので、みんなの都合がいい土日などに活動するのですが、漂流ごみはすごい量です。プラスチックごみの問題もそうですが、みんなSDGsだの何だのと言っている中で、テレビの向こう側のことだったり、聞いた話という程度の知識かもしれませんが、現実はすごい量です。本当に何気なく使っているものが漂流しているということに自覚がないと、他人事になると思っています。

自分は福祉関係にも防災関係にもいたりして、いろいろなところでいろいろな経験を積んできた中で、先ほど久保田さんも言っていたように、いろいろな方々との関係性も結構あって、重度の精神障害者などいろいろな方の対応もさせてもらってきたことは、すごくプラスになっていると思います。目を背けるようなことがあるかもしれません。これから認知症の関係も、皆さん直面する世界だと思います。そこに目を背けないで、現実から逃避しないで行けるように、地元の小学生でも、いわゆるグローバルスタンダードではないですけれども、知らないということができるだけないように、行政としても地域としても機会を与えることが必要だと思います。小学生、中学生、高校生とそれぞれにできることはありますので、そういうものに気づいてもらうための施策が必要ではないかと感じています。

山口――南伊豆町では、今日も話したのですが、まちづくりの10年計画である総合計画というものを作っており、その中で子どもたちにもいろいろな面で参加していただいています。前回は5年前に、総合戦略というものを国からの指示で作ったときは、南伊豆町が石垣りんさんという詩人の生誕地であることと掛けて、子どもたちから町を元気にする詩を募集し、それを総合戦略の柱にしました。

今回は将来の南伊豆町がテーマで、形としては絵でも文章でも文字でもいいので現在募集しています。それから、会議にもご参加いただいて話を伺ったり、逆に私たちが学校に出向いて授業をしたり、高校生は先ほども言ったとおり外に出たりしているので、下田地域内の喫茶店などに何人か集まっていただいて話を聞いたり、少し子どもたちにも参加していただいたりしています。

町内には小規模な小学校があって、そこはコミュニティスクールという活動で割とうまくやっていて、地域の人たちが参画しているのですが、小学校、中学校とも地域の方たちが入っていくのはかなりハードルが高くて、授業のコマ数が決まっているので、先生たちも今までそこにいなかった地域の人が入ってくることで、またさらに負担が増えてしまうことも懸念されます。なかなかそこは折り合いを付けるのが難しいところではあるのですが、今後は考え方を変えて、先生たちのやるべき部分を地域の人たちが補うような状況ができてくれば、そこがうまく回っていくと感じています。

やはり学校側も行政側も地域も、それぞれあまり知らないのではないかと思います。学校のことを知らなかったり、地域のことを知らなかったり、行政のことを知らなかったりするところが一番の問題で、そこをしっかりとお互いに知り合えば、例えば地域の方たちが学校に来ても、先生たちの仕事は増えないということが分かってくると思います。

それから、子どもたちが外に出ていくという点については、地方で親がよく「東京で働きなさい」「こんな所にいるんじゃない」などと言うところを考え治さなくてはならないのではないかと思っています。現在の南伊豆町の総合計画では、教育に重点を置いていくことになりつつありますが、教育に重点を置いて教育が高度化すると、子どもたちは町に高等教育機関がないので必然的に外へ出ていきます。それで、外で就職して子どもたちが帰ってくる場所がないと

いう形になります。

これは悪循環なのか好循環なのかよく分かりませんが、ここで考えられるのは、やはり関係人口という話になるわけです。関係人口という形で、地域から出た子どもたちが地域に戻ってくることで還元するのではなくて、地域に何らかの貢献をすることを考えていけば、例えば人口が減ったとしても町内に滞留する人が増えれば、それは何となく地域の活性化にもつながりますし、子どもたちが外から町を支援するようになれば、十分に町の財政にも影響を与えられるという考え方も成り立つと思っています。先ほどの税金と選挙権の話も、ある程度国の方で整理していくべきではないかと考えています。

阿部――ありがとうございました。時間がもうなくなってしまいました。それでは、報告者の方々から一言ずついただければと思います。

榊原――皆さんがおっしゃっていたように、見たり聞いたり知ったりということをぜひ学生のみんなにはやってほしいと思っています。今日参加した高校生の彼女たちの場合は、多くの生徒たちが就職したり専門学校に行ったりして20歳の段階で社会人になっています。大学に行けるということはとても幸せなことなので、そういう時間をぜひ作っていただいて、いろいろなことを知ってほしいと思います。今日はありがとうございました。

小田――普通という言葉が私は嫌いなのですが、久保田さんの話にもあったように、あらゆる多様な人々を排除する、いわゆる普通の人ではない人を排除するのではなく、地域で包摂するような取り組みがまだまだ日本は立ち遅れていると思っているので、そういう正面から取り組まれているところにぜひ足を運んでいって、刺激を受けてほしいと思いますし私も伺いたいと思っています。今日は皆さんありがとうございました。

増田――本日はありがとうございました。私は大学生で、せっかく自由に使える時間がたくさんあるので、こういったお話を聞くだけで終わりにしないで、自分から新しいことを見たり体験したりすることに時間を使えたらと改めて感じました。本日はありがとうございました。

小林――本日はありがとうございました。今日の事例発表の方たちは、去年、おととしに引き続いて毎年伺っている方もいたのですが、いつ聞いてもかっこいいなと思っていて、憧れから活動を頑張ろうという気持ちに毎回なっているので、また2020年も頑張ろうと思います。1月20日、ぜひ会いにいらしてください。ありがとうございました。

久保田――ありがとうございました。静大は浜松にもあるので、ぜひこれを浜松でもやっていただければと思いました。うちのスタッフには福祉関係の方は一人もいないのです。それから、大学を出た人もいないといえばいませんし、割と自分のクリエイティビティのようなものをすごく信用して、けれどもなかなか居場所がなくて、やっと何となくたどり着いたような人たちばかりが働いている場所です。ですので、そういうところは探せば山のようにあります。だから、生きることはそんなに難しくないと思います。難しく考えないからいいのではないかと思いながら、今日の話を聞いていました。今日は学生さんの割とちゃんとした活動を聞いたのですが、そうでない活動も中にはあるはずなので、そういうものも聞いてみたいと思いました。ありがとうございました。

荒武――ありがとうございました。私から伝えたいことは全部言ってしまったのですが、一つだけ自分の思っていることは、人から聞いたりするのはとても大事な経験だと思う反面、先ほども言ったのですが、自分で行動を起こしてみるところに大事な答えがあって、多分そこにしかないのかもしれないという思いがあります。「現場に答えはある」というのが自分の中にあって、まずは現場に行ってみるようにしています。自分が事を起こしたところが現場になるかもしれないので、皆さんの現場がいろいろ見つかるといいと思っています。ありがとうございま

した。

山口――今日はありがとうございました。私も言うことは言いましたが、一つだけ。若いうちは何度でも失敗して、何度でも理解することができますので、私が言うのも何ですが、安定したところで働くだけがいいわけではなく、いい企業に入って、いい給料をもらうだけがいい生活ではないと思いますので、自分が持った課題をどうやってクリアしていくかということを考えながら、いろいろな働き方、生き方をしていくのがいいと思います。本当に何を求めるかは人それぞれだと思いますので、それを求めて若いうちは生きていただければいいと思いました。ありがとうございます。

深澤――私の方からも、パラレルキャリアや多拠点居住など、僕らが育ってきた環境で勧められていた職業ではない職業という生き方がスタンダードになりつつあります。皆さん、ぜひ生きる力というものを育んでいっていただければと思います。そのために何が必要かをいろいろなところで学んでいただければいいと思います。ぜひ頑張ってください。

阿部――ありがとうございました。たくさんの報告、いろいろな切り口の課題への取り組みがありました。荒武さんの言葉で言うと現場に答えがあるということでしたが、私はいつも答えが見つからなくて、現場に行っては問いばかりが出てくるのです。

年内最後の仕事がこの集中講義3日間と最終日の午後のパネル・ディスカッション、シンポジウムですが、大体次の日には熱を出して、咳が止まらなくなります。それまで気が張っていたのです。毎回、いろいろな地域の課題の取り組みを報告いただくのですが、僕の中でそれがいつも消化できなくて、時々現場に行くのですが、何もできない状態になっています。今回も今まで以上に重い課題もあるし、明日からまた知恵熱が出るのではないかと思います。

それだけではなくて、例えば伊浜に行くと台風の後にものすごくたくさんのごみがあって、地元の人が70歳ぐらいなのにすごく重い物を持って、まねをしたらぎっくり腰になって、あれから5カ月間に3回ぐらい再発し、すっかり癖になりました。宮沢賢治さんではないですけど、雨にも負けず、風にも負けず、流木にも負けず、熱も出さないような強い体にならないと、こういう仕事はできないと思います。還暦を過ぎましたが、こういう素晴らしい皆さんに集まっていただいて、それを学生の皆さんに紹介するためには、もう少し心身ともに鍛えなくてはいけないと思います。何だかよく分からないまとめですが、本当にありがとうございました。

地域課題解決支援プロジェクト・各地の進捗状況

■松崎町

□フィールドワーク

松崎町は、地域課題解決支援プロジェクトにおいて最も早くから組織的に関わった地域であるが、2016年からは地域創造学環フィールドワークの受け入れ地となった。フィールドワークは、「商店街のにぎわいの創出」「観光と防災の両立」の2テーマで実施され、現在は1年から3年までの学生16名の体制で実施されている（前年度までのフィールドワークについては成果報告書第5号に掲載）。

新型コロナ禍のため実際に現地で実施した回は少なくなったが、2020年度のフィールドワークの日程は以下の通りである。

〇フィールドワーク・商店街グループ

・11月12日

〇フィールドワーク・観光と防災グループ

・2月17日、3月6〜7日

□「松崎町の未来と観光を考える」プロジェクト

静岡大学（未来社会デザイン機構）、松崎町、松崎町観光協会、伊豆半島ジオパーク推進協議会が連携し昨年末から始めたプロジェクトで、フォーラムやワークショップなどが下記の日程で実施された。

・12月20日「地域と大学の協働によるサステイナブル・ツーリズムの構築「松崎町の未来と観光を考える」プロジェクト第１回シンポジウム」（会場：松崎町環境改善センター）

・1月19日「第1回松崎の未来を考えるワークショップ（高校生）」（会場：松崎高校）

・2月9日　「第2回松崎の未来を考えるワークショップ（高校生）」（会場：松崎高校）

・2月20日「第3回松崎の未来を考えるワークショップ（中学生）」（会場：松崎町観光協会2階）

・2月28日「第1回2030松崎ワークショップ」（会場：松崎町環境改善センター）

・3月14日「第2回2030松崎ワークショップ」（会場：松崎町環境改善センター）

■東伊豆町

東伊豆町における取り組みは、地域課題解決支援プロジェクト（第1期公募）への応募、同地を会場とした公開シンポジウム、東伊豆ガイドツアー等の実施を経て、2017年度後期からフィールドワーク受け入れへとつながった（これまでの成果は報告書第5号参照）。新型コロナ禍のため実際に現地で実施した回は少なくなったが、2020年度のフィールドワークの日程は以下の通りである。

□フィールドワーク「新しい観光スタイルの発掘・創出」

1年生から3年生まで計9名の学生が東伊豆フィールドワークを実施中である。これまで実施されたフィールドワークの日程は以下の通りである。

・9月7日、11月14〜15日、3月13〜14日

□フィールドワーク等から派生した取り組み

下記のようにフィールドワークから派生した取り組みも行った。

〇8月8日 東伊豆学生サミット（オンライン開催）

〇2月21日 東伊豆未来会議2021～リノベーションプロジェクト交流会～（オンライン開催）

■南伊豆町

南伊豆町では、第2期公募に対する課題提案をきっかけに地域創造教育センター、大学教育センターの教職員が商店街空き店舗やサテライトオフィスの視察、伊浜地区のまち歩き等を行った。その後、地域創造学環の学生や静大FCのメンバーが南伊豆町で展開する地域活性化の取り組みに参加したり、伊浜地区での地域人材育成事業に参加するなど関係を深めている（前年度までの取り組みについては成果報告書第5号に掲載）。

今年度は新型コロナ禍のためオンラインでの打合せのみとなった。

■伊豆半島ジオパーク

伊豆半島ジオパーク推進協議会からの提案課題は、地域課題解決支援プロジェクト（第1期）のモデル事業に選定され、いくつかの事業が展開した（前年度までの取り組みについては成果報告書第5号に掲載）。

地域創造学環が開設されてからは、伊豆半島全体をフィールドとして、ジオパークをめぐる2つのフィールドワークが展開しており、1年生から3年生まで計8名が活動している。2020年度の取り組みの日程は以下の通りである。

〇伊豆半島ジオパーク（保全と防災）

・7月10日、8月6日、8月13日、8月28日、9月5日、9月10日、10月5日、10月11日、10月24日、11月7日

〇伊豆半島ジオパーク（教育）

・11月19日、11月22日、12月12日、2月15日、3月3～4日

■御前崎市

課題提案自治体の一つである御前崎市では、2018年度から「御前崎市スポーツ振興プロジェクト～スポーツによる交流人口の拡大と産業振興の推進～」をテーマとした地域創造学環フィールドワークが展開し、1年生から3年生まで計7名が活動している。2020年度の活動日程は以下の通りである。

・12月10日、3月20日

■賀茂キャンパス

静岡大学、静岡県立大学、静岡文化芸術大学等、県内大学が賀茂地域で様々な活動を展開できるよう、静岡県・賀茂地域局は昨年1月、下田市に「賀茂キャンパス（賀茂地域大学交流拠点施設）」を開設し、賀茂キャンパス開所式ならびに賀茂キャンパス活用推進委員会キックオフ会議を行った（成果報告書第5号参照）。

今年度は賀茂地域における各大学の事業を支援するとともに、2月に開催した「静岡大学×和歌山大学研究フォーラム「半島地域における交流・協働のためのプラットフォームを考える」の企画・実施等に参画した。

活動報告会

東伊豆学生サミット

日　　時：2020年8月8日（土）13:00～17:00
開催方法：Zoomによるオンライン形式
プログラム：
（1）各大学の活動報告
　報告1「芝浦工業大学　空き家改修プロジェクト」
　　報告者：粟竹勇介（芝浦工業大学建築学部建築学科3年）
　報告2「工学院大学建築学部建築デザイン学科　西森研究室」
　　報告者：福井献一（工学院大学大学院建築学専攻修士2年）
　　小玉恵未（工学院大学大学院建築学専攻修士2年）
　　天谷岳洋（工学院大学大学院建築学専攻修士2年）
　報告3「明治大学農学部　ファームステイ」
　　報告者：近藤総一郎（明治大学農学部食料環境政策学科4年　食ビジネス研究室）
　　石坂 翼（明治大学農学部食料環境政策学科4年　共生社会論研究室）
　報告4「静岡大学地域創造学環　東伊豆フィールドワーク」
　　報告者：河村清加（静岡大学地域創造学環アート&マネジメントコース3年）
　　内藤由里子（静岡大学地域創造学環スポーツプロモーションコース2年）
　報告5「東伊豆町包括連携協定締結大学」
　　報告者：鈴木宏規（東伊豆町総務課）
（2）グループディスカッション　報告と感想共有
司会進行：大石竜弘（静岡大学地域創造学環地域経営コース2年）
　　土橋もも（静岡大学地域創造学環地域経営コース3年）
コーディネーター：荒武優希（NPO法人ローカルデザインネットワーク理事長）

挨拶

太田長八（東伊豆町長）

東伊豆学生サミットの開催、誠におめでとうございます。日頃からこの町の発展のために、学生の皆さん方が活動されていることに心より感謝しています。そして今回は、ローカルデザインネットワーク主催による学生サミットということで、ローカルデザインネットワークの皆さん方にはこのような企画をしていただいて心より感謝申し上げます。また、オンラインで参加していただいている学生の皆さん方にも、町として心より感謝申し上げたいと思います。

これからの東伊豆町のまちづくりにおいて、やはり皆さま方の若い力が大変重要と考えています。今回、当町で皆さま方と実際にお会いして開催できる予定でしたが、コロナ禍となってこのようなオンラインの形になりました。しかし、これからの時代、そういう需要の中で社会活動も変化していくと考えています。今日のオンラインの学生サミットが有意義なものとなり、皆さん方にとって大変良い勉強になればと思っていますので、今日は町としてもよく見ていきたいと考えています。皆さん方の屈託のない意見を聴いて、それをまちづくりに生かしていきたいと思いますので、今日はどうぞよろしくお願いします。

概要説明

大石（司会進行）――東伊豆学生サミットは、東伊豆町に持続的に関わってくれる大学生の活動を地域に周知すること、東伊豆町に関わっている大学それぞれの活動について知ること、そして今後の連携などの可能性について検討し、次のアクションにつなげることの3つの目的のもとで開催させていただきます。

今日の流れについて説明したいと思います。まず各大学・団体からの報告を行なっていただきます。また、質疑応答は報告の後に行います。報告についての質問はチャットもしくはFacebookライブのコメント欄から行ってください。

一度休憩を挟んだ後、観光・建築・農業の各テーマでグループディスカッションを行います。そして最後に、グループディスカッションで出てきた意見や感想について共有していただきたいと思います。

報告１「芝浦工業大学　空き家改修プロジェクト」

１．空き家改修プロジェクトとは

粟竹――芝浦工業大学空き家改修プロジェクト代表の粟竹勇介です。空き家改修プロジェクトは学生の有志団体であり、空き家を改修するという形で、稲取の地域に6年間関わっています。その活動を報告します。

芝浦工業大学空き家改修プロジェクトでは、芝浦工業大学建築学部の学生を中心に、現在16人のメンバーで活動しています。

今日、日本の社会問題として空き家問題が提起されています。現在、日本国内での空き家率（全体の住宅数に占める空き家の数）は13.5％となっており、今後人口減少や都市の集中化に伴って、ますます増えていくことが予想されております。データによっては10年後には日本国内の20％、5分の1が空き家になってしまうという推測もされています。この問題に対して私たちは、空き家を改修することで地域を盛り上げていくことができるのではないかと考えました。そこで私たちは空き家の改修をして、その改修した空き家を地域の人と運営・利活用していく企画を提案しています。

私たちはこれまでに3軒の空き家を改修しました。2013年に、初めて空き家を改修し、「水下庵」を作りました。その後、もともと消防団第六分団の倉庫であった場所を改修し、「ダイロクキッチン」という調理を通じたコミュニティ創造の場を作りました。2015年には、港の近くにある東海汽船の待合所を3年かけて改修し、「EAST DOCK」というものづくりを通じたシェアスペースを作りました。

２．改修利活用プロジェクト

2018年度には、これまで改修した物件を使って、町をつなげていこうというコンセプトのもと、改修利活用プロジェクトをスタートさせました。

これまで改修した物件を地元の方々に利用していただき、またそこが外部から訪れる方々にとって目的となるような場所になるように、幾つかのイベントを開催しました。その一つが2019年に行った「ラムネエキシビジョン」というイベントです。ラムネとは、稲取で昔から行われていた、堤防から海に飛び込んでラムネのような泡を出す遊びのことです。地元の小学生

などをターゲットに、EAST DOCKを使ってイベントを開催しました。

ダイロクキッチンでは、クリスマスの時期に「サンタ祭」を開催しました。改修した物件をみんなでデコレーションし、ポップコーンを作って映画を観るというイベントを開催しました。

3. 東伊豆未来会議の発足

改修利活用プロジェクトを行うと同時に、空き家改修プロジェクトとして次の空き家改修を行う計画を立てました。そこで実際に稲取の住民の方と一緒に、町にどれだけ空き家や空き店舗があるのかという実態を知るため、フィールドワークをしました。そして空き家や空き店舗をどのように改修し、利活用するのかを話し合う場として「東伊豆未来会議」というものを開催しました。

そこでは、地元の商工会や役場の空き家等利活用推進協議会の方々に来ていただき、みんなでアイディアを出し合いました。

その最終的な提案を2019年12月に役場で発表し、次の改修プロジェクトを作成しました。まだ企画段階で実施に至るかどうかは分かりませんが、駅前の空き店舗を改修して、「カフェ×観光案内所」にすることを企画しています。地元の人も、観光で来た人も使えて、町全体をつなげていくようなコンセプトで提案しました。

今年度は、その改修計画案に対して、費用はどのくらいかかるのか、どういう工事が必要なのかということなどを洗い出して、来年度に向けてのプランを練っているところです。

質疑応答

大石（司会進行）――工学院大学の西森陸雄先生からの質問です。「素晴らしい活動ですね。空き家プロジェクトは稲取地区だけで進めているのですか」

粟竹――空き家改修プロジェクト全体としては、全国3カ所で活動しています。稲取ではこのプロジェクトが始まって以来、6年間にわたって活動していますが、去年までは佐渡島や四国でも活動していました。また、今年からは神奈川県開成町にある酒蔵の改修プロジェクトと、三重県伊勢の古民家を改修するプロジェクトもスタートさせています。

大石――佐藤さんからの質問です。「駅前の空き店舗改修のための予算はどのぐらいを想定しているのでしょうか」

粟竹――駅前の改修は、カフェとして食器などを買う初期費用なども含めて300万～350万円を想定しています。

大石――続いて、工学院大学の渡辺崇弘さんからの質問です。「空き家改修では、既存の建物をどの程度残しているのですか」

粟竹――僕たち学生はまだ建築士の資格を持っていないため、改修できる床面積が限られているので、その中でできる範囲であることが前提です。これまでに改修したダイロクキッチンに関しては、基本的に建築物自体に手を加えていません。壁を全部塗り替えたり、小上がりのような段差を付けたり、キッチンを入れたり、家具を作ったりなどを行うことで改修しました。

EAST DOCKも同様です。下を全部塗り替えたり、OSBの板を張り付けたり、カウンターテー

ブルを作ったりしました。水回りなどは地元の業者に、電気工事も稲取の工務店にお願いしました。

荒武（コーディネーター）――Facebookライブの方から空き家改修プロジェクトに質問がありましたので、お答えいただけたらと思います。「改修時の費用などは、どこが負担しているのでしょうか」、「資金調達をどこからしているのか、興味があります。また、空き物件の契約形態はいかがでしょうか」

粟竹――最後に発表したカフェの計画では、ビル自体はオーナー様がいらっしゃいまして、そのビルを稲取の旅館組合の方々が借り上げて、僕たちが改修することになっていました。改修費用については旅館組合が借り入れをする計画ではあったのですが、今後どうなるかは分かりません。

活動資金に関しては、芝浦工業大学の学生プロジェクトという企画に応募しています。50万円まで活動費を学校が負担してくれるもので、これを材料費などに充てています。また、これまでの交通費や東伊豆に行くためにかかる費用などは、東伊豆町役場からいただいています。

荒武――空き家改修プロジェクトの改修し終わった物件の運営をしている、NPO法人ローカルデザインネットワークの荒武と申します。契約形態に関してですが、EAST DOCKは町の所有の建物になるので、われわれの方で賃貸契約を結んで、利活用させていただいております。

報告２「工学院大学建築学部建築デザイン学科　西森研究室」

１．これまでの活動

福井――私たち工学院大学西森研究室が2019年に行った「熱川New Summer Fest-Bar」についての報告をしたいと思います。「Fest-Bar」と書いて「フェスティバル」と読みます。発表は私、工学院大学修士2年の福井と、天谷、小玉の3人で行います。

工学院大学西森研究室では、空間をデザインすることを通じてどのようににぎわいをもたらすかということを考えて活動しています。東伊豆町には2011年から関わっており、稲取では稲取文化公園の構想案、熱川では西森研究室が実際に設計提案したしおかぜ広場、他にもサイン計画にも関わっています。

しおかぜ広場に関しては、東伊豆町には人が多く集まって大きなイベントを行うような広場・公園が存在しないため、普段は防災公園として、時には人が集まるイベント広場として西森研究室が提案し、2016年12月に竣工しました。実際にキャンドルイベントなどで地元の皆さんに広場を活用していただいています。

New Summer Fest-Barは、温泉街である熱川の夜の景観を見てもらいたい、町歩きをしてもらいたいという目的で始まった、にぎわい創出のための社会実験です。2012年から調査に入り、2013年1月から第1回を行いました。空き家に仮設的なリノベーションをして、ビアカフェや体験イベントを行いました。2014年にはしおかぜ広場を利用し、イベントでの使い方の一つの見本としてインスタレーションと呼ばれる体験アートを行いました。このときは熱川の魅力を再発見してもらうことを目的に、熱川のさまざまな場所にインスタレーションを設置しました。2015年にはうちわづくりの体験イベントも行いました。

2. 2019年の活動

2019年の活動は、三つの軸で構成していました。一つ目が広場空間をデザインするインスタレーション、二つ目が造作家具でセルフビルドしたビアカフェの運営、三つ目が体験イベントで人と人のつながりを生むコミュニティデザインです。この三つを軸にしてしおかぜ広場をデザインし、にぎわいを創出することをコンセプトに掲げました。

スケジュールとしては、5月ごろから構想や計画を立てました。このイベントは熱川温泉観光協会が主催者で、私たち西森研究室が運営する形になっていて、熱川温泉観光協会に対し6月の終わりの段階で、今年はこのように進めていくということを説明するワークショップを行いました。

例年に比べて今年は広報に力を入れました。Facebookで告知したり、ポスターを1カ月前にホテルや旅館に置かせていただいたりして、前々から告知していきました。また、海水浴場でキッチンカーによる販売も行いました。そのときに、今日はこんなイベントが夕方からあるということを知らせるポスターを配布して告知に力を入れた結果、3日間で300名を超える方が訪れました。

ここからは、先ほど言った三つの軸を詳しくお話ししていきたいと思います。一つ目が「光と音のインスタレーション」です。電球を200個ほど用意して、それをパソコンのプログラムで音と合わせて光らせるようにしました。夏の熱川によく降る雨から、波紋をイメージしたインスタレーションを提案しており、実際の水盤も用意して、水によって光が拡散するという光の演出も行っています。全体で15分ほどのプログラムを組んでおり、訪れた人に心地よく滞在してもらうことを意識しました。

中心から広がるような波紋を五つほど用意しています。三つあるインスタレーション用の水盤のうち、一つではヨーヨー釣りの体験イベントを行いました。座席を設けることで、ドリンクやフードを食べながらインスタレーションを眺められるようにしました。

小玉――2018年まではしおかぜ広場でビアカフェを運営してきましたが、2019年は新たな試みとしてキッチンカーでの販売に挑戦しました。それに伴い、これまでドリンク中心だったメニューから、ホットドッグをはじめとするフードメニューを増やし、夕方以降の広場での営業だけでなく、日中の海辺での販売にもチャレンジしました。

キッチンカーのメインメニューとして、ホットドックを販売しました。ホットドックの販売には、シェフの恩海洋平さんという方に協力していただきました。恩海さんは神楽坂にあるワインビストロ「Bicoque」で修業された方で、2017年のフジロックフェスティバルでは「HOTDOG TRAILER」というお店でホットドックを提供し、話題になった方です。この恩海さんにわれわれ学生がホットドックの作り方を教えていただき、当日も一緒に調理しました。

また、例年のビアカフェではドリンク以外はスナックのみの販売だったのですが、2019年はホットドック以外にもデザートやフードメニューを考案しました。フードメニューには伊豆名産のニューサマーオレンジのジャムを使ったり、ドリンクメニューでは地ビールのBAIRD BEERや、ニューサマーオレンジを使ったお酒やジュースなどを取りそろえたり、伊豆ならではのものを提供できるように工夫しました。

メニューの考案からホットドックの調理・販売まで、恩海さんや先生の協力を得て学生で全部行いました。初めての試みだったので、最初は手探りで大変苦労も多かったのですが、昼間のみ予定していたホットドックの販売を、お客さまからの要望もあって途中から夕方以降にも販売するほど盛況な結果に終わり、しおかぜ広場で行ったインスタレーションイベントの集客

にもつながって、良い結果になったと考えています。

天谷――続いて、ビアカフェで売っているものではなくて、棚やテーブルなどの本体についてお話しします。毎年、ビアカフェではカウンター付きのお店を作って、伊豆の特産品であるBAIRD BEERを中心にデザートなどを提供していたのですが、毎年イベントのために作ってはイベントの終わりに壊していたため、資源の問題がすごく指摘されました。

そこで、2018年は木の単管を利用して、平常時は防災公園の倉庫の棚として使用し、お祭りの際には棚を解体して組み替えることで、Barとして活用するようにしました。そうすることで、資源の削減につながるようにしました。

2018年は、倉庫の中でBarを組み立てて販売していましたが、2019年は人の出入りやキッチンカーとの関係を考慮して、公園の入り口側に配置しました。結果としてお客さまの目を引くことができ、体験イベントを分かりやすく宣伝することもできて、多くのお客さまに訪れていただくことができました。反対に問題点としては、実際にBarを設置する場所には傾斜があって、想定より組み立てに時間がかかってしまったことと、3日間解体して組み立てるという手間が少しありました。

インスタレーションとは別に、体験イベントを毎年企画しています。体験イベントに参加することで思い出を深め、楽しんでもらうことを目的として、2017、2018年には、紙コップに絵を描いてもらい、中にキャンドルを入れて飾ってもらう体験イベントを行いました。少しずつ数が増えていき、最終日には美しい風景になりました。

2019年の体験イベントでは、光る水ヨーヨー釣りを無料で企画実施しました。企画段階では単純にヨーヨー釣りを企画していたのですが、夜であることを加味して、ヨーヨーの中にLEDの小さな豆電球を通し、光り輝くようにしました。お祭り当日は、1日に使う数を想定より超えてしまい、数が足りなくなってしまうなどの問題が起こってしまいました。特に小さなお子さまには大盛況で、インスタレーションの一部としてもとてもマッチした体験イベントとなりました。

3. 今後の展望

福井――西森研究室では、このように2019年の活動を行っていました。今後の展望としては、2020年はコロナの影響で中止になりましたが、毎年行うことでイベントの定着を図っていきたいと思っています。

また、ステップアップしていくために例年の活動を振り返り、代が変わってしまうので、ビジョンをきちんと引き継ぐことで一つの目標に向かっていけるのではないかと考えています。

それから、地域のコミュニティにもっと入り込みたいと考えています。自分たち工学院大学は、熱川のイベントの期間しか熱川にいられず、地域の方々との交流が非常に少なかったので、そこをもっと改善していけたらと考えています。

質疑応答

土橋（司会進行）――明治大学の近藤さんからの質問です。「インスタレーションとは何でしょうか」

福井――簡単に言うと、空間体験型アートです。アートというと基本的に見てもらうだけで終わってしまうと思うのですが、インスタレーションは、その中に人が入って自分が体験しても

らうことを通じてアートを体感してもらいます。

土橋――次の質問は芝浦工業大学の粟竹さんからです。「研究室が主体ということは、院生が中心に動かしているのですか」

福井――そうですね。西森研究室は縦のつながりが結構強くて、修士2年と1年、学部の4年と入ったばかりの3年生という4学年で、この「熱川New Summer Fest-Bar」を行っています。企画自体は院生が中心となっていますが、学年に関係なく全体で行っています。

土橋――FacebookやEAST DOCKの方で質問はありますでしょうか。

荒武――Facebookライブの方からご質問をいただきました。「イベントを開催する上での資金調達はどうしているのでしょうか。また、調達していく上で今後の展望はありますか」

福井――資金に関しては、観光協会の予算から出していただいて、その中でやりくりしていくことになっています。あとは研究室の研究費として備品などは調達しています。

荒武――私からもいいでしょうか。工学院さんは2011年から活動されているということで、今回参加されている学生団体の皆さんの中では多分一番のベテラン大学ではないかと思います。プロジェクトを始める前に先輩たちから「東伊豆はこういう場所だよ」などと教えてもらっていたと思うのですが、そのときにどういうことを教えてもらったのかということと、実際に来てみて好きになったものがあったら教えてほしいと思います。

小玉――温泉と海が近くにあることが一番の資源だと思っているのですが、入る前に先生から教えてもらっていた東伊豆のイメージとしては、熱川や熱海、稲取など、一つ一つに個性のある温泉街が連なっているということを教えていただいた上で、このプロジェクトに取り組みました。

福井――自分も最初に先輩から受け継いだのは今のような話ぐらいでしたが、実際に入って感じたのは、稲取も熱川もすごく個性があって、いいところだなというのと同時に、東伊豆として結構まとまっているかというと、まとまりはまだ薄いのかなと感じました。それぞれがイベントをちゃんと行っているのに、イベント同士のつながりはあまり感じられないのがすごくもったいないというのが個人的な感想です。

天谷――自分も同じような感想を持っていて、海で一つにつながっているとはいいつつも、町に結構個性があって、それがつながらずに別々になっているのが少し気になりました。あとは、僕らが最初に行ったところは熱川だったのですが、「海がきれいだな」と思いつつ、ずっと作業しているだけで、実は海に一度も入ったことがないので、ぜひ今度は入ってみたいと思います。

荒武――学生プロジェクトあるあるで、目の前に遊べる場所があるのに行けないみたいなことは結構ありますよね。昨日も天谷さんとお話しして、「最近釣りにはまっている」という話を伺ったので、ぜひ落ち着いたら釣りにいらしてください。

天谷――ありがとうございます。

報告３「明治大学農学部　ファームステイ」

1．ファームステイの概要

近藤――明治大学ファームステイの目的は、農家生活の実態に触れ、現実の農業や農村生活の姿を体得することと、農村社会の実情に触れることでさまざまな視野を持ち、今後の学科の学びに役立てることの二つが主に挙げられています。

その中で東伊豆ファームステイでは、東伊豆町農業経営振興会と明治大学農学部が連携し、農業経営振興会は実習先・実習機会・農業知識の提供、明治大学は学生の単純な労働力であったり、最後には東伊豆町や農家への提言を行います。ファームステイ実習を通して、学生視点から農業分野を主体に東伊豆町の振興を考えることを趣旨としています。

東伊豆ファームステイの活動履歴を紹介します。始まりは2014年からで、私たちは5年目の2018年に活動しました。ちなみに、明治大学農学部食料環境政策学科所属の2年生が研修対象になっています。その年は、農業経営振興会の5名の農家様に協力してもらいました。1人の農家様に2名ずつお世話になり、その中で私と石坂は柑橘・施設野菜農家にお世話になりました。

私たちは1週間農家民泊をして、お世話になっている農家様ごとに、基本的に農産物の収穫や出荷、手入れ等の作業を行いました。その上で作業日誌を記入して、自己の問題意識に基づき、聞き取り調査を行いました。現実から学び、それぞれの個別性から普遍的な法則性を求めてレポートを作成し、最終日に1週間通して学んだことを学生視点から東伊豆町へ政策提言を行いました。

2．実際の活動内容

石坂――私たちの活動内容としては、まずトマトのわき芽かきを行いました。わき芽かきというのは、トマトが生えている茎と葉の間から生えてくる芽（わき芽）の部分をかきとる作業です。これを取り除かないとそちらに養分を取られて、普段スーパーで買っているようなおいしいトマトができなくなるので、その部分を手でかき取る作業をしました。

次は、斜面の除草です。斜面の角度が30度から45度ぐらいの結構急な所で、斜面の下の方からレーキという雑草を集める農具を使って草を集め、その草の中でも比較的新鮮な茎などを使って雑草を束ねて、それをトラックに積んで運ぶ作業をしました。

次に、ミカン畑の周囲にある竹を伐採して、その竹を使って天然のイノシシを防ぐためのバリケードを作りました。竹を切るのは最初は簡単ですが、竹の中心にいくにつれて竹の重さでのこぎりが動かなくなり、力作業なので結構大変でした。切った後も重い竹を運んでバリケードを作らなければいけないので、かなりの重労働でした。

次は、柑橘類の収穫です。柑橘類は主にミカンとレモンです。収穫したものはそのままスーパーなどに卸す商品になるので、大事な作業でした。その後は、ミカンのわき芽かきをトマトと同じような感じで行いました。

次に、ビニールハウスの整備をしました。ビニールハウスの屋根の部分にはしごを使って登り、古くなったビニールシートを全部手作業で剥がして、新しいビニールを張る作業を行いました。かなり高い位置にあって怖かったのと、足場が不安定なので、少しの間上っているだけでも結構足が疲れました。この作業は人数が多くないとできない作業なので、先ほど近藤が言っ

たように、学生の労働力が生かせた作業ではないかと個人的に思いました。

その後は、実際に農家さんが行っているスーパーでの卸作業を見学しました。この日は直接野菜を納品することはなかったのですが、普段卸している商品を見学させてもらいました。僕が「スーパーに卸しているところを見学したい」と言ったので、融通を利かせて連れて行ってくれたのだと思います。

それから、「そうか病」の葉の切除です。そうか病は、葉に点々が付くような症状で、この病気が進行すると生育が悪くなってしまうので、この葉を取り除く作業をしました。そうか病はコロナウイルスと一緒で潜伏期間のようなものがあって、一見普通の葉っぱに見えても実は病気にかかっていたりするので、農家さんの指示で、そうか病の葉の近くにある葉も切除する作業を行いました。

その後、観光をしました。1日かけて観光したのですが、まずは稲取駅の近くにある朝市に行きました。朝市ではワサビ農家がワサビを売っていたり、ミカン農家がミカンを売っていたり、いろいろな名産品が集まっていて、みそ汁も無料で飲めたりして結構楽しめました。

その後は、稲取細野高原という稲取で一番の観光名所に行きました。ある程度の場所までしか車で入れなくて、そこからはみんなで階段で上まで行ったのですが、ちょうどススキがきれいな時期で、その日は晴れていたのですごく景色がいい中でお弁当を食べることができました。

高原に行った後、最後に交流会をしました。地元の農家さんやお母さん方と一緒に稲取独特のおすしのようなものを作ったり、ミカンを搾ってストレートのジュースを作ったりしました。自分は未成年なので飲みませんでしたが、お酒を飲んだりしてみんなで楽しく交流しました。最終日には東伊豆町の町長さんたちの前で政策提言を行いました。

3. ファームステイでの学びと提言

近藤――ファームステイで学んだことはたくさんあったのですが、五つの点にまとめました。

1点目は、農作業の楽しさと大変さです。1週間のファームステイは大変楽しかったのですが、それと同じように非常に重労働で、普段私たちが当たり前のように食べているものは、こうした農家さんたちに支えられているのだということをすごく実感しました。

2点目は、現場視点を持つことの重要さです。普段、講義で私たちが農学を学ぶこと以上に、やはり現場に行かなければ分からないことがとてもたくさんあるということを実感しました。例えば、農業が機械化を進めようということになっても、実際に現場で急傾斜の山を見たときに、「ここにトラクターや田植え機、コンバインが上れるか」と聞かれたら、「上れない気がする」ということに気づいたり、そうか病によってこれだけ収量が落ちるのかいうことに気づいたり、現場に行けばすぐに分かることがたくさんあるのだということをすごく学びました。

3点目に、生産現場の知識です。私たちの学科はどちらかというと流通・販売・政策面のことに力を入れていて、生産のことを主体に学んでいるわけではなかったので、生産技術や肥料などの知識がとても新鮮で面白く、学ぶことが多かったと思っています。

4点目は、ヒト・モノ・カネなどの生産資源の違いです。この三つは地域によってすごく異なっていることを実感しました。何でもかんでも一つのまとまりとして考えることは間違っているのだと改めて実感しました。

5点目に、東伊豆ならではの農業の強みや弱み、機会というものを多く学びました。その上で、われわれは最終日に東伊豆町役場で学生視点からの提言を行いました。

みなそれぞれ違う政策提言をしているのですが、時間の都合上、私の政策提言についてお話しします。私が政策提言をしたときに、先ほどお話したように、自分が考えていたことが、現

場に行ってみると「これはできないわ」と気づくことがたくさんありました。

その上で、当日はどちらかというと強みや弱みばかりを挙げて、政策提言はできなかったのですが、東伊豆町の農家の強みである農家の方々の仲の良さや協力関係を生かした、急傾斜の生産現場や重労働、高齢化の悩みなどの対策案として、私は集落営農を進めるべきだと思っています。

集落営農とは、集落のような地縁集団を単位として農業生産過程の一部またはすべてを共同で行う組織です。集落営農をすることによって、例えば農地の効率的利用や生産コストの低減、経営の合理化、将来の農地の遊休化防止、集落営農組織の担い手の維持、経費削減、地域活性化、個々の労働力の軽減、経営ノウハウの伝授や新たな創業機会の創出、法人化することで国からの支援が受けられること、福利厚生の明確化、家計と経営の分離など、たくさんのメリットがあると思っています。

私以外にも、例えば女性の方で、SNSを駆使した情報発信や、観光地を利用した発展の仕方などさまざまな政策提言をしました。

4. 今後の展望

今後も東伊豆町への明治大学ファームステイは続ける方針です。令和元年は台風19号によって延期となったと聞いていますが、恐らく行ったのではないかと思います。その上で、ファームステイをはじめ東伊豆町農業経営振興会と明治大学の力を生かして、これからさまざまな企画立案をし、東伊豆町の発展につなげるような機会をつくれるといいと思っています。また、私たちのこの活動はどちらかというと単発で終わってしまっているので、これから継続性を持つ行動ができればいいと思っています。最後に、東伊豆町に対して興味や魅力を感じる学生が増え、在学中、卒業後も何らかの形で東伊豆町に貢献できる人が増えればいいと思っています。

質疑応答

土橋（司会進行）――　早速、質問が一つ来ています。東伊豆本部の荒武さんからです。「初めて聞くことが多くて大変刺激的です。ファームステイ実習をする上で、学生の皆さんはどのような知識を学んでから東伊豆にいらっしゃるのでしょうか」

近藤――もちろん事前準備として、東伊豆町がどのような農業を行っているのかということなどは調べていますし、自身がお世話になる農家の方々が今どのようなことをしていて、どういう仕事をするのかということはもちろん勉強していましたし、予想もしていました。その上で、私たちがファームステイ活動を行って、作業日誌を書いて、最後に指導教員にレポートで、こういうことを行ってこういうことを学んだという報告をしました。

土橋――Facebookライブや本部の方でご質問はありますか。

荒武――今の近藤さんのお話を受けてなのですが、やはり現場に入って分かることがいろいろあったということでした。その中で、何か驚いたことやギャップを感じたことはありますか。近藤さんと石坂さんの個人的な感覚でいいので、教えてください。

近藤――これは農業現場のことではないのですが、お世話になった農家様がすごく個性的な方でした。私の中で農家はこういう人だというイメージ像があったのですが、どちらかというと

その農家さんは思ったことを単刀直入に言う、すごく勢いのある方で、自身が思っていた想像と違ったので、農家ごとにいろいろな個性があるのだなと実感したことが一番のギャップですかね。

石坂――私もギャップを感じたことがあって、最近はスマート農業といって、ITと農業を掛け合わせたような、ビニールハウスで温度管理を機械的に行って、必要になったら水や肥料を与える手法が結構はやっていて、私も授業でそういう勉強をしたのですが、東伊豆町ではスマート農業がみじんも感じられず、結構昔のままの農業だったというギャップがありました。

荒武――多分、スマート農業も斬新で近代的だから取り上げられると思うのですが、先進的な事例として取り上げられたものが石坂さんの中で農家のスタンダードのようになっていて、割と高齢でやられている農家さんも結構いらっしゃるので、そういうギャップが現場と大学ではあるのかもしれませんね。2人とも、1週間のファームステイでとてもたくましくなったのだろうなとお話を聞いていて思いました。

土橋――工学院大学の福井さんからご質問です。「ファームステイ後、個人的に農作業への参加活動等は行っていますか」

石坂――私たちが東伊豆でお世話になった農家様とは、その後も連絡を取って遊びに行ったりしたことはあります。そこで農作業を少し手伝ったこともありますが、どちらかというとそれは話をしに行ったという面もあります。また、ファームステイだけでなく、私は私の研究室で、石坂君は石坂君の研究室で、それぞれいろいろな農作業の体験はたくさんしていると思っています。

大石（司会）――続いて、工学院大学の渡辺さんからです。「ファームステイを行うとき、他の農家との交流やファームステイを受け入れてくれた農家の方々のコミュニティなどはありましたか」

近藤――農家のコミュニティとしては、発表にも出したように東伊豆町農業経営振興会というコミュニティがあって、そこで東伊豆の農家さんたちが情報や知識を共有しているのだと思います。また、東伊豆町の農家の方々はとても仲が良くて、大変なことは協力して助け合おうということがすごくあって、私たち自身がファームステイを行っているときもそういう場面は多く見ましたし、バーベキューをしようとなったときに、他の農家様たちも一緒に参加して、食卓を囲む機会もたくさんありました。

土橋――続いて、静岡大学の内藤さんからです。「東伊豆町の農家さんの強みは何だという印象を受けましたか」

近藤――私が一番の強みだなと思ったのは、農家様の仲の良さです。地縁的な面もとても強いと思うのですが、本当に他の農家の方々も目にしたことはありますが、東伊豆町ほど農家様の距離が近いというのは、すごく新鮮でありましたし、あまりないかなと思っています。それが強みだと思っています。

石坂――もちろん地縁的な強みもあると思うのですが、長年農業をしている方が多いので、経験が豊富であることも強みだと思いました。それから、経験豊富な農家さんから新たに農業を始める人へのサポートがとても手厚い印象を受けました。

土橋――続いての質問は静岡大学の増田さんからです。「提言で東伊豆町の仲の良さの生かし方などが挙げられていましたが、東伊豆町の土地や気候、農産物などを生かした提言を挙げた学生はいましたか」

近藤――土地や気候という面での政策提言はなかったと記憶していますが、東伊豆町は他と違って山が多く、急傾斜地が多くて平地が少ないと思ったので、そういう面でも機械化はとても難しいと思いましたし、高齢化がすごく響いてくる土地だと思いました。山を登るにも足腰が結構大変だとすごく思いました。農産物に関しては、柑橘系など結構限られたものが多いと思ったのですが、そこで6次産業化などの提案をしていた方もいた気がします。

土橋――芝浦工業大学の大井さんからです。「農業の分野で何かコロナの影響を受けていることはありますか」

石坂――コロナ禍の間も皆さん変わらずスーパーに行って食品を買っていたと思うので、基本的に農業分野はあまりコロナの影響がないと思います。ただ、農家の方々の中でもスーパーに卸している方はいいのですが、飲食店やレストランに卸している農家の場合は、コロナの影響で営業できなかったりして、レストランに卸せない分、ちょっと安くしてスーパーに卸したりしていて、収入が激減している農家もいらっしゃるようでした。ですから、どこに対して販売しているかということが結構関わっていると思います。

土橋――続いて、佐藤さんからです。「東伊豆町の弱みは何だと思いますか」

近藤――私はやはり、急傾斜地が生産現場であることかなと思っています。石坂君はどう思いますか。

石坂――東伊豆町に行く際、車ではなく電車で行く場合だと、熱海から鉄道が通っているのですが、1駅当たり200円とか、かなり料金が高くて、なかなか東伊豆町まで行きにくいというのがあります。ほとんどの人は熱海で観光して終わってしまったり、三島や沼津の方に流れてしまったり、伊東の温泉に行って満足してしまったりというふうに、伊東より南に人を引っ張ってくるのがまず難しいので、その辺の集客ができないことが弱みだと感じました。

報告４「静岡大学地域創造学環　東伊豆フィールドワーク」

１．東伊豆フィールドワークの概要

河村――静岡大学地域創造学環のフィールドワークは、授業の一環で東伊豆町に来てフィールドワークを行っています。NPO法人ローカルデザインネットワークの皆さんのご協力の下、「人が行き交う稲取」をビジョンに据えて1～3年生が活動に取り組んでいます。2017年度からこの

場所でのフィールドワークが開始され、1年生4人だったのが2019年度には最大10人まで増え、現在は2、3年生3人ずつの6名で活動しています。

東伊豆町フィールドワークでは、人が行き交う稲取を実現させるために、「UCHIRAを増やす」ことを目標としてさまざまなイベントを行っています。UCHIRAというのは、稲取に住んでいる人々や稲取のことが好きな人、平たく言うと関係人口や交流人口なのですが、私たちは親しみを込めてUCHIRAと呼んでいます。

2017、2018、2019年度は、UCHIRAを増やすことを目標としてさまざまなイベントを企画してきたのですが、2020年度からは「UCHIWAを増やす」ことを目標として活動していきたいと考えています。UCHIWAというのは、稲取で活動している人、生活している人を私たちは想定していて、さらに地元に根差した活動を行っていきたいと考えています。

そのために、地元の人々に終点を置いた活動を実施し、地元の人々の潜在的なニーズを知りたいと考えています。例えば、インタビュー調査や地元の人々とのコミュニケーションが取れる活動を行っていきたいと思っています。

今年度からはコロナ禍ということもあり、ダイロクキッチンから発行されている「ダイロク通信」という新聞に、2020年5月から東伊豆町フィールドワークも1枠お借りして、活動を地元の人々に向けて発信しています。

2. 主な活動内容

今までの主な活動内容を説明すると、2017年度にはハートプロジェクトというイベントを実施しました。Instagramを使用して、若者に向けて稲取の情報発信することをコンセプトに実施しました。2018年度はハーバリウムワークショップ、雛フェスでのライブペイント、ハーバリウムワークショップの出店を行いました。2019年3月に、新たに雛フェスというイベントができて、静大フィールドワークもその出展者として携わりました。2019年度は、INATORI QUESTというものを12月に開催しました。ロゲイニングという既存のスポーツをベースにした新しい観光コンテンツを創出しました。

まず、2017年度に行ったハートプロジェクトの概要について説明します。町にあるハートを発見して写真に収めながら町歩きを楽しんでもらい、稲取の良さに触れてもらうことが企画の趣旨です。静岡大学や常葉大学の大学生19名が参加してくださいました。大学生や若い女性をターゲットとし、稲取の良さを来ていただいた人の生の声で発信するもので、Instagramを使用してフォトコンテストの形で開催しました。

次に、2018年度のハーバリウムワークショップと雛フェスでのライブペイントについてです。雛フェスはひな祭りのときの開催だったので、女性の方に楽しんでもらえるようなコンテンツにしたいとの思いから、ハーバリウムというドライフラワーなどを瓶にオイル詰めしたかわいらしい雑貨を稲取バージョンで何かできないかと考えました。稲取らしさを詰め込んだハーバリウムという形をコンセプトとし、稲取を思い出してもらえたらという思いでハーバリウムワークショップを実施しました。当日は50人ぐらいに参加していただき、とても盛況でした。

ライブペイントでは、多くの参加者を巻き込みながら、大勢の人が携わってくださったことを視覚化できるように、モザイクタイルの形にした一枚絵を作りました。この制作に当たっては、地元の小学校を回って着色のワークショップを開いたり、雛フェス当日に来てくださった観光客の皆さんに着色を手伝っていただいたりして、多くの人が携わったものを一つの形として残すことができたと考えています。

3. INATORI QUESTの実施

次に、2019年度に行ったINATORI QUESTについてです。ロゲイニングというのは、時間内に定められたスポットを回ることによってポイントを獲得し、そのポイントの多さによって勝ち負けが決まるスポーツのことです。それを稲取で行うに際して、稲取を舞台にしたロールプレイングゲーム風のオリエンテーションゲームという形で、ゲーム性のある町歩きを企画しました。町の中に散りばめてあるメインスポット、サブスポットを回りながら、各スポットにあるミッションを達成することで獲得したポイントを競う内容になっています。ミッションが課されることによって地元の人と出会ったり、私たち静大生のフィールドワークメンバーと関わったりして、人と人とのふれあいを大切にしたイベントとなっています。稲取の町を利用したロゲイニング大会を開催することで外部から人を呼び込み、来ていただいた方に稲取の魅力をより知ってもらうことを目的に企画しました。

内藤――INATORI QUEST当日は、多くの方々に参加していただきました。稲取の町は坂が結構多いのですが、参加者の中にはスポーツウエアを着て坂を走りながら移動する方がいたり、家族連れでのんびり歩いて写真を撮りながら町を巡る方もいて、さまざまな形で稲取の町を楽しんでもらえたと思います。ゲームなので順位も一応付けました。ダイロクキッチンに集まっていただいて1〜3位のチームには豪華な賞品をお渡しし、とても盛り上がりました。

INATORI QUEST開催後、フィールドワークメンバーで反省会を開きました。その際、KPT法を用いてKEEP・PROBLEM・TRYの観点から反省点を挙げました。

KEEPは、これからも続けていきたいことです。準備面では広報に力を入れ、チラシを作成したり、ホームページを作って参加者の応募を呼び掛けたりしました。それから、Googleやドキュメントを有効活用して準備できました。本番中は走り回って楽しむ人が見られましたし、参加者と地元の人々の交流があってよかったと思ったので、これからも外部の参加者と稲取の人がもっと交流できるようなイベントを続けていきたいと思います。

PROBLEMは、問題点です。準備面で、デザインが結構ぎりぎりだったことと、メンバーごとの役割分担が平等でなく、1人のメンバーに仕事の負担がかかっていました。その点を改善してこれから企画していきたいと思います。

TRYは、これから挑戦していきたいことです。準備面では道具を早めにリスト化することと、役割ごとにチームを組んで動けば役割分担の不平等を解決できると思うので、そこを改善してこれから動いていきたいと思います。このイベントは事前応募形式だったのですが、当日の飛び入り参加も歓迎できるような融通の利くイベントを今後開催できればと思っています。

イベントの後に参加者の皆さんにアンケートに協力してもらったのですが、その中でとてもうれしい声がもらえたので、このアンケート調査を基にさらにいいイベントを作っていけたらと思います。

4. ワークショップの企画

2018年度は先ほどのハーバリウムとライブペイントを開催したのですが、2019年度は雛フェスワークショップの企画を練っていたところ、本番1〜2週間前になって新型コロナウイルスの影響で中止という連絡が届き、結局開催できずに終わってしまいました。

予定していたのは、2018年度と同様にライブペイントです。雛フェス中、参加者に色塗りを手伝ってもらって、1枚の大きな絵を完成させることを企画していましたが、とても残念です。

それから、2018年度はハーバリウムのワークショップを行ったのですが、昨年度はフォト

フレームワークショップを企画していました。稲取の要素を詰め込んだオリジナルのフォトフレームを作る体験型ワークショップを、私たち2年生が企画していました。親子連れをターゲットにしたもので、親子で一緒にフォトフレームを作り、イベント中に撮った写真をその場で現像して、フォトフレームに入れて持ち帰ることができるのですが、そのワークショップも開催できず、とても残念に思います。

今年度の雛フェスはまだ開催できるか分からないのですが、もし開催できたらライブペイントとフォトフレームワークショップは行いたいと思います。それから、後期のフィールドワークから新しい1年生が加わるので、その1年生に新しいワークショップを企画してもらおうと考えています。

5. その他の活動

UCHIWAを意識した活動として、2020年5月から「ダイロク通信」の紙面の一部で、静大の今までの活動を地域の方にお知らせする「静大FWレポート」を執筆しています。担当者を毎月決めてレポートを書き、地元の皆さんに私たちの活動をより知ってもらおうと考えています。

現在、コロナの影響で現地へ行き活動する見込みは未定です。現地で活動できる日まで、オンラインでフィールドワークを行っています。今回の東伊豆学生サミットの運営も、その一環として私たち静大フィールドワークメンバーで行っています。東伊豆で活動している学生の様子や思いを知ることによって、新たな関係を築いて活動の発展を展望する目的で、この学生サミットを開催しました。

東伊豆学生サミットを開催するに当たって、参加学生にアンケートを実施しました。この後実施する分科会でも、このアンケートの結果がトークテーマの設定やメンバー構成をする上でとても参考になりました。本当にご協力ありがとうございました。

質疑応答

土橋（司会進行）――発表の補足になるのですが、先ほど内藤さんが発表してくださった2019年度のライブペイントのデザインは稲取高校美術部の学生さんが協力してくださり、デザイン案も地元の人と一緒に考えたのですが、今年は中止になってしまったので、来年はぜひ実施したいですね。

芝浦工業大学の粟竹さんから質問が来ました。「イベントの効果などのフィードバックがされていてすごいと思いました。コロナ禍ではオンラインベースでイベントが行われるということですが、今後どのような企画ができると思いますか」

河村――今後の見通しが割と立ちきっていない状態ではあるのですが、今回の学生サミットの運営に当たってオンラインの可能性も結構感じたので、うまく使えればいいと考えてはいるのですが、やはり私たちの行ってきた活動のベースとして、現地に人を呼び込んで現地で体験することを結構重視していたので、オンラインベースだとそこがうまくできるのかという疑問も残っています。

後期からまたフィールドワークが授業として再開されますが、現地に行くことができるか現段階でまだ分かっていません。今まではリアルでの体験・イベントを重視してきたのですが、オンラインになった場合は、現在も新たな稲取の魅力発信などを「ダイロク通信」でレポートという形で微力ながら発信しているので、その発信の延長線上で何かできないかと考えています。

土橋――本部やFacebookライブに質問は届いていますか。

森田――東伊豆町役場企画調整課の森田といいます。予備知識のない方や一般の感覚からすると、地域創造学環はどういう趣旨の学部ですか。建築学部や農学部は一般の人にも分かりやすいと思うのですが、地域創造学環はそもそもどういった学部なのか分からない人もいると思うので教えてください。

河村――地域創造学環は5年前に開設された新しい教育プログラムです。学環という不思議な名前なのは、学部横断型の教育プログラムということで、静大の人文社会、理学、教育、農学、情報、工学、すべての授業が取れるという意味で「環」を使っています。

私たちのフィールドワークの活動も地域創造学環の主軸となっている学びの一つであり、地域創造学環のフィールドワーク先として県内16カ所が用意されています。私たち6名は東伊豆に配属され、実地で学びながら、地元の人と交流し、学生が自ら課題を見つけて、その課題を解決するプロセスや手法をその場で実践的に学んでいます。地域の経営の部分や行政的な観点、地域に根差した企業のお金の流れや人の流れを理論的に学んでいます。

森田――県下16カ所ということでしたが、振り分けは希望によるものなのですか。

河村――第5志望ぐらいまで用意されていて、希望にできるだけ沿う形で配属が決まります。ですから、学生も自ら地域を選んだ上で、そこで何をしたいのか、自分がどういう問題意識を持っているのかという意識に基づいて活動しています。

森田――安心しました。では、今年度もよろしくお願いします。

河村――よろしくお願いします。

荒武――会場からまたご質問があります。「皆さんはどういった理由で東伊豆を選ばれたのですか」

内藤――1年生の後期からフィールドワークを開始するのですが、フィールドワーク先を選ぶに当たって前期にフィールドワークの報告会が学環全体であり、その場で先輩方のフィールドワークの活動状況を聞く機会があります。そこで私は東伊豆のフィールドワークの活動内容に興味を持ったのと、単純に伊豆という地域が素敵だと思ったことが理由です。それから、いろいろな方々の話を聞いたり、先輩から「人柄がいいよ」というアドバイスをもらったりして、自分の興味ともいろいろとマッチしたので東伊豆を選びました。

河村――選ぶのが1年生の夏ごろということもあって、私もなかなか明確な志望動機がなかったのですが、出身が岐阜県で海なし県なので、単純に東伊豆町の海の景色がすごくきれいだと思って、そこで活動したいというのが本当に大きな動機でした。

伊豆の中でも松崎町と東伊豆町があるのですが、東伊豆町を選んだ理由は、行っている活動が結構実践的だと思ったからです。やりたいことのビジョンが明確にある人たちが集まっている印象があるので、その中で自分のやりたいことや問題意識がはっきりしてきたことが大きい

と思います。

内藤――実践的なイベントを実施することが多いので、単純に自分のスキルアップもできると思いました。私も動機として自分のスキルアップがしたいというのがあります。

土橋――私は荒武さんが一度、授業に来てくださったときに話を聴いたり、夏に実施されていた空き家のツアーのようなイベントに参加したりしたときに、東伊豆にすごく魅力を感じたのと、自分自身は静岡市に住んでいるのですが、遠い所のフィールドが良かったというのがあって伊豆を選びました。

荒武――フィールドワークを担当していただいている阿部先生から、「東伊豆フィールドワークの学生の倍率は高い」というコメントもいただいています。

土橋――確かに新1年生も東伊豆の志望がとても多いです。
　続いて、下田高校の森さんからの質問です。「最初のスライドで、学環内でコースが分かれているようでしたが、活動の分担はどのようになっているのですか」

河村――コースは元々5つあったのですが、今年度から3つになりました。地域サステナビリティコースと、私が所属しているアート＆マネジメントコース、内藤さんが所属しているスポーツプロモーションコースがあります。明確な分担は実はなくて、一人一人が自分のできることをやるという感じで、結構チームワークのようになっています。
　私はアート＆マネジメントコースに所属しているので、できるだけいいビジュアルのチラシを作成する役割を果たしましたし、何か企画するときもグループ全員で対話形式で進めているので、コースによる分断はあまり起きないようにしています。
　また、学年間によって「上級生のアイデアだからいい」というような階層構造もつくらないようにしていて、フラットな関係でいいものをつくるために全員でたたき上げていく感じで進めています。ですので、全員が主体的に取り組んでいるという感じです。

土橋――森さんからもう一つ質問があります。「フィールドワークの頻度や活動期間はどのぐらいですか」

河村――フィールドワークは前期（4〜7月）は月に1回程度、計3回行っています。1泊2日で行っているので、前期は計6日間になります。後期も同じように1泊2日を3回行っているので、現地に赴くのは計12日間になります。それ以外に、先ほどのINATORI QUESTのようなイベントをつくるときはどうしても現地での活動だけで収まり切らないので、静岡にいながら学生間でミーティングを行っています。

土橋――工学院大学の渡辺さんからです。「ロゲイニングの目的地などはどのように選んでいるのですか」

河村――メインスポットとしては、先ほど芝浦工業大学さんが改修したと言っていた水下庵、ダイロクキッチン、むかい庵などを選定しました。稲取に来たらぜひここを回ってほしいとい

う意図を込めて選定し、人と人の対話やふれあいを生み出しながら、温かみのあるイベントをつくり上げたいという気持ちでミッションを付与しました。

それとはまた別にサブスポットがあり、結構分かりにくい神社や灯台の写真などを各所に散りばめながら設定しました。その意図は、歩いたり走ったりしながら町内を回遊するので、いろいろな場所に赴いてほしいということと、何かいいものを探すような気持ちを持って稲取の町を見てほしいという思いでサブスポットを選定しました。

報告５「東伊豆町包括連携協定締結大学」

1．これまでの取り組み

鈴木――東伊豆町総務課の鈴木といいます。私からは、自分が担当している女子大学との連携の話をしたいと思います。

東伊豆町がなぜ首都圏の女子大学と連携協定を結んで協働することになったかというと、東伊豆町は女性の健やかな成長と幸せを祈る伝統工芸「雛のつるし飾り」発祥の地とうたっており、そこをフックにして都内の女子大の皆さんと再ブランディング化を図り、人口減少や観光の落ち込みという課題を打破するべく、若い女性の発想力や調和力をお借りしたかったからです。町の魅力を再発見し、情報発信してもらい、課題を解決する取り組みを多岐にわたって行うことで合意し、四つの女子大学と人材育成協定・包括連携協定を締結しました。

2018年1月24日に駒沢女子大学と就職支援及び人材育成協定を結び、2019年には共立女子大学、昭和女子大学、跡見学園女子大学とそれぞれ包括連携協定を締結しました。その際には、太田町長も参加して東京で締結式を行いました。

これまで東伊豆町内でいろいろな活動を学生たちにしていただいています。まだ皆さんのように実際に何か町で発表するような活動にはなっていないのですが、実際に行っていることを簡単に説明します。

まず、町のことを知ってもらわなければならないので、町内の視察旅行を日帰りまたは宿泊で行いました。日帰りは昭和女子大学と駒沢女子大学が各1回、宿泊は昭和女子大学、跡見学園女子大学、駒沢女子大学が各1回で、2019年は延べ33人の学生に町を訪問していただきました。昭和女子大学からは、外国人留学生のインターンシップも町の宿泊施設で受け入れていただけないかというお話をいただいたので、中国とベトナムの学生4名を、稲取にある銀水荘さん、東海ホテル湯苑さんに受け入れていただきました。

特徴的なのは、稲取温泉旅館組合の女将の会に参加させていただいたり、女将体験をしたりして交流を図ったことです。このようにさまざまな観光施設、宿泊施設に協力いただいて、町内をほぼくまなく回ってきました。

町外での取り組みとしては、主に東京都内でのイベント参加や情報発信を行ってきました。昭和女子大学と行ったのは、「三茶・子育てファミリーフェスタ」での町のPR、朝日小学生新聞が主催する「朝小サマースクール」でのPRのほか、昭和女子大学の中にある地方創生プロジェクト会議にも参加させていただきました。

このほか、「雛のつるし飾り」の制作体験、玉川高島屋ショッピングセンター、東急百貨店、西武百貨店での町のPRなども各大学と行いました。町の方々といろいろふれあって学んでいただいた成果の発表の場として使い、学生に任意のボランティアという形で参加していただき、町をPRする広告物やカーネーションを配ったり、「雛のつるし飾り」に関係する子ども向けワー

クショップを行ったり、交流を深めている女将の会と一緒に観光PRをしたりしました。

それから、2019年度は新たな試みとして連携女子大学と民間企業女性社員の交流会を開きました。昭和女子大学のキャンパス内で行ったのですが、昭和女子大学の学生が東伊豆町について1年間学んだことを参加者の前で発表し、町の魅力を伝えた後、民間企業の方々から会社の簡単な説明会を行っていただきました。続いて、女性先輩社員の方々に、女性社員としてどういったキャリアを積んできたかという体験談を話していただき、自分の進路を決める際の参考となるような会にしました。発表後、参加者全員で「雛のつるし飾り」の制作体験をニコニコ会（ひなのつるし飾り工房）の指導の下で行い、特産のイチゴなどを食べながら楽しく過ごしました。

今回、昭和女子大学、駒沢女子大学、跡見学園女子大学の学生15名と教員の方々、プラス民間企業から5社に集まっていただきました。民間企業からはコニカミノルタ、東急、東神開発、ユニリーバに参加していただきました。なかなかこういった機会はこれまで設けられなかったので、学生や先生方からは好評をいただきました。

2. 2020年度の取り組み

今年度（2020年度）は、コロナの状況でちょっと先が見えない状況ですが、2019年11月に跡見学園女子大学と協定を締結して、今年度からは少し落ち着きながら一つ一つの取り組みを行っていきたいと計画しています。皆さんには町内でいろいろなことをしていただいているのですが、女子大学連携に関しては都内で成果発表を設定するということで調整を進めています。

具体的には高島屋ショッピングセンターと東急百貨店の社員に協力を依頼し、2021年2月に開催予定の雛まつりイベントの企画・運営を学生に行っていただきます。8月あたりから月1回程度、関係商業施設の担当者と打ち合わせを行い、6〜7カ月かけて町のPRを行うことを企画しています。

その目的は、町のことを勉強し、大手企業との調整などを体験することにより、責任感を持って1年間取り組んでもらうことと、社会貢献を体感させ、彼女たちが学生時代の一番の取り組みとして就職活動などで胸を張って言える取り組みにすることです。

3. 今後について

今の目標は、東伊豆町と縁やゆかりを持つ女性を増やしていくことです。今回、女性の健やかな成長と幸せを祈る「雛のつるし飾り」をフックにして四つの女子大学と連携する流れになりましたが、東伊豆町の魅力を発信してもらうことがもちろんメインではあるものの、連携協定の項目の一つに人材育成も入っています。彼女たちには町内の人だけでなく、町に関わるさまざまな人と接点を持たせることにより、より実践的な社会勉強も含めた体験を積ませることができたらと思っています。関係者との調整や民間企業との交流会などを通じて、学生に新しい視点や広い視野を持ってもらうことにより、卒業後の人生に役立ててもらい、東伊豆町と関わったことで人生が豊かになったと実感できるような取り組みにしていきたいと思っています。

協力民間企業や連系女子大学と町がしっかり接点を持ち、いろいろな形でつなぎ役として機能することができれば、本当にさまざまな人たちが町を訪問し、愛着を持っていただくことができると思っています。

質疑応答

土橋（司会進行）――静岡大学の河村さんから質問です。「東伊豆町に訪問された参加大学生の

反応はいかがでしたか」

鈴木――学生に「東伊豆町に訪問したことがありますか」と聞くと、ほとんどの学生が「ない」と答えます。「伊豆には行ったことがあるけど、どこかは覚えていない」という回答もあったり、最初はイメージがまったくゼロの状態から入っています。昨年度までは1泊2日と日帰りの視察旅行を年に2回ほど開催していたのですが、「旅館などのホスピタリティがものすごく良かった」とか、細野高原の絶景ポイントに連れて行くと、「こんなにきれいな景色があるとは思わなかった」という反応が見られます。

土橋――東伊豆本部、Facebookの方から質問はありますでしょうか。

相澤（質問者）――いろいろな大学と連携されていたのですが、今後、協定を結びたい大学やその大学としたい活動などがありましたら教えてください。

鈴木――特にここだから締結したいというところはなくて、今もお話ししたように「雛のつるし飾り」という女性の幸せを祈るところを起点にしているので、今回は女子大学に特化して協定締結の話を持っていきました。ですので、この大学と結びたいというのはありません。

それから、連携している大学と行いたいこととしては、とにかく東京や神奈川など、東伊豆町がメインのお客さまとしているような地域の若い世代の方々に、東伊豆町を知ってもらうようなイベントを大がかりにやりたいと思っています。

先生の紹介

土橋（司会進行）――このイベントには各大学の先生も参加されているので、先生方をご紹介していきたいと思います。まず、明治大学の中嶋先生です。

中嶋――四つの大学のお話を聞いて、すごく勉強になったという印象があります。特にまちづくりやふるさとづくりは非常に学際的な分野で、間違いなく農業だけでなく建築学など、フィールドを生かしたいろいろな領域の学問が知恵を出し合ってやっていくべきだということをつくづく学びました。特に空き家問題は地域にとって大きな問題になっていて、これは日本全体の問題なのですが、この点についての一つのヒントを出してくれているのではないかと思いました。

やはり単独の大学でやるよりはいろいろな大学が協力しながら、年に1回ぐらい、こうして集まって一緒になって何かができる機会があると一層いいのではないかと思いました。そういうマッチメイクのようなものを荒武さんにいろいろしていただいているのだなと思うと、私の方でも協力して参加させていただければと思っています。すごく勉強になったというのが感想で、他の大学が行っている活動が素晴らしいと思ったので、明治大学でも負けないようにしなければとつくづく感じました。

土橋――続いて、静岡大学の阿部先生、コメントをいただけますでしょうか。

阿部――私も、複数の大学がこんなふうに発表し合う機会があって本当にうれしく思っています。このようにいろいろな大学の学生が東伊豆町に集まるということは、東伊豆町が本当に太田町長さんはじめホスピタリティにあふれていて、学生たちが行きたがる環境をつくっていただいているおかげだと思います。ローカルデザインネットワークの皆さん方にもあらためて御礼申し上げます。

荒武――それから、工学院大学の西森先生も先ほどまでご参加いただいていたのですが、つい先ほど退室されましたので、皆さまによろしくお伝えくださいとのことでした。

グループディスカッション　感想共有

土橋（司会進行）――グループディスカッションについて感想共有をしていただきたいと思います。各テーマでディスカッションを行った内容の報告と感想を述べてもらえたらと思います。

観光テーマ

河村――観光の分科会では、まず観光の資源となり得る東伊豆町の魅力は何なのかという問い掛けから始まって、5人で話していくうちに地元の人の懐の深さ、結構ナチュラルに話し掛けてくれる人情味、人と人の距離の近さではないかという話で盛り上がりました。そこから他の分野と観光を結び付けたときに、建築であれば、新たなものを作ったときに人が訪れてくれるような文脈を乗せることができるのではないか、農業であれば、アグリツーリズムという言葉もあるように、農業と観光をうまく結び付けることもできるのではないかと思いました。

また、現在のコロナ禍の状況において、観光というものが産業として先行き不透明な中、新たな観光スタイルが求められており、観光の部分から少し離れて働き方の部分に焦点を当てたときに、今まで都内で働いていた人たちが観光とはまた違った形で東伊豆を訪れて、そこでリモートワークを行ったりするワーケーションという新たな方策も可能ではないかという意見が出ました。感想は工学院大学の小玉さんにお願いします。

小玉――今はコロナの影響で観光にあまり力を入れられないので、新しい観光の在り方を考えていかなければなりません。どんなことができるかということを考えると、やはり海が近くて、温泉があるという従来からある資源だけではなくて、人と人の近さ、人の温かみを生かして今後も観光を考えていけばいいという話し合いができたので、今後の活動に生かせていけたらと思いました。

建築テーマ

相澤――建築の分科会では、大学同士が連携して活動できたら良いのではないかという話がたくさん出ていました。コロナ禍で現地に足を運びにくい今だからこそ、今後の地域づくりに向けてオンラインで大学をまたいでワークショップをしたいという意見や、例えば芝浦工業大学のプロジェクトに他の大学の方が1日体験をするなど、そういった大学間の連携も取りたいという話がありました。

町の人に大学のこうした活動をもっとアピールしたいということで、今まで大学が行ってきた活動を一つのマップ上に可視化して、それを使って町の人に大学の存在や活動をアピールし

て、もっと町の人を巻き込んでこういう活動をしていきたいという話が出ました。感想は芝浦工業大学の粟竹さんに代表して述べていただきたいと思います。

粟竹――ずっと前から、東伊豆に関わっている大学生と何か一緒にやりたいと思っていて、だからこそ今回、学生サミットを企画してくれた静岡大学の方々にとても感謝しています。これをきっかけに来年に向けて、アフターコロナに向けてのイベントの話が具体的に今日出てきたので、何かこの後も連絡を取ってやれたらいいなと考えています。

農業テーマ

内藤――農業の分科会は、まず明治大学の報告に関する質問から入って、いろいろ話していくうちに、朝市で農業と空き家改修が連携できそうだという話題が出てきました。空き家を改修して農産物を置いて朝市を盛り上げたり、お土産を置いたりする連携の仕方もあるのではないかということが話題に出ました。工学院大学は、ニューサマーオレンジを利用したジャムなどをNew Summer Fest-Barで出店しており、そのような形で連携できるのではないかという意見をもらいました。

話していくうちに、観光農園というキーワードを頂きました。観光農園は、農家に観光客を集めるイチゴ狩りなどが代表的なのですが、その他にも柑橘系の収穫など、観光農園を生かしたイベントを何かつくり出せないかということで討論していました。その中で、私たち静岡大学が昨年行ったINATORI QUESTと農家がコラボして、例えばお昼ご飯を農家や空き家改修プロジェクトとコラボして出店するなど、そういう感じで三つのテーマの部分から連携できるのではないかという意見が挙がりました。感想は明治大学の近藤さんにお願いします。

近藤――私自身が学んでいる農学というくくりにとらわれ過ぎていたので、他の大学の異なった切り口からの視点はとても新鮮で、大変勉強になりました。今回話した大学の連携の方法に実現性があるかどうかは分かりませんが、今日話した内容が将来キーワードとなって、あれをやりましょうよ、これをやりましょうよという形につながっていけば素晴らしいと思いました。

土橋――各テーマのファシリテーターと感想を言ってくださった方、ありがとうございます。それぞれの報告を聞いて、これからの連携の可能性について見えてきたのではないかと思います。ぜひ連携の可能性を今日だけで終わらせずに、これからもつながっていければいいなと思います。

閉会

土橋（司会進行）――今日は東伊豆学生サミットに参加していただき、ありがとうございました。最後にNPO法人ローカルデザインネットワークの荒武さんからお話をいただきます。

荒武――なかなか東伊豆に来られない状況が続いてしまって、芝浦の空き家改修のメンバーに関しては当面の間、もしかすると今年度中、東伊豆に来ることはできないかもしれないという状況ですし、連携協定を結ばれている大学の皆さんなどもなかなかこちらに来られないという状況なのですが、このイベントを通して、この土地で何かしらアクションを起こしてくれてい

ることやとても参考になるアイデアや活動について知ることができたと思っています。

また、他の大学の皆さんとは会ったことはないけれども、こうして現代技術を駆使して今日のようなディスカッションができて、次につながる時間になったと思っています。自分自身も東伊豆をフィールドに活動させてもらっているので、ぜひとも東伊豆側の人間として、皆さんがやりたいことやこういうことができるのではないかというアイデアの実現に関わっていきたいと思っていますので、今後ともよろしくお願いします。

第 42 回 全国国立大学生涯学習系センター研究協議会　研究フォーラム

地域人材の育成と大学・生涯学習センターの役割

日　　時：2020年9月14日（月）13:20～16:15
開催方法：Zoomによるオンライン会議
プログラム：
（1）基調講演「地域魅力創造サイクルという発想」
　　講師：河井孝仁（東海大学文化社会学部教授）
（2）パネルディスカッション「地域人材の育成と学生の人材養成をつなぐもの」
　　パネリスト：菊地 豊（伊豆市長）
　　深澤準弥（松崎町企画観光課長）
　　宇賀田栄次（静岡大学学生支援センター教授）
　　増田彩香（静大フューチャーセンター運営ディレクター）
　　コメンテーター：丹沢哲郎（静岡大学理事（教育・附属学校園担当）／副学長
　　未来社会デザイン機構長）
　　ファシリテーター：阿部耕也（静岡大学地域創造教育センター長／地域連携室長）

全国国立大学生涯学習系センター研究協議会の前身となる「大学教育開放センター研究協議会」は、東北大学、金沢大学、香川大学の3大学からなる組織で、センター間の連携・交流の場として1979（昭和54）年に始動しました。1986（昭和61）年には徳島大学に大学開放実践センターが、1991（平成3）年には宇都宮大学に生涯学習教育研究センターが設置され、以後は毎年2大学の割合でセンターが設置されていき、2006（平成18）年には加盟大学が27を数えるまでとなりました。

当初は、基本的に省令による国立大学の学内共同教育研究施設として設置され、国の大学政策・生涯学習推進政策に呼応して全国へ広がったセンターでしたが、平成16年度の国立大学法人化以降は、各大学の主体性を発揮した大学づくりに舵が切られ、地域連携・社会貢献の窓口としての機能を強化したり、あるいは産学連携組織等との統合の道を歩んだセンターもありました。学内の組織再編による統廃合等もあり、第42回大会時には加盟大学数は21となりましたが、センターが担う機能や活動形態が多様化してきているとすれば、それだけセンター間の連携・交流の意義・効果は高まると考えられます。

大学開放を通した生涯学習支援、地域人材の育成・研修、行政職員等の力量形成等、中長期的な視野で人材育成に実績を残し、地域社会とのネットワークを構築してきたセンターですが、地域社会とのかかわりが大きい分だけ社会の変化・変動にも敏感に対応し、それを大学のあり方に反映させる役割を担っているのかもしれません。

第42回大会自体も新型コロナ禍に直撃され、各大学だけでなく自治体ともオンラインで結ぶ開催となりました。大学開放を通した生涯学習支援、地域人材の育成・研修、地域連携・貢献についても、対面とオンラインを織り交ぜ、かつ大学間ネットワークを活用した取り組みが求められています。その意味でも、全国国立大学生涯学習系センター研究協議会の果たすべき役割は今後ますます大きくなっていくと感じました。

基調講演

地域魅力創造サイクルという発想

河井孝仁（東海大学文化社会学部教授）

1．地域魅力創造サイクルとは何か

まず、「地域」とは何なのかということを考える必要があると思っています。地域はおそらく、エンゲージメント（engagement）という発想とプリンシパル（principal、依頼人・本人）＝エージェント（agent、代理人）の関係で成立していると思うのです。

地域は単なる地理的範囲にとどまるものではなく、あるいは人口という頭数にとどまるものでもなく、多様なコミュニティ、あるいはライフサイクルのようなものが連鎖する形でできていると考えられます。それぞれが多様に関わるようなエンゲージメントの発想がないままの地域はあり得ないだろうと思うのです。

「市民」は積極的に地域を担っていく立場にあるのですが、NPOや企業、行政というのは、あくまで担い手としての市民のエージェントとして動くのだろうと考えます。行政が地域を担うわけではないことはもちろんだと思いますが、行政をしっかり働かせるためにも市民の担い手としての意識が非常に重要になると考えます。

では、地域の担い手とは何なのでしょうか。単純に定住人口が多ければいいのでしょうか。政府が今まで取り組んでいた「まち・ひと・しごと総合戦略」では定住人口が非常に意識されていましたが、第2次の戦略においては関係人口（その地域には定住しないけれども、その地域に関わる人たち）の重要性が述べられています。私はそれをさらに、人口という頭数ではなく、地域に関わろうとする意欲をどれだけつくり出せるのか、そのときに地域の在り方、ブランドが大きなきっかけになるのではないかと考えています。

もちろんなんら定量化が行われないまま、何となく雰囲気で担い手をつくったり、地域人材を育成したりすることはできないだろうと思います。では、どこまでが地域人材なのかという線引きが本当に可能なのかということを考えたときに、これをどう定量化するのかという発想が重要になると思います。定量化されないままの事業はおそらく困難であり、市民に対する説明責任を果たすという意味でも、定量化が非常に重要であることは明らかでしょう。

そこで、定量化のためのあくまで一つの提案ですが、地域外から地域に関わろうとする人たち（地域外ターゲット人口）が、その地域に関わる意欲をどれだけ持っているのかを表すために、定住人口と意欲を掛け算してはどうでしょうか。意欲は、ネットプロモータースコア（NPS）というフレッド・ライクヘルドが提起した方法によって計算が可能です。この意欲と人口を掛け算することによって得られた修正地域参画総量指標（mGAP）を積極的に取り入れることによって、地域人材が実際に各地域に対してどれだけ力になっているのかを明確化できると考えています。

例えば、地元を知人に勧める意欲がある人もいれば、そうでない人もいるわけですが、調査で「あなたは地元産品を購入したいという気持ちはありますか」と聞いてみると、明らかに意欲の高い人たちの方が地元産品を購入します。あるいは、地元での就業意欲や地域で困窮している人に対して支援しようとする行動意欲なども相関していることは明らかです。そうしたと

ころからも積極的に意欲を高めていくことが必要なのだと思っています。

意欲を高める方法の一つとして、地域魅力創造サイクルというものがあり得ると考えています。地域の魅力を発散・共有し、それを編集することによって、地域におけるブランドを創り出していき、そのブランドを基にして地域を磨き上げていきます。あるいは、そのブランドを鍵にしながら共創参画を獲得していきます。こうした地域魅力創造サイクルという考え方によって意欲を高めることが可能であり、それによって実際の地域における状況を創り出すことも可能だと思っています（図1）。

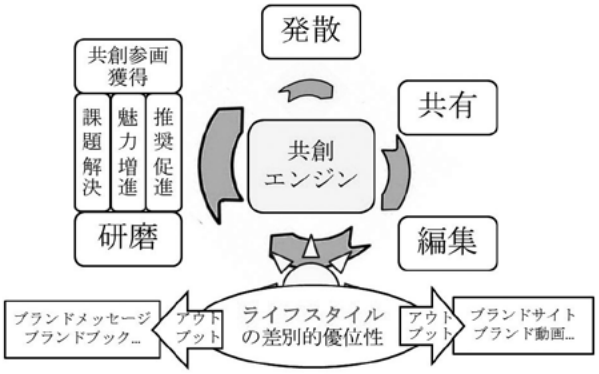

図1　地域魅力創造サイクル

では、ここで述べているブランドとは何かというと、地域におけるライフスタイル（暮らし）やステイスタイル(滞在)に関してどのような差別的優位性を持てるのかということです。時折、いろいろな形の地域ランキングがありますが、東京の大都市で可能なライフスタイルと地方の山村で可能なライフスタイルは明らかに違うはずです。これはどちらが望ましいかというのを表しているにすぎません。それぞれのまちでどんな暮らし方ができるのかを明確にしないまま順位を争うことにはまったく意味がないでしょう。ブランドを創ることが目的ではなく、ブランドを創ることをきっかけにして地域に関わりたいという思いを次々と増やしていくことができれば、その思いは熱を持ったしなやかな土台になっていくと思います。

何にとっての土台なのかというと、例えば大学が地域連携を呼び掛けたときに、地域側で行政の人間しか大学と連携したいと思っていないのであれば、地域連携組織の効率は極めて悪くなるでしょう。しかし、地域というものを語れる状況にしていく、つまり地域を推奨できる状況にしていくことが、結果的に地域をより良くしたいという思いにつながります。ですから、呼び掛けたときに反応してくれるような熱量がその地域にあることが、地域連携にとって非常に重要なのだと思っています。

そのような中から具体的なキーパーソン、実際に大学と連携をして何かを行ってみたいという人が見つかります。ですから、その人が孤立しないことが非常に重要です。その人をしっかり押し上げ、その人に感謝をするような土壌が地域にあるのかどうか、そうした土壌が熱を持ったしなやかな土台として、地域参画総量として地域に存在するのかどうかが非常に問われると思います。

2. サイクルは実際にどう動いているか

ここからは、具体的な地域魅力創造サイクル（共創参画向上サイクル）がどのように行われているのか、私が実際に地域へ出掛けていって何をしているのかをご紹介したいと思います。

2-1. 発散

最初のステージは発散です。先ほど地域の魅力という言葉が語られたと思いますが、魅力は一言で語れるものではないことは明らかでしょう。個別の魅力は非常にたくさんあります。

実際に私が地域に出掛けていってグループワークなどを行う際には、「住民の皆さんが地域だと考える地理的範囲の中で、50とか100という過剰な魅力を発散してください」と申し上げて

います。「あなたの町には魅力がありますか」と聞くと、普通は「お祭りがあって、自然がいっぱいで、気持ちの優しい人が多いです」と三つぐらいで終わります。しかし、あと97個を考えなければならないとなると、無理矢理でも町の中から魅力を探してくることになります。「観光スポットではないけど路地に咲いている椿が魅力です」という方もいるでしょうし、「3軒隣に住むおばさんがこの地域の歴史に詳しくて、よく立ち話をするので、その方も町の魅力ではないでしょうか」と言う方もいるでしょう。

それによって何が起きるのかというと、「異化」といって、普段当たり前に見えていた町の見え方が変わるのです。日常の中で生きているときにはいちいちワクワクしていられないかもしれませんが、こうしたワークによって町の中に多様な魅力があることを発見することができます。あるいは、最近転入してこられた方や地域外から関わっている人の視点もまた大事でしょう。すでに住んでいる方にとって当たり前になっているものが、魅力として認識されることになります。

2-2. 共有

次のステージでは、個別の魅力を個人として発散したものを、地域として、集団として共有していきます。個人的に提示された魅力がたくさんある中で、「地域Deepキャラバン」といって、実際に出掛けることで「こんな所にこんなものがあるとは気づかなった」と言うこともあれば、なかなか出掛けられなくてもインターネットを使って「ここにこんなものがありますよ」と言うこともできるでしょう。

あるいは、最近注目されているものにマイクロツーリズムという発想があります。インバウンドの観光客に来てもらうためにどうするかだけを考えるのではなく、地域の人たちが地域の魅力を発見するような観光ツアーのことです。星野リゾート代表の星野佳路さんはマイクロツーリズムについて、ポストコロナを考えたときに重要であるだけでなく、自分たちの町のことを語れる人たちをその地域に集積することで、地域の推奨力や参画力を高め、地域の実際の状況を動かす存在になると考えられると述べています。

そのようにして地域の魅力を創り出していくときに、まず個人が個別の魅力を大量に発散し、次に個別の魅力を共有することで相互に学び合い、共有された知恵を暗黙知化することも共有のステージで行われています。その上で個別の魅力を編集していくことが必要になります。

2-3. 編集

その地域で個別の魅力を活用することによって、どのような生き方ができるのかというと、東京の千代田区とは違う生き方かもしれないし、周防大島とは違う生き方かもしれません。でも、私にとっては特別な町なのだということを示すために、編集のステージが必要になります。

そのときに活用できる発想が、ペルソナ（persona）とストーリー（story）という発想です。ペルソナとは、物語の主人公として仮に設定した人格のことです（図2）。仮に設定した人格ではありますが、できるだけ具体的に名前を持ち、家族を持ち、仕事も具体的にその地域に関わってどんな役職でどのような形で行っているのか、男性なのか女性なのか、あるいは異なる性自認を持った人なのか、あるいは悩み、その地域で何を実現したいのかと

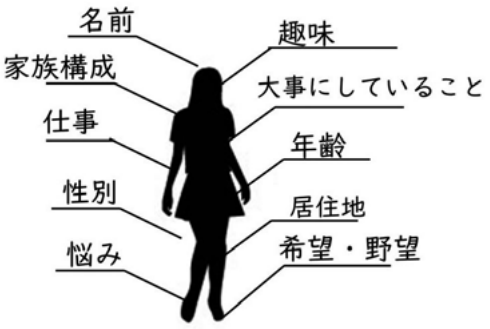

図2　ペルソナは具体的に設定する

いう希望や野望などをペルソナに付与して考えます。

もちろんこれは、その地域の魅力を発散・活用することによって希望や野望を実現できる存在です。突拍子もないような希望・野望ではなく、既に確認されている魅力、場合によっては今まで気づかれなかった魅力を上手に活用しながら、自分の希望を実現していくペルソナのストーリーを考えることが、その地域を語るために非常に有効になります。

ただ、ストーリーで大事なことは挫折です。地域の魅力を活用することによっていったん希望の近くまで実現したとしても、実際に地域はそんなに簡単に幸せになっていくわけではありません。いろいろな形で挫折があるでしょう。この挫折を、地域に関与したり、地域の魅力を活用したりすることで乗り越えていくという考え方をストーリーの中につくることが重要だと思います（図3）。

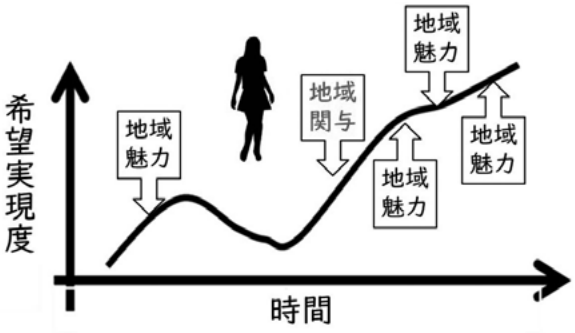

図3　ペルソナのストーリーを考える

A.J.グレマスの行為項モデルでは、まず主体という存在があり、その主体に対して援助者がいて、それによって主体がいったん成長しようとするのですが、そこに対して反対者が現れます。それによって、主体は自ら動く存在ではなく、人に動かされてしまう客体になります。しかしその客体に、ある送り手が何らかのものを送ることで、この客体は受け手になります。これが物語の基本構造としてあるのではないかというのです。

具体的な事例では「白雪姫」が面白いと思います。能天気な白雪姫を7人の小人が助力するのですが、白雪姫が「私は幸せになったわ」と思っていると、継母が毒リンゴを送ってきて、結果的に白雪姫は客体として小屋で眠ってしまいます。小屋で眠る白雪姫に、送り手として王子がキスをすることによって、白雪姫が目を覚ますという話です。かつ、重要なことは、白雪姫がただ目を覚ますだけでなく、自分たちと王国のために何らかの活動をしなければならないと目覚める点だと思います。

この行為項モデルを地域にあてはめてみれば、まず原点の主人公（ペルソナ）がいて、それが地域の魅力を活用するのですが、挫折してしまいます。しかし、改めて地域に関与し、地域の魅力に触れることによって、主人公は挫折をしつつ希望を実現していきます。さらに、ここでとても大事なことがあります。希望を実現した主人公が、それだけにとどまらず、新たな地域の関与者に対しては地域の魅力として振る舞うことが可能になったり、地域に関与するきっかけをつくる存在に主人公が変わっていったり、主人公自身が挫折から立ち直るための地域魅力として存在していったりすることが考えられます。ですから、単なる「こんな暮らし方ができる」というストーリーにとどまらず、どのように希望を実現し、自らが担い手になっていくのかというストーリーを考えることもできるでしょう。

最近、私は能にはまっているのですが、能における「序破急（じょはきゅう）」も非常にこれに近いものを持っていると思います。序によってまず「期待の地平」を形成し、地域を前提とした上でペルソナ（主人公、シテ）が登場し、ペルソナが地域を経験します。その上で、ペルソナがいったん葛藤し、ワキの力によってペルソナが変身します。このワキが非常に重要なのだと思います。ワキが存在することによってシテである主人公が覚醒し、自らの現状に気づいていくという物語が能では多いと考えています。

地域の物語を考えるときに重要なのは、参加者一人一人がペルソナのヒストリーや人生観に

共感しつつ語り合っていくこと、現状の地域の魅力をさらに発展させることで、より良い地域をつくっていくという未来構想力を持つこと、言い換えればバックキャストを大事にしながら地域を考えることができれば、ペルソナを単なる地域の顧客としてではなく、主権者として、地域にとって意味のある働く人として捉えられる可能性があると思います。

ここで「顧客」とか「主権者」「働く」という言い方をしましたが、例えば地域には重い障害を持っている方がいたり、介護をしなければならない立場にある人がいたり、育児に追われながら何とか貧しい中でも暮らしを立て直そうとする方がいます。その方々は単なる顧客であり、働く存在ではないのかという疑問があるかもしれません。ここで大事なのは、働くことの中に感謝が含まれるということ、あるいはその人の存在によってもう一歩踏み出したいということが含まれるということです。

重度の障害を抱えたお子さんを持つお母さんに話を聞いたことがあります。「外から見ていると状況は何も変わっていないかもしれないけれど、私が朝、顔を見に行くと時々にっこり笑っていることが分かります。それだけで私は一日頑張ろうと思います」とおっしゃられました。そうした形で働ける状況をつくり出すことも重要なのだということをしっかり留保しながら、この点について申し上げたいと思います。

そうした形で、町の魅力を基礎として生まれる物語を組み合わせていく、あるいは個別の物語として重ねていくことによって、その町は、どんな状況にあり、どんな希望を持ち、どんな悩みを持っている人が共感できる地域なのかということが明確になると思います。単に子育てを支援できる町ではなく、どんな暮らしをして、どんな子育てをして、どんな課題を乗り越えながら、子どもたちが育っていく町なのかということを示せないまま、単に子育て支援を充実させているだけでは、地域の顧客をつくることはできるかもしれませんが、地域の担い手や地域人材をつくり出すことはいささか困難なのではないかと思います。

その地域ではどんな関係をつくりやすいのか、どんな行動をしやすいのか、どのあたりの関係濃度が濃いのかというのは、それぞれの町によって違います。だからこそ、連携が可能になるはずです。地域間競争ではなく地域間連携が、地域人材という発想の中ではとても重要だと思います。東京の港区から人材を奪って、われわれの町に引っ張り込むのではなく、港区にとっても有能な人がわれわれの町でも働けることが重要です。そうしたことが、このCOVID-19によって明らかになったとも考えられます。人は一つの地域に所属するのではないのです。

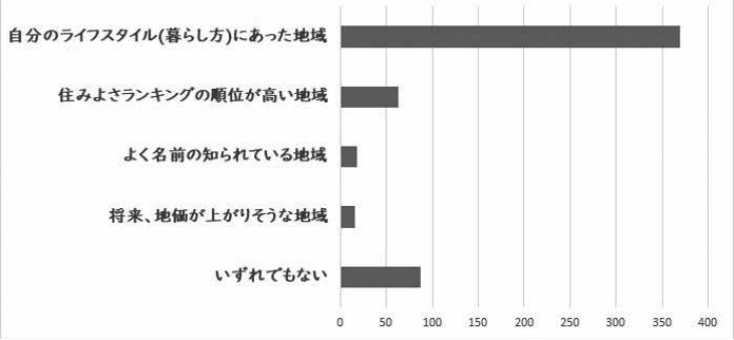

図4　ライフスタイルの優位性　河井（2019）標本500人

であれば、われわれの町をランキングで語るのはそろそろやめてもいいのではないかと思っています。われわれが求めるものはランキングではなくポジショニングです。ランキングが高いところに滞在したいのではなく、自分のスタイルに合ったところに滞在したいのです（図4）。しかし、地域は差別的優位性を持ったライフスタイルを提起できているのでしょうか。提起されていない以上、当然ながらその手掛かりになっているランキングに頼らざるを得ない状況があるのではないでしょうか。

であれば、地域魅力創造サイクル、共創参画向上サイクルを活用することで、魅力を発散し、共有し、編集することによって、ストーリーとしてつくり上げたライフスタイルをアウトプッ

トし、形状化し、それを例えばブランドメッセージ、ブランドブック、ブランドサイト、ブランド動画という形で形成していくことが、われわれの町を語るために必要になると考えます。

具体的な事例として、千葉県四街道市の「ドラマチック四街道」という動画が挙げられます。この動画は決して人を驚かすような類いのものではありません。実際に四街道で起こるような世界をこの動画で示しています（図5）。

図5　動画事例：千葉県四街道市
ドラマチック四街道プロジェクト
http://www.dramaticyotsukaido.com/

私が専門とするシティプロモーションでは、動画をどのフェーズで使うのかが重要になります。驚いてもらってまずこちらを向いてもらうための動画なのか、ブランドとしてのライフスタイルを明確に示すための動画なのかを明らかにしないまま動画のコンクールを行っても、意味がないのだろうと思っています。

図6　Webサイト事例：兵庫県尼崎市
尼崎市定住・転入促進情報発信サイト「尼ノ國」
https://www.amanokuni.jp/people/

動画だけではなく、兵庫県尼崎市では尼崎らしい暮らしをしている人たち（「尼ノ民」）を100人も集めて、こんなふうに暮らしているというのを紹介したり、奈良県生駒市では「いこまち宣伝部」の人たちが行政とは異なる視点で自分たちの町を語ったりしています（図6）。生駒という町は専業主婦比率が日本でも相当高い一方、高い教育水準と豊かな自然環境を持ち、交通の便も良い地域です。そうした各スペックを提供するだけでなく、そこでのライフスタイルを提供するものとしてこの「いこまち宣伝部」があります。そうしたものを創り出していくことも注目されます。

横浜市栄区では、実際に地域のブランドの基礎となる場所を巡るツアーを実施していますし、栃木県那須塩原市では那須塩原で生まれた子がどのように成長していくのかを描いた『たくちゃん』という絵本を作り、新生児の保護者に渡しています。これを読んでもらうことで、地域に関わるきっかけを持てたり、こんなふうにNPOが動いているということをいつの間にか学べたりします。このように自分たちの町を語る仕掛けが用意されているのです。

また、シティプロモーションでよくつくられるものにブランドメッセージがあるのですが、往々にして単なるキャッチフレーズになってしまいます。ブランドメッセージはきわめて集約されてしまうため、個々の物語を先ほどの絵本や動画で表すことは困難なのですが、まず気づいてもらうためにブランドメッセージが一定の意味を持つことは確かでしょう。であれば、それぞれの町がどのようなBattleField（戦える場所）、他とは違う差別的優位性を持っているのかをできるだけ示すことが大事なのだと思います。

それには差別的優位性を持ったライフスタイルを、宣言やメッセージとして提起することが必要になるでしょう。単にどんな暮らしができるのかにとどまらず、どんな未来をともに創ろうとするのかを示しているような言葉がおそらく大事なのだろうと思います。どんな人が共感できる町なのか、どうありたい町なのかという発想が重要になるのだろうと思います。

那須塩原市では多様なストーリーを形成し、そのストーリーからくみ出される力を言語化して、「チャレンジing那須塩原」というブランドメッセージをつくりました。これはメインコピー

にとどまらず、サブメッセージを「一歩踏み出す人を応援するまち」とし、ボディコピーとして、なぜ那須塩原という町がこういう言葉を持っているのかということを示して、これを自分たちのライフスタイルを支える基礎として持ちながら、積極的に地域を語れる状況をつくろうとしています（図）。

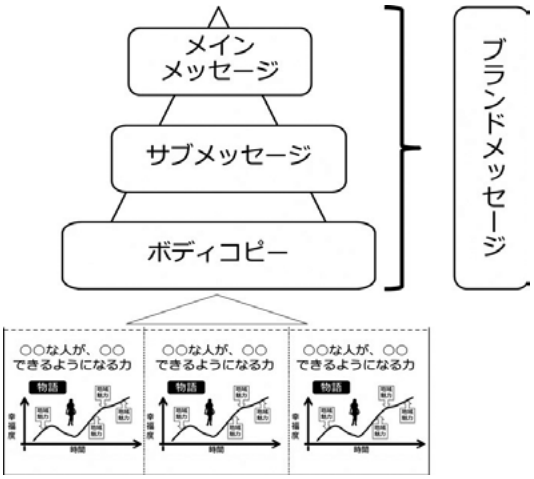

図7　ブランドメッセージで差別的優位性を持ったライフスタイルを伝える

さらに那須塩原市は「チャレンジing那須塩原」を展開させ、今は「エールなすしおばら　夢が動き出すまち」にブランドメッセージを進化させています。そのボディコピーには、どんな暮らしをつくろうとしているのか、どんな地域をつくろうとしているのかということを示した言葉を、もちろん市民の力だけでなく、プロの力、クリエイティブの力、行政の力も活用しながらつくりました。

ブランドメッセージによって語る地域をつくっていくことは、もちろん一定の有効性はあり、どんな暮らしができる町なのか、できる限り端的に表そうとします。ただ、地域の人材をつくるために言葉があることが大事だと言っているわけではなく、これをともに形成していくことが重要なのです。

例えば岩手県北上市ではブランドメッセージの総選挙が行われ、自分たちの町を考えるきっかけをつくり出しました。最初の発散のステージにやって来た市民は20人ほどでしたが、その後はソーシャルメディアも活用しながら200人がその魅力を共有し、編集の結果であるアウトプットをつくるためのブランドメッセージ総選挙には2000人が参加しました。20人から200人、2000人というふうに、地域に関わる意欲を高めていくことが重要になるのだろうと思います。

そうしたときに、ブランドメッセージをまとめてブランドブックを作る発想もあり得ると思います。那須塩原市の『たくちゃん』や生駒市のライフスタイルブックは、一つのブランドブックだといえるでしょう。ブランドブックは、それぞれのブランドをしっかり明らかにした上で、われわれがこれからこの地域で希望を実現しようとする人たちに渡すものであり、しかもそれが単なる物語ではなく、具体的な定量的・定性的データによって裏打ちされていることが必須です。トータルとしての言葉であるブランドメッセージやボディコピーを活用するのであれば、こうしたところに使っていくという発想が大事になると思います。

ウェブサイトや動画、ツアー、SNS、ブランドメッセージといったものをアウトプットするときには当然、プロが伴走することも重要でしょう。その上で、一定の地理的範囲をしっかり意識でき、われわれがどこについて語っているのかが明確になっている内容であること。地域の記憶を掘り出していくことで、現在住んでいる人たちが納得できるような仕掛けをつくること。完璧なものをつくるのではなく、まだ不完全なところがあるから皆さんと一緒につくりたいということを提起すること。そのためには単なる要素の羅列ではなく、編集という発想によってライフスタイル、ステイスタイルの可能性を伝えることが大事になると思います。

それができれば、われわれは単純に「この町が発展するためにあなたに来てほしい」と言うのではなく、逆に「われわれはこんな町をつくろうとしているから、あなたの力が必要だ」という言い方ができるようになるだろうと思います。その上でともに地域を磨き上げること、積極的に地域を語る状況をつくり出すことが求められると思います。

2-4. 研磨

四つ目の研磨というステージでは、まず推奨促進をします。例えば先ほどの北上市では多くの人々の参画によって動画を制作し、栃木県宇都宮市では「住めば愉快だ宇都宮」という行政と連携してつくられた言葉にとどまらず、どう愉快になりたいのかという自分たちの思いを込めて、既に1000以上のロゴを作りました。そのようにして自分たちが町をともに語れるようにする状況が、この研磨のステージでは求められます（図8）。

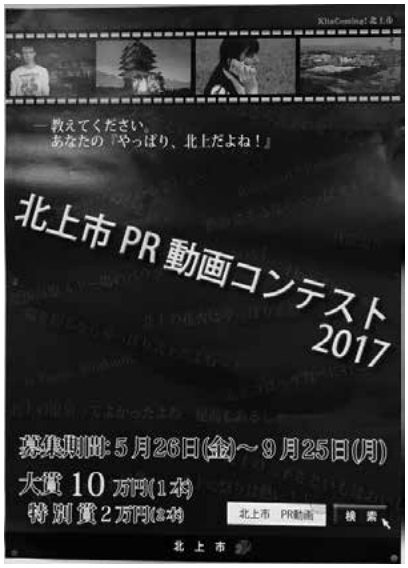

図8　推奨促進事例：岩手県北上市

さらに、研磨のステージを活用して実際に地域を磨き上げることが求められるでしょう。われわれは誰に対して語ることができるかというと、都会が大好きな人たちに山村の魅力を語るよりも、自然の中で苦労しながらも0から1をつくり出したい人がわれわれとともに仕事ができる人であるというふうにターゲットの確定をします。ただ、それだけでは当然足りません。その方々がどんな暮らしを望み、何を希望として考えているのかをさらに分析することで、さらに成長するブランドになるためのコンテンツを充実させることが必要です。その結果、ブランドを磨き上げていくことになります。

マーケティングにおいては、よくSTPという言い方をします。セグメント（S）をした上でターゲティング（T）をし、ターゲティングに共感してもらうためにポジショニング（P）をするという考え方です。地域においてマーケティングや人材育成をしていくためには、まずはPが必要になるでしょう。地域は簡単につくれるものではなく、何百年、何千年という時間の中でできたものなので、われわれはどんな状況にあるのかを明確にするポジショニングをした上で、STPを回していく発想が必要になると思います。

そうするからこそ、地域の課題が見えてきます。われわれはどんな町を目指すのか、どんなライフスタイルができる町を目指すのかが明確になっているからこそ、課題になるのです（図9）。「隣の町にスタバがあるから、うちにも欲しい」というのではなく、「われわれの町の目的は都市的な生活だけではなく、そこに対して新しい形を産出することである」と考えるのであれば、そこで必要なコーヒーショップはスタバなのか、あるいは新たな形のコーヒーショップなのかを考えられるだろうと思っています。

提起したブランドストーリーやライフスタイルを実現するためにこそ施策展開はあり、われわれは誰に共感してもらえる町なのかを明確にした上で優先順位を持った施策展開を行い、この施策をつくり出すために連携可能な市民を発見することが求められると思います。具体的には、ブランドマネジメント市民会議のようなものがあってもいいのではないでしょうか。この町の施策はブランドに本当に沿っているのか、逆に状況が変わってきたのであればブランドを革新する必要があるのではないか、そう考えたときに、例えば

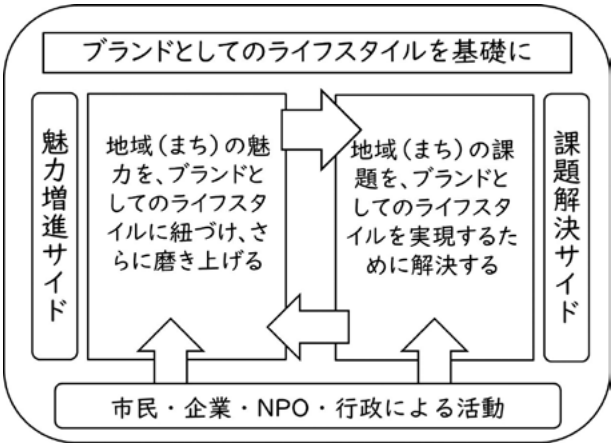

図9　魅力増進・課題解決の留意点

「サードウェーブコーヒーを導入しよう」「ドローン特区を申請しよう」といった極めて具体的な議論になっていくのだろうと思います。実際、那須塩原市では、「エールなすしおばら」なすしおばらファンクラブというものが、いわばブランドマネジメント市民会議として立ち上がっています。

ブランドマネジメント市民会議では、例えば単にお茶やお花を個別に勉強するのではなく、それがどのように地域の差別的優位性を持ったライフスタイルにつながっているのかという学びの場となり、われわれが目指すライフスタイルを基礎にした、市民による多様な創発の場となり、実際にその町らしい暮らしをしている人たちに対する支援にもなっています。こうしたことを行うことで初めて、町の空気や雰囲気が見えてくるのだろうと思います。

兵庫県豊岡市では「小さな世界都市―Local & Global City―」を掲げ、国際観光芸術専門職大学院を開学し、その学長として平田オリザさんを招きました。Local & Globalといいながら、公共交通機関が必ずしも十分でないからこそ、トヨタモビリティ財団と組んでMaaSの実験をしています。多様な形の助成や補助をそうした視点で活用していくことも大事だと思います。

ワインが好きな方にとっては、テロワール（ブドウが育つための環境）という言葉がしっくり来るかもしれません。同じブドウでもテロワールが異なれば、ワインの味は明らかに変わります。地域魅力創造サイクルが地域の人々にとってのテロワールを見いださせることが大事になると思います。

そして、それらの象徴としての施設やイベントを活用することで、さらにブランドを磨いていくことが必要です。例えば、茨城県小美玉市には、市民がビジョンを考え、具体的なスケジュールをつくっていく四季文化館「みの～れ」があり、自分たちの産品であるヨーグルトや生乳を大事にした全国ヨーグルトサミットを開いています。こうしたことができるならば、地域を語ることができ、地域に積極的に参画できるのです。

地域魅力創造サイクルによって共創参画を向上させ、ブランドマネジメントによって地域参画総量を持続的増加させるためには、継続的、多発的にいろいろなところで地域魅力創造サイクルを行うことが必要になります。どこかで行政主催で20人を集めて1回やって、その結果をブランドメッセージにしただけでは明らかに不足します。同じ地域でいろいろな場所、いろいろなときにこれが行われることで、いろいろな形で町を語れるようになることが必要です。

3. 関係人口で考える

現在、関係人口の議論が政府によって行われています。ただ、関係人口は必ずしも明確には定義されていません。定住人口でもなく、交流人口でもなく、地域の人と多様に関わる人々のことであり、あまりに多様過ぎて、どんな人たちなのかがはっきりしません。地域を一瞬にして変えるスーパーマンが関係人口なのか、ただ通り過ぎていく人が関係人口なのか、あるいは返礼品が欲しくてふるさと納税をする人が関係人口なのか。そういう人々がいると地域は持続するのかといった議論はこれからだろうと思います。

そのときに、定住人口の中にも交流人口の中にも、関係意欲を持つ人と持たない人はいるし、その町に住んではいないけれども父親の出身地ということで意欲を持つ人もいるし、自分が推しているプロスポーツチームのホームタウンというだけで推奨する人もいます。であれば、関係人口を頭数として数えるのではなく、先ほどのmGAPのような形で考えることもできるのではないかと思っています（図10）。

それをまた地域魅力創造サイクルにあてはめてみれば、関係人口創出サイクルとして活用することもできるでしょう。地域の中で魅力を考えるだけでなく、この町に関わってくれるかも

しれない人たち、あるいは関わった私たちが得意なことを合わせることによって、その地域でどういう意味のある存在になりながらその町をつくれるのかを考える必要があります。そのときに、既存のブランドのアウトプットがインプットされることによって、自分たちがこの町でなぜ意義がある形で存在できるのか、なぜ私が地域人材としてここにいることが腑に落ちているのかということが考えられると思っています。

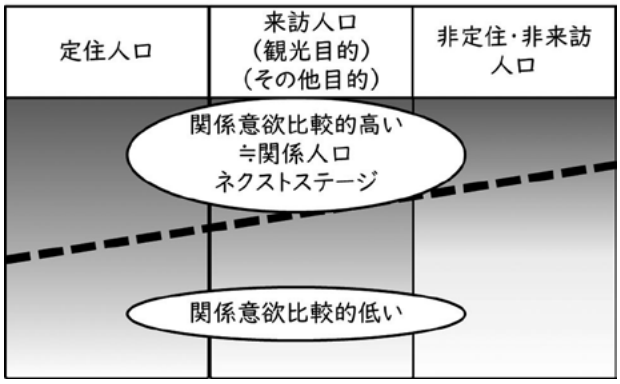

図10　関係人口を定量化

ブランドをつくり出し、それに地域魅力創造サイクルを多発的・高速に回転させることによって地域参画総量を増加させ、それによって熱を持ったしなやかな土台をつくるのですが、それだけではなく地域に関わる多様な人たちが積極的にこの町に関わってもらう仕掛けをつくっていく。それによる成功・失敗をすばやく検知する。言い換えれば素早く失敗をするためにも定量化は求められるのだろうと思っています。

定量化というのは、どれだけの人がそれぞれの町を勧めようとする意欲を持っているのか、この町をより良くすることに参加する意欲はあるのかを見るものです。10点満点で8点以上の人をプラス、5点以下の人をマイナスと見たときに、場合によってはマイナスの数字になるかもしれません。であれば、頭数を増やすことよりも意欲を高めることを併せて考えなければ、人口が増えることは地域における単なるクレーマーを増やすことにもなりかねません。

地域に関わり、ともに地域をつくる人材を育成するためにも、定量化による評価を積極的に行いながら、地域魅力創造サイクル、関係人口創出サイクルによって意欲を高め、多様な施策をつくることによって、意欲を持っている人たちが実際の状況をつくり出すことが期待されるのではないかと考えています。皆さんの地域人材をつくるための社会教育、生涯教育に、何らかの形で今の考え方が有効になればうれしいと思います。

パネルディスカッション

地域人材の育成と学生の人材養成をつなぐもの

阿部（ファシリテーター）――ただ今からパネルディスカッションを開催します。最初に、パネリストの方々から取り組みの内容について、自己紹介も兼ねて発表いただきたいと思います。

地域人材の育成と学生の人材養成をつなぐもの

菊地 豊（伊豆市長）

1．自己紹介

私は、48歳で市長になるまでのちょうど30年間、防衛庁、防衛省にいました。最初の約20年間で10回ほどの教育を受けています。防衛大学校が4年間、その後は久留米の幹部候補生学校に通ったり、富士学校で小隊長になる前、中隊長になる前に教育を受けたり、半年間ほど仕事を休んで英語の教育を受けたりしました。

少しイレギュラーなのは、1991年に1年間、32〜33歳のころ、民間企業に研修に行ったり、国連のモザンビークPKOに派遣されたこともありました。その後、ドイツに留学したり外務研修所に行ったりしているのは、ドイツの日本大使館に防衛駐在官で勤務したためです。そういった経歴をたどる者はみんな共通して留学もしますし、外務研修所にも行きます。つまり、先進国はどこでも、平時の軍隊は教育機関のようなものなのです。

ところが、48歳で自衛隊を辞め、49歳で市長になったら、ぱたっと違う人生になってしまいました。その中で伊豆市の職員、市民がどのような教育機会を得ているのだろうか、行政としてどのような教育機会を与えることができるだろうかという課題に直面しているところです。

2．東部サテライト「三余塾」への期待

そこで伊豆市としてはまず、東部サテライト「三余塾」にたいへん大きな期待をしています。三余塾がある場所は元々、私がいた中学校の場所でした。その場所を今度はアカデミズムに使っていただける可能性が出てきたことに大きな期待を抱いています。

2-1.「場」の提供

伊豆市は、全国市町村ブランドランキングが常に20位前後なのです。しかし、ご多分に漏れず人口減少が著しく、なかなか厳しい状況に直面しています。逆に、ブランドランキングがそれだけいいということは、伊豆市が持っている「場」には十分な魅力があると思うのです。

例えば、天城連山です。川端康成が『伊豆序説』あるいは『伊豆の旅』の中で、「天城山系こそが伊豆の魅力である」と書いています。あるいは、天城山から北に流れる狩野川があります。天城山系から流れてきた溶岩によってできた素晴らしい川の景色があります。そして、西側の土肥町には駿河湾があり、富士山の景色があります。それから、伊豆半島全体の特徴ですが、温泉が多くあります。東部サテライトから歩いて3〜4分の所に湯の国会館があるのですが、狩野川が見えるとても素晴らしい場所です。

2-2. 大学生が活動するまち

その中で、大学生が活動するまちにもなっています。東部サテライトのすぐ近くにある天城小学校へ大学生に時々来ていただき、アカデミズムとして活動していただいています。そういったことが地域を活性化する大きなきっかけになるのではないかと考えています。

東部サテライトのすぐ前にある狩野ドームという体育館も大いに活用していただきたいと考えています。東部サテライトが入っている建物を狩野ベースというのですが、狩野ベースで研究し、狩野ドームで活動し、湯の国会館で汗を流していただければ、大学生の皆さん、教授陣の皆さんは楽しいでしょうし、それによって市民が元気になっていくと期待しています。

そして、より大切なことは、市内の皆さんと交流していただくことです。伊豆市の生涯学習のプログラムを見ていると、ペン習字や音楽、絵など、ほとんどが趣味の世界なのです。それはそれでもちろんいいのですが、もう少し知的好奇心を喚起するような活動もつくっていきたいと思っています。湯ヶ島小学校の跡地には、同じようにジオパークの研究拠点である「あまじお」を設置しました。

2-3. 域内の人材交流

そして、三余塾といって、人材育成に大変貢献した松崎町出身の土屋三余の名前を付けた場所で、地域の私たちや伊豆市以外の地域の皆さんと交流しています。よりアカデミズムな観点から課題を提供していただき、大学生の皆さん、教授、スタッフの皆さん、地域住民、私ども職員が一緒に学んでいます。

市の事業としてNPOサプライズに業務を委託して実施している「未来塾」にも静岡大学に入っていただき、私たちと一緒に地域づくりを勉強しています。

職員研修にも地域の皆さんや大学関係者の皆さんに入っていただくことで、レベルアップしていけると思っています。

2-4. 伊豆半島ジオパークとの連携

そして、私は今、伊豆半島ジオパーク推進協議会長の立場でもあるので、ジオパークとの連携には大いに期待しています。小さなセッションでいいので、なるべく国際会議も誘致したいと思います。通訳ブースはありませんが、英語だけで、通訳なしでも十分に小さなパネルは実施できますし、ここにガイド研修を組んでもいいでしょう。場合によっては小学校高学年ぐらいから中学・高校生まで、国際会議を地元で経験してもらうということも大いにあり得ます。そして中期的な課題としては、伊豆半島において世界ジオパーク会議を開催したいと思います。

そのときまでに東部サテライトとしっかり連携を取って、未来に向けての地球環境問題に真正面からぶち当たっていき、地域を持続可能な町にしていくという観点から、単に東京に行って勉強するだけでなく、地域の高校生、中学生、そして当市の職員、地域住民の皆さんが、この東部サテライトをベースに全国の皆さんとネットワークを通じて、人生を勉強で貫いていくことのできるまちづくりを進めていければと思っています。

大学人としての私の役割は？

宇賀田栄次（静岡大学学生支援センター教授）

1．はじめに

私は大学教員になって10年目になります。いわゆる実務家教員であり、民間企業勤務や起業を経験して、大学教員になりました。2011年に着任したときは、当時の「大学生の就業力育成支援事業」の特任教員として仕事を始めました。その後、産業ニーズの補助事業、専任教員になってからはCOC+事業に関わる中で、特に地域連携で阿部先生にもいろいろ声を掛けていただく機会が増えました。

現在、私はキャリア教育やインターンシップ、就職支援、それからフューチャーセンターの運営などもしています。改めて私自身の役割や追求していることについて自分なりに振り返ってみたので、お聞きいただきたいと思います。

2．大学生を育てる

まず私は、1年生の「キャリアデザイン」という授業を担当しています。COC+の背景もあって平成30年度からは必修になり、全部で8コマあります。授業テーマには、静岡大学で学ぶことの意義や、地域を学びの資源としてどう活用するかということも含まれています。1年生に向けてキャリアデザインの授業をしている意味を改めて考えると、やはり生徒ではなく大学生を育てることが私の役割なのだろうと思います。

学生とは、自ら学びを修める者ですので、学生には「自律と自立」の話をします。私なりの解釈ですが、「自律」に関しては、やるべきことや目標に向けて自分をコントロールすること、逃げないこと、自分との闘いであるというふうに説明しました。一方、「自立」とは、他に依存しないという意味ではなく、社会の一員としての役割を果たすために自らやるべきことをやり、さらに社会と関わる中で意見や考えの違いにどう折り合いを付けるかということだというふうに教えています。つまり、学生という身分を充実させていく上で、自律と自立を意識してほしいということです。

もう一つは、インプット、アウトプット、フィードバックを回していこうという話もします。つまり、知識を入れることだけではなく、レポートで文章にまとめること、発表すること、他者と議論することも重要ですし、さらにそれに対して自分自身が振り返ることも大事です。他者からの評価をたくさんもらうことで自分の自信になったり、足りないところに気づいたりすることにつながるのではないかと伝えています。

3．知的実践者を目指す

インターンシップの科目も幾つか担当している中で、私が担当している科目では、探究学習のプロセスを回すことも行っています。なぜこういうことを追求しているのか、改めて自分自身を振り返ってみたときに、学生には知的実践者を目指してほしいという思いがあるのです。つまり、知識だけではなく、常に実践者たれということも学生に話しているのですが、ただ実践するだけでなく、学びのサイクルをきちんと回すことが重要です。

大学生ですから当然、一次資料に基づいたきちんとした問いや仮説を持って体験し、その体験をきちんと振り返って自分の学びとして定着させるサイクルを、インターンシップを使って進めようとしています。ですから、知識と体験のサイクルを回すことをインターンシップの中では行っています。そこでは、社会で求められる力がいろいろな言葉で示されるのですが、こ

れを大人から聞くだけではなく、例えば「コミュニケーションとはどういうものなのか」ということについて自分なりに問いと仮説を持ち、体験を通して自らの言葉で表すことを大切にしています。

4. 気づきと学びのプラットフォームづくり

インターンシップは学部横断型で研修を行っているのですが、事前研修、事後研修とあって、3年前からは両方の研修会に地域の社会人を呼んでグループワークをしています。特に今は夏休みにインターンシップに行く学生が多いので、研修会は7月に行うのですが、学生のアンケートでは、そもそもインターンシップに行く前に社会人とのコミュニケーションに不安があるとか、自分がどういうインターンシップ先を選んだらいいのか分からないといった声がありました。

一方、企業のインターンシップ受け入れが拡大し、学生にどのように指導していけばいいのか、学生に学びを定着させるためにどのようなフィードバックをすればいいのか、社会人も悩んでいました。そしてわれわれ大学の課題としては、インターンシップに行くことが目的化してしまう学生が非常に多いと感じていました。これらを解消するために、社会人と一緒になってグループワークで気づきと学びを深めてもらうことにしました。さらに、10月の事後研修会では、その目標に対してどうだったかということを社会人と一緒に学んでいきます。

なぜこのようなことを仕掛けているのか、自分なりに改めて振り返ってみると、気づきや学びのプラットフォームをつくろうとしているのだと思います。ただし、それは学生だけのものではなく、以前学生だった人たちも同じように悩んで、同じように気づいて、同じように学んで、同じように動いてきました。あるいは、自分とは違う悩みを持っていたということも、学生が気づくチャンスになるのではないか。自分たちで学ぶだけでなく、地域の社会人から学ぶ、地域の社会人と一緒に悩む場をつくっていくことが大切ではないかと思っています。ですから、大学の場所ではあるのですが、大学に閉じられた資源だけではなく、地域や企業における資源もきちんと活用しながら、学生の学びを定着させていこうとしているのだと思います。

5. 社会にも自分にも主体的に関わる人材

さらに、プロジェクト学習にも関わっています。いわゆるproject-based learning（PBL）です。PBLの学習の中で企業が課題を出し、それにグループで半期関わって解決して、PDCAを回していく授業なのですが、振り返ってみると確かに地域課題の解決はあるのですが、課題解決をすることが私にとって、あるいは学生にとって目的ではないのではないかと感じています。

それは、課題解決という手段を経ながら、学生自身の主体的なキャリア形成を私は期待しているのだと思います。つまり、主体的に地域や企業の課題に関わることを通して、自分のキャリアにも主体的に関わってほしいのです。地域や企業の課題を外発的に「解決しなさい」と言うのではなく、やはり内発的な動機をきちんと持ってもらうためには、まず自分のキャリアや自分自身の主体性に気づいてほしいという思いがあることを、改めて自分なりに整理しています。ですから、もちろん課題解決も非常に大事なのですが、その課題解決に進むプロセス、あるいは至らなかったプロセス中で、気づきや学びを得てほしいと考えています。

そしてこの後、学生の増田さんから詳細を説明してもらおうと思いますが、2013年にフューチャーセンターを立ち上げました。センターといっても建物があるわけではなく、定例的に私の研究室に多様な方が集まり、あるテーマについて未来志向の対話を進めていき、場合によっては対話の中から何かアクションにつなげていくということもしてきました。なぜ大学をベー

スにフューチャーセンターを立ち上げようと思ったかというと、当時の学生を見ていて非常に素直で優秀で能力も非常に高い一方、社会や大人に対する不信感、不安感が非常に強いと感じていました。ですので、学生時代からそういう意欲の高い社会人とつながっていくことで自信になってくれたらいいなという思いでスタートしたのです。

松崎町に初めて行ったとき、学生がファシリテートしながら地域住民との対話の場をつくったのですが、ここで気づいたことがたくさんありました。恐らく増田さんから説明してもらえると思うのですが、やりながら気づいたことがとても多くありました。このような取り組みをする中で、私自身が追求していることについてご報告しました。

静大Future Center

増田彩香（静大フューチャーセンター運営ディレクター）

1．三つの柱

本日は、静大フューチャーセンターの5代目学生ディレクターという肩書でお話ししたいと思います。

私たちが大切にしている三つの柱は、多様性、対話、未来志向です。多様性については、ここで皆さまに説明する必要はないと思うのですが、性別や年齢などいろいろなバックグラウンドを持った人が互いに集う場であることを意味します。それから、議論や討論ではなく、お互いに受け止め合えるような対話をするようにしています。それと、ありたい姿から逆算する思考をしていくことを大切にしています。バックキャストという言葉が河井先生のお話にもあったように、私たちもそうした思考方法を大切にしながら対話を進めています。

2．フューチャーセンターの運営と定義

静岡県は他県に比べてフューチャーセンターの数が多いという特徴があり、西部から東部にかけて現在11団体が活動しています。

その中でも静大フューチャーセンターはどのような運営をしているのかというと、私たちはコミュニティではなくプラットフォームだと考えています。開催までの流れはよくあるイベントなどと同じ形で、テーマを持ってきた方と私たちが打ち合わせをし、日時や会場を決定、告知をして開催します。

フューチャーセンターの定義は何かというと、広い意味では「不可能に向かっていくこと」だとフューチャーセンターの創始者が言っています。それから、フューチャーセンターアライアンスの公式ホームページでは、「ひとつの目的のために通常の組み合わせでは生まれないような多様な観点の関係者が集う場であり、各関係者が持つ知的資本や知識資産を掛け合わせて協業し、新しい価値を生み出す機能」と定義されています。

こうした定義を前提に、静大フューチャーセンターにはどんな定義があるのかというと、あくまで5代目の私の解釈としては、多様な参加者が未来を創るプロセスを共有し、「新しい未来」に出会う場ではないかと思っています。

3．フューチャーセンターの機能

フューチャーセンターの最も大きな役割は、出会う場であることだと私は思っています。現代は本当に社会課題が複雑化していて、それに対して取り組もうと頑張る地域の方や組織を持っ

ている方はたくさんいらっしゃるのですが、コミュニティ単体では複雑過ぎる社会課題に取り組むには限界があると考えています。

そこで、フューチャーセンターができることは、プラットフォームであり続けることではないかと私は思っています。未来のステークホルダー（利害関係者）になるであろう人たちと出会うことでアクションにつながったり、どこか他人事に感じてしまう社会課題に対して当事者意識を持って活動する人と出会うことで、プロセスを共有して自分事化し、アクションにつながっていくのではないかと考えています。

機能としてもう一つ特徴的なのは大学で開催されていることです。地域や大学が各大人をつなぐ鎹（かすがい）機能になるのではないかという仮説も生まれています。私が思う鎹機能の具体的事例を持ってきました。

まず、私たちは若さ故に経験が浅く、ファシリテーターを務めても場のイニシアチブが取れません。これは非常にいいことだと思っていて、それによって上下関係に縛られずに場に主体性が生まれますし、大人同士のつながりがもっとフラットになると考えているので、静大フューチャーセンターの特徴として、大学であることは非常に大きな要素だと思っています。

過去にはカラーセラピストの方や科学館の職員、時には大学の先生からテーマをいただいたこともありました。

どんな方がどんな気持ちで参加しているのかというと、社会人では「今の学生さんが何を考えているのか知りたい」とおっしゃる方が多いです。それから、テーマに関心がある方、課題意識がある方や、知人の紹介という方もいました。学生の中には「何か始めたいけど自分はどう動いたらいいのか分からない」という方や「ちょっと暇だったから来た」という方もいました。

私たちはこれまで出張でフューチャーセンターを何度か行ってきました。南伊豆町で開催されているフューチャーセンターは毎年参加していたのですが、今年は世情柄、参加できなくて、また何かの機会で置き換えたいと思っています。静岡県内でも課題がたくさんあるといわれている伊豆地域で、「風の人（地域外の人）」である静岡市の学生と「土の人（地元の人）」である伊豆の人たちがともに伊豆の未来を考えていこうという会を毎年開いています。それから、テーマにゆかりのある地域で開催した方が楽しいと思うときは、その土地に出張してフューチャーセンターを開いています。

QR コードを貼ってあるので、私たちの活動に関心を持っていただける方や、最近はオンラインでも開催しているので、遠方から参加してみたいという方がいればぜひ検索していただけるとうれしいです。

地域人材の育成と学生の人材育成をつなぐもの

深澤準弥（松崎町企画観光課長）

1.「日本で最も美しい村」連合への加盟

松崎町は伊豆半島の西南部にあり、インフラとしては電車が走っていません。2次交通、3次交通がないとストロー現象が生じるので、高校を卒業するとどんどん関東に流れている状況です。人口は静岡県で一番少なくて6411人、2944世帯で、高齢化率も47.28％となっています。

そういった中で松崎町は平成25年、「日本で最も美しい村」連合に加盟しました。同じような規模の過疎化の課題が多い地域同士、手を取り合って何とか対応しようということで加盟しました。地域独自の体験価値や人の営みが生み出した美しさがあり、その土地でなければ経験

できない独自の景観や地域文化を持った村や地域の連合で、人口が減っても何とか持続可能な地域を存続させようと手を取り合った仲間となっています。

加盟に際して構成資産というものがあり、松崎町は「なまこ壁の建造物」「石部の棚田」「塩漬けのさくら葉」（桜餅の材料）が挙げられています。

かつては港を拠点に結構いろいろな人や物の交流があり、財をなした地区で、なまこ壁の建造物があちこちに残ってはいるのですが、最近は人口も減り、こういった建造物を維持するにもお金がかかるため、だんだん取り壊されているのが現状です。なまこ壁の保存に向けて今はいろいろな工夫をしています。今年度は景観計画を策定し、こうした建造物をどうやって未来に残していくかといった、持続可能な地域づくりに頭を悩ませているところです。

石部の棚田は、地域の方が13〜14年前に地域の財産を掘り起こそうと荒れ地を復田してできたものです。今ではオーナー制度や一社一村運動などを活用して、外からの人の力を借りながら保存しています。駿河湾越しに富士山まで見えることから、日本の原風景として見直されているところです。たくさんの方に知ってもらうため、ウインターイルミネーションということで、田んぼにLEDのあかりを設置して畔を照らすイベントも実施しています。

さくら葉は、以前は大木から採っていたようですが、今はワンシーズン終わると刈ってしまって、自分の背丈ぐらいの高さでたくさん採れるような収穫方法をしています。

2. 松崎町の課題

いわゆる「増田リポート」で注目された「地方消滅」という言葉が衝撃的だったのですが、その後も人口流出による過疎化や少子高齢化、地域産業の担い手不足の進行は止まらない状況です。そこで町としても、自分たちで考えているだけではどうにもならないということで、静岡大学の叡智をお借りし、地方創生を手伝ってもらうことにしました。ちょうど大学が「地域課題解決支援プロジェクト」事業を始めたので、それに幾つも申請させていただきました。特に伊豆半島は問題が顕著で、世界的にも課題先進地域であることから、静大に課題解決の申請を出しました。

それがきっかけで、静大に地域創造学環ができたとき、松崎町には「商店街の再興」と「防災と観光」という二つのテーマのグループが来るようになりました。伊豆地域には大学がないので、18歳で高校を卒業するとほぼ全員が外に出ていってしまうという人口構造があります。私が大学生に来てもらってよかったと思う一番の理由は、その地域に大学生が入っていろいろ学んでいただく中で、実は刺激を受けたのは学生だけではなく、地域の方も非常に大きな刺激を受けたことでした。これは非常にありがたかったです。

大学に対して期待することは、やはり叡智（研究データや知識）の提供、大学生のパワーと視点、活気であり、われわれが大学に提供できるのは、各種課題や人脈の提供、コミュニケーション能力向上などのホスピタリティを豊かにすることではないかと思っています。

地域課題を巡って大人も子どもも関係なくつながることにより、最終的には人のつながりが地域を活性化したり、人の人生を豊かにする可能性があると思います。やはり地域課題解決は、地域の力だけでは限界があります。特に伊豆地域は人も知恵も不足していますので、大学との連携によって地域の活性化に貢献できるのではないかと考えています。

松崎町には、古い建物がたくさんあり、地域の人がいろいろ工夫をして町を盛り上げています。おばあちゃんたちがみんなでやっているレストランや、昔の古道を整備してアクティビティにしたマウンテンバイクのツアーなど、新しいものがだんだんできていますので、まだまだ可能性はあると思っています。

地域に課題があることで、課題解決学習のチャンスがあり、それによって人財育成ができると信じています。たくさんの課題を学生とともに解決することにより、実は地域の方々も刺激を受け、地域人材の育成が可能になっていくことを信じて、今後も大学との連携を、校外学習やいわゆる地域課題解決のリカレント教育などにも広げていきたいと思っています。

討論

阿部――自己紹介も含めて取り組みについて一通り紹介していただきました。大学との連携を図って地域人材の育成拠点を整備する側の方、受け入れ先に学生として、あるいはフューチャーセンターの運営ディレクターとして訪れる立場の方、そしてそれをつないで大学教育をつくっている立場の方、さまざまな立場でご報告をしていただきました。

実は、4人のパネリストの方々はお互いちょっと知っている部分もあるし、初めて相手の取り組みをしっかり知ったということもあるので、まずフロアから質問をいただく前にパネリストで相互にご質問や感想、意見を述べ合っていただけるとありがたいです。

菊地――宇賀田先生、昔の資料を見ると、伊豆市が合併する前の天城湯ケ島町や修善寺町などは勉強会をたくさんしているのですね。私が市長になってからの12年間でもたくさんのワークショップをしてきたのですが、ほとんどが一過性なのです。ですから15年前、20年前の勉強会の成果を今活用していれば、どれほど良くなっていたかと思うのですが、現実に私が市長を4期やってもまだそういった状態が続いているのです。ですから、まちづくりのセッションやシンポジウム、研究会というものが継続できるためには何か欠けているような気がしてしょうがないのです。何かヒントをいただけましたらありがたいです。

宇賀田――ヒントになるかどうか分からないのですが、私も大学での補助事業などたくさんのことをやっていて、運営していくには多分、二つの車輪が必要なのだろうと思っています。一つは連携、もう一つが協働です。連携というのは、顔が見える関係を永久的につなぐ場です。協働というのは、いろいろな成果を短期的に追い求めていくことです。恐らく協働だけではどうしても次につながらないことが出てきますし、連携だけでは成果が出てきません。両方に比重を掛けようとすると、どうしてもなかなか成果を共有できなかったり、長期化しなかったりします。

そこで、連携の枠組みでとにかく担当者が代わってもきちんと回っていくこと、担当者が代わってもまた違う担当者が手を結んでいくことが求められます。大学においても、学生はどんどん代わっていきます。その中でもきちんと学生が同じようにアクティビティに入れるような信頼関係づくりも含めたものが、連携として必要です。協働はやはり短期的なものを追求していくものなので、私が今までやっている中では、連携と協働のバランスを追求していくことがとても大事だと実感しています。

阿部――それでは、宇賀田先生からどなたかに振っていただけますか。

宇賀田――私も菊地市長にいろいろ聞きたいことがあります。先ほどご紹介していただいた東部サテライトへの期待は非常に大きいと思いますし、以前の阿部先生の調査でも、自治体が大学に期待することと大学が考えているものには差異があるということでした。大学は専門的な知識などを自治体に対して期待しているのではないかと思っているのですが、自治体はやはり学生に来てもらいたいという要望が非常に高いと思うのです。特に学生への期待という点では、市長はどのようにお考えですか。

菊地――私にとっての論点は、まさにそこなのです。人間は本来、絶対に勉強することが好き

だと思います。それが学校に入って点数が付けられるようになると、だんだん嫌いになってくるのです。学ぶということは本来、とても楽しくて大好きなのに、いつの間にかそうなってしまうのです。

ですから、その知的な好奇心、知的な関心を学生に喚起してほしいのです。私もジオパークの会長になってから世界のいろいろな所で国際会議に出席しましたが、どう考えても二つの空港（静岡、羽田）から2時間で来られて、多様性のある伊豆半島はいい所なのに、その先がなかなかないのです。ですから、伊豆半島を題材にしてもいいし、伊豆半島で別のテーマの国際会議でもいいし、学生と一緒に勉強する場でもいいし、伊豆に住み続けるのだけれども、すごくアカデミックで知的な勉強もできる機会をつくってほしいのです。大学にお願いするだけでなく、私自身もプレーヤーの一人としてそういう場をつくっていければと思います。

阿部――ありがとうございました。それでは増田さん、どなたかに振ってください。

増田――私も普段、深澤さんとお話しできる機会がなかなか少ないので、深澤さんからお話を聞きたいと思います。

松崎町は私の同期や先輩、後輩を受け入れていただいていますし、最初に地域創造学環に関わってくださった地域の一つなのですが、4年目に入って、学生が地域に何かこういう成果物を残してくれたというものがあれば、ぜひ参考にしたいと思いますので、教えてください。

深澤――一番大きいのは、やはり学生がただの観光客ではなく、地域に関わりながら自ら学んで歩いたことで、地域の人にとって非常に大きな刺激になったことです。その刺激が、土を耕す行為になっていったり、次の方が来たとき、もしくは次のそういう課題に直面したときに、今度は水をやって芽を出すといったことにつながる大きなきっかけになっている面があります。

松崎町は元々非常に閉塞感があって、コロナでまた拍車が掛かったような面はあったのですが、学生が来てこの町のことを考えてくれたことによって、自分たちがプレーヤーにならなければならないという自覚を住民に持たせてくれたことはとても大きな成果だと思います。今後もそういうきっかけづくりは打ち続けなければならないと思いますし、ある程度刺激を与え続けないと、持続可能な社会をつくっていくのはなかなか難しいと思います。われわれも学生側も顔ぶれがいろいろ代わってしまいますが、われわれとしては担当者のレベルだけでなく、地域として受け入れる態勢をある程度構築していきたいと思っています。

そういう意味では、卒業しても関わってくれる静大OB・OGの方はたくさんいるのです。それはわれわれにとっても非常にありがたいですし、学生の方に第2、第3の故郷と言っていただけることは、それこそ持続可能な社会づくりに向けて大切なことだと思っています。ですから、一つの刺激を継続して与えてもらっていることへの感謝は今も続いています。

阿部――それでは、深澤さんからどなたかに。

深澤――せっかくですから増田さんにいろいろ聞きたいのですが、学生がこれから社会に出ていくことを見越したときに、こうした大人との接点がどのようにプラスになるのでしょうか。

増田――そもそも私が関わってきた大人の方たちは、フューチャーセンターに来てくださる方であったり、私は東伊豆町で2年半フィールドワークをしていたのですが、東伊豆町の皆さんであったり、それから三保の松原という地域でマルシェの企画などの活動を7年ぐらいしているのですが、そこで出会ういろいろな大人の方だったりします。

私は地元銀行への就職が決まったのですが、それもやはり活動がきっかけでした。一番ダイレクトにつながったのは、活動を採用担当者の方が知っていてくださって、採用活動の際にも声を掛けていただいたので、その点でもダイレクトにつながりましたし、そもそも私が大人の方から非常に学ばせていただいたので、社会人との会話の仕方が分からないということはあま

りありませんでした。10代の若いときからいろいろな大人の方が目をかけてくださっていましたし、私の失礼な態度なども皆さん大目に見てくださっていたと思うので、ゆっくり成長させていただけました。大人の方と就職活動で初めて会うのではなく、それこそ学生のうちから地域活動や自分が面白いと感じるもので、素敵な大人に出会う機会はたくさんあったと感じています。

阿部――パネリスト相互の質疑応答が一回りしました。チャットで皆さまからいろいろなご質問をいただければと思います。

鹿児島大学の小栗先生から「東部サテライト『三余塾』の内容について補足していただけないでしょうか」という質問です。これはコメンテーターの丹沢先生から補足していただいた方がいいような気もしますが、いいですか。

丹沢――静岡大学の丹沢と申します。三余塾は、伊豆市に限らず伊豆地域全体の持続的な社会構築を目指して本年7月に設立しました。組織としては、菊地伊豆市長が伊豆半島ジオパーク協議会の会長をされているのですが、そこで勤めていた優秀な研究員を静岡大学にリクルートしてきて、その彼が三余塾に常駐しています。それから職員も1名常駐していて、とにかくそこに誰かが必ずいるという体制をつくりました。

機能は伊豆市長も期待の中で少し述べられていましたが、一つは研修の場です。それは場所としてだけでなく、オンラインも含めてさまざまな研修の場を設定したいという思いがあります。それ以外には、既に地域の方がよく訪れてくれているという話も聞いていますが、そこでさまざまな方たちが出会う場としても使いたいと思っています。

今回お借りした場所は、隣に静岡鉄道さんも入ってきましたので、そういった地域の方たちだけでなく、地域の持続可能な発展を考えているステークホルダー同士の交流、情報交換の場にもなるといいと思っています。

それから、静岡大学は東にキャンパスを持っていないので、静岡大学が今どんなことをしているのか、特に地域課題解決という点でどのような取り組みを進めているのかという情報発信の場として使いたいと考えています。

それ以外にも個別的に伊豆半島を中心にして研究を進めている教員がいますし、学生たちが伊豆半島地域にフィールドワークでたくさん入っているので、まさに大学教員や学生たちがフューチャーセンターを学習や研究の一つの拠点とし、そこから伊豆半島のあちこちに出掛けていき、また戻ってきて振り返りなどをするような場として使えればと考えています。

なにぶんまだ立ち上がったばかりで右往左往しているところなのですが、菊地市長にも今後よりご尽力いただいて、充実したものにしていければと思っています。

阿部――続いて、宇賀田先生に小栗先生と宇都宮大学の佐々木先生から一つずつ質問があるので、続けて答えていただけますか。

宇賀田――まず小栗先生からは、「このプログラムで大学の専門教育あるいは専門性がどのように関与しているのか」というご質問です。

私の主観的な見方ですが、やはり論理的思考力だろうと思います。根拠を持って仮説を立て、それを実証していく、不具合なところを検証していく、その理屈をきちんと人に分かるように説明していく、あるいは企画を提案していくといったところは、どのような学びであっても恐らく一番大切になるところで、実践知としてもつながっていると思います。

その点では、佐々木先生からも実践的知性の質問をいただいていたのですが、そうした論理的思考力に基づいて何かをやりきって評価をきちんともらう実践知は、キャンパス内では得られないのではないかと思うのですが、このプログラムではそうした実践知が養われているので

はないかと感じています。

阿部――香川大学の長尾先生からは、「静岡キャンパスから遠方だけれども、どのぐらいの頻度でフィールドワークを行っているのか」という質問です。

フィールドワーク自体は正規の授業になっていて、1泊2日を半期で3回、前期・後期で6回が基本です。松崎町も、増田さんが行っている東伊豆町もそうですが、1泊2日と言っているのに3泊4日にしたり、いろいろなイベントを手伝ってくれと言われて倍の日程になったりもしています。それから、南伊豆はフィールドワークの受け入れ先にはなっていないのですが、「地元学」という取り組みでカルタを作りに1シーズンに1回行きますから、1泊2日を4回ぐらいします。私自身は松崎と東伊豆の両方を受け持っていたので、週1から10日に1回ぐらいの間隔で行っています。

時間的には、松崎も東伊豆も2時間半ぐらいでしょうか。東部サテライトは1時間半ぐらいで行けますし、東部サテライトの方が充実してきたので、フィールドワークに行く途中に東部サテライトにも寄りたいと思っています。

他に大分大学の岡田先生から「学生の継続的な関与・成長や地域との継続的関係づくりについて戦略を教えてください」というご質問です。これはどなたにお答えいただけますでしょうか。

宇賀田――継続的な関係づくりに関しては、連携というのは大人が責任を持たなければいけない場所だと思っています。安心して学生が活動するためには、大人がしっかり声を掛けられるというか、顔が見える関係を常に続けておくことは大切だと思っています。その点では、私自身もいろいろなところに声を掛けてもらえるような関係づくりを地域に対してもしていきたいと思いますし、声を掛けるのはハードルが高いというのはまずいと思っています。

大分大学　岡田――大分大学では授業を幾つか積み上げていくことによって資格や称号を出すという形で行ったのですが、それだと授業が個別に行われていて、それぞれの枠を越えたつながりのようなものがなかなかできないのです。だから、学生が自主的なつながりなどを持ちながら継続的に行う部分が少し弱かったと思っているのですが、静岡大学ではフューチャーセンターがあることによって、どのような学生のつながりや授業の枠を越えた協働のようなものができたのでしょうか。

宇賀田――連携と協働の中で、学生も自分のコミュニティでいろいろなチームとして活動しながら、学生自身も連携していくということが起きた場合、非常に継続的になったり、刺激になったりしています。ただ、これはわれわれがすべて仕掛けるわけではなくて、何となくメンバーを増やしたいという最初のきっかけから、あるいは協働している両者が結び付いて何かを刺激し合ったりすることから生まれています。学生自身のつながりも割と自然発生的ではあるのですが、こちらもある程度仕掛けながら、SNSでつないでみたりといったこともしてみました。

宇都宮大学　佐々木――戦略と戦術の違いというのは、学生の地域貢献にとって非常に重要なテーマだと思っています。学生は現場現場に対応した便利な戦術家的な知性は育っているように思うのですが、プランニングができたりするような戦略家的な知性が案外育っていないような気がするので、そういった面が次のステップに来ると思いました。

静岡大学さんでは進んだ学生ディレクターがいるので、そういった点でプランニングをして町全体を語れるような知性も育っているのではないかと思います。学生である増田さん本人は、こういった部分が役に立っているなというものはありますか。

増田――静岡大学の地域創造学環は学部ではなく教育プログラムの一環として動いているので、学生が自分で授業のカリキュラムを組んで、4年間学習して、単位を積んでいく運びになって

います。私はその中で、地域を経営すること、地域を今後どうやって継続させていくのかということを専門に学びたくて大学を選んで入っているので、それについて4年間勉強してきました。

東伊豆においても、例えば「増田レポート」の存在を、私は1年生のときに知りました。彼の論文はすごく賛否が分かれる論文なので例示としては複雑なのですが、消滅可能性都市がリストアップされているものを見たりして、彼はそれをどういうロジックで語ってきたのか、自分がこれから関わる東伊豆町や松崎町は本当に彼のロジックに当てはまって消滅してしまうのか、どうしたらそれを回避できるのだろうかという思考は、キャンパスでの学習と自分が東伊豆で学んできたこととを組み合わせて考えていきたいと思っています。

私は大学卒業以降も東伊豆や三保の地域に関わっていこうと思っているのですが、今後も地域で活動していこうと思えているのは、大学4年間、机上でも実践的にも勉強してきたからではないかと思っています。

宇賀田――多くの学生が地域でやっていることは、まさに佐々木先生がおっしゃるような戦術的な面が中心になっていくのだろうと思っています。戦略的な面は、場合によっては引き受け手の方に立って初めて気づくこともできるのではないかとも思っています。

これはまったくの私案ですけれども、私もインターンシップに関わる中で、例えば長期・有償で休みのたびに松崎町に行って、とにかく町役場の担い手を体験する側、つまりいろいろなものを受け入れる側に立つ経験を学生がしてみてはどうかと思うのです。つまり、戦術でいろいろやってきた学生の次のステップとして、臨時職員として雇っていただけるようなシステムがあればまったく違う景色が見られると思うので、戦略的な部分を社会人になってからも使えるようになるのではないかと思っています。

阿部――補足すると、生涯学習系センターとあまり関係しないフューチャーセンターを今回紹介したいと思ったのは、いろいろ面白いことが起こっているからで、フューチャーセンターは大学で行うことが多いですが、そこに社会人が必ず入ってきます。社会人がアジェンダを持ってくる場合もあります。その中で、大学生よりも若いメンバーが入ることもあります。例えば静大フューチャーセンターの取り組みが刺激になって、島田の方にフューチャーセンターができ、高校生や中学生、場合によっては小学生も入る可能性があるのです。そうすると、その地域に関わるのが大学生からではもったいなくて、もっと前の段階から地域や社会課題について考えるネットワークを、フューチャーセンターがつくれるような気がします。その点では、バックキャスティングでも何でも、この地域を何とかしなければいけないという思いを他人事ではなく自分事にすることが、学生からではなくもっと前からできるのです。

それから、フューチャーセンターだけでなくフィールドワークの取り組みも、高校生や中学生と一緒に行うことがだんだん増えてきました。イメージとしては、地域の高齢者からいろいろなことを聞くことから入ったのですが、実は深澤さんなどいろいろな方々に仕掛けをしてもらって、中学生や高校生と一緒になって何かをやっていくというのがあって、それが非常に期待されています。伊豆市長さんも多分、そういう取り組みをどんどんやってほしいというお気持ちなのではないかと思います。そういう意味では、将来の町の姿を考えるときに、大学生よりも若い世代が重要なメンバーになってくるのではないかという気がしています。

今回、「地域人材の育成と学生の人材養成をつなぐもの」というテーマでいろいろ報告や発表をしていただきましたが、私自身はこのテーマが理事会で挙がったとき、真っ先にイメージしたのが深澤さんでした。深澤さんは平成11年の社会教育主事講習を受講されているのです。その後、社会教育主事講習も静大の教育プログラムの一つだから、「いろいろ話があったら聞くよ」と言ったら本当にやってくれて、「地域課題解決支援プロジェクト」を平成25年から始めたと

きには真っ先に手を挙げてくれました。その後は、地域での学生の受け入れも、フィールドワークも、フューチャーセンターも深澤さん個人がしていらっしゃるのです。だから、深澤さんはこのテーマを一人で体現しているという感じがするので、今回ぜひ参加いただきたいと思いました。今日は発言していただいて非常にありがたかったです。

それでは、まだ質問がたくさんあるかと思いますが、パネルディスカッションの感想やコメント、まとめを丹沢理事からお願いしたいと思います。

丹沢――私は、地域課題解決や地域の構築といったところの前線にはいなくて、前線を応援するというか、前線の部隊をつくる立場にいます。今日は皆さんの前線での取り組みを聞くことができ、勉強になったと同時に、基調講演の河井先生の話も非常に刺激的で、いろいろなことを考えさせられました。

私が今日、話を聞いていて特に感じたのは、やはり人口がどんどん減少してシュリンク（shrink）していく中で、人々が幸福を感じられる社会をどうやってつくっていくのかということです。やはりバックキャストをどう取り入れていくかというのは、大きな課題だと感じました。つまり、今ある課題をまず解決していくのではなくて、地域が抱える課題を通してどんな社会をつくっていくのかということをそれぞれが考えていかなければならないと強く感じました。

その中で伊豆市や松崎町が、抱えている課題やどういった可能性があるかということの検討を進められていて、そこからさらに先に進んで、どういった社会を皆さんで描いていくのかということに取り組むと、いろいろな研修などが一過性で終わってしまうのをもしかしたら防げるのではないかと思いました。

そのためには、地域の魅力やブランド力を高めていくことが必要です。河井先生のお話で発散、共有、編集という言葉があったように、今まさに深澤さんや菊地市長が発散をし、それをどうやって町の中で共有していくかということで苦労されていると感じたのですが、そこに大学などが入って、編集していって、地域の未来像をつくるということに関わっていけたらいいと思いました。

と同時に、阿部先生からお話がありましたが、地域の中に人材をどうやってつくっていくかというのは大学もものすごく悩んでいるところです。それは大学単体ではできないことですし、恐らく企業や自治体などが関わってリカレントプログラムのようなものをつくっていくことは、われわれに課せられた大きな課題だろうと思っています。

いずれにしても、今日の話を聞いていて思ったのは、こういった一連の取り組みや課題解決を図っていくために、大学が果たせる役割はかなりあるということです。同時に、われわれも組織を大きくして取り組み始めてまだまだ時間がたっておらず、その力量がないということも感じています。今まで宇賀田先生、阿部先生など静岡大学のエースが活躍してくださったことを資産として活用しながら、大学としてもう少し前のめりで、ぐいぐいと入っていかないといけないと感じました。われわれはやはり未来を見ることが非常に大事なポイントで、悲観せず、行政も企業も大学も本当に連携して、明るい未来を見定めて、元気をそこでもらって、みんなで手を取り合って努力を重ねていきたいと思います。

今日は貴重な講演をしていただきまして本当にありがとうございました。私はただただ勉強させていただいたという印象です。

阿部――参加者の方々にも積極的に関わっていただいたこと、あらためて御礼申し上げます。これでパネルディスカッションを終了します。

地域間－大学間連携を通した課題解決

静岡大学地域創造教育センター長
阿部　耕也

地域連携・貢献と地域人材育成を推進するため、平成29年10月に開設された地域創造教育センターも4年目を迎え、実質的な活動を進めています。公開講座や市民開放授業等の大学開放事業、社会教育主事講習等の地域人材育成とともに、地域社会との連携を通した課題解決支援が当センターの重要な役割だと考えています。

持続可能な社会とすべてのひとのウェルビーイングを目標に、多様なステークホルダーと対話を進め、共創的なパートナーシップを確立し、未来社会を共にデザインするための組織として、昨年4月、未来社会デザイン機構が設置されました。サステナビリティセンター、防災総合センターとともに、地域創造教育センターもその一員となっています。本報告書で紹介した通り、地域の方々との対話を通し、バックキャスティングで地域社会と大学のあり方を構想しながら様々な取組を実践していくことにより、地域と大学との関係も次のステージに入ってきていると感じています。

また、地域に根付きながら、同じような課題や資源をもつ他地域での取り組みにも目を向け、刺激を得ることも重要で、国立大学生涯学習系センターや和歌山大学紀伊半島価値共創基幹との連携を図りながら課題に立ち向かうという方向性も大切にしたいと考えます。

平成25年度に始まった地域課題解決支援プロジェクトも8年目を迎えました。各地で取組が行われ、本号も含めた6冊の成果報告書にみるように、地域の様々な方々との交流を通して、学生も教職員もたくさんのことを学んでいます。様々な試行とその蓄積のなかで、具体的な地域課題を中心におきながら、教員だけを導き手とするのではなく、学生だけで学ぶのではなく、様々な立場の地域の方々と交流・協働しながら、実践的に学び合うことが、大学にとって不可欠であるとあらためて感じています。

これまでの報告書の中でも述べてきたように、地域課題解決支援プロジェクトは大学が地域づくりの担い手・パートナーになろうとする取組ですが、地域からの様々な働きかけ、協力、支援がなければそもそも成立しない試みです。これまで同様、地域の皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

静岡大学
地域課題解決支援プロジェクト成果報告書　第６号

発行日――2021 年 3 月 29 日
発　行――静岡大学地域創造教育センター
編　集――大谷 悦子
連絡先――静岡大学地域創造教育センター 地域人材育成・プロジェクト部門
〒422-8529 静岡県静岡市駿河区大谷836
☎054-238-4817　E-mail：kaiho@suml.cii.shizuoka.ac.jp
ウェブサイト――https://www.lc.shizuoka.ac.jp/
印　刷――株式会社三創